

これら3州の農耕地帯が限度一杯に拡大されて余地を残していないこと、高い技術を用いる農耕形態であること、各種のインフラが整備されており生産物の出荷、生産資材の購入を容易とする立地条件を持っていることなどが理由とされている。逆にゴヤス州やマツ・グロソソ州などの土地価格が低いのは、既存インフラの不備のほか農業前線を開発するための資金が欠乏しているためであり、とくに投資に対する融資の制約以降この傾向が強くなっている。

借地料の実質価格はエスピリット・サント、リオ・グランデ・ド・スール及びサンタ・カタリーナ3州を除いて全般的に上昇しており、また農地価格と年間借地料（いづれも1haあたり）の関係では州によってそれぞれ異っており、開発度の高いサンパウロ、リオ・グランデ・ド・スール、パラナ州において高い比率を示し、マツ

表55 農耕地価格と借地料の関係

州 別	1982	1983	1984
サンパウロ	20.74	18.94	22.94
リオ・グランデ・ド・スール	21.01	14.53	13.81
パラナ	13.92	11.22	13.17
ゴヤス	7.37	7.19	9.83
リオ・デ・ジャネイロ	10.11	10.61	9.60
ミナス・ジェライス	10.21	7.23	8.68
マツ・グロソソ・ド・スール	8.75	7.15	8.09
エスピリット・サント	8.41	6.50	7.74
サンタ・カタリーナ	7.57	5.72	5.37

出所：F.G.V.

表56 サンパウロ州の農耕地賃借料

区 分	年 度	現金 払 い	現物 払 い	指 数
現 金 CR/ha	1982	19,832	—	100
	83	43,850	—	72
	84	170,800	—	89
綿 15kg	1982	—	22.0	100
	83	—	20.0	91
	84	—	21.0	95
落 花 生 25kg	1982	—	17.0	100
	83	—	16.0	94
	84	—	16.0	94
米 60kg	1982	—	10.0	100
	83	—	8.0	80
	84	—	8.0	80
とうもろこし 60kg	1982	—	15.0	100
	83	—	10.0	67
	84	—	11.5	77

出所：IEA 毎年9月のデータ

表57

サンパウロ州における牧草地賃借料

区 分	年 度	価 格 CR	実 質 価 格 CR	指 数
年 間 借 料 1 ha 当り	1 9 8 2	11,931	284,451	100
	8 3	17,321	181,727	64
	8 4	69,677	223,921	79
月 間 借 料 1 ha 当り	1 9 8 2	1,166	27,799	100
	8 3	1,635	17,154	62
	8 4	6,538	21,011	76
1 頭 当 り 借 料 月 間	1 9 8 2	762	18,167	100
	8 3	1,156	12,128	67
	8 4	4,020	12,919	71

出所：HEA 毎年6月のデータ

・グロツ・ド・スール、エスピリット・サント、サンタ・カタリーナ州において低い指数となっている。

サンパウロ州については最近15年間農業構造は大きく変化しており、68/69年まで穀物が栽培されていた土地が次第に他の有利作物、とくに輸出作物やエネルギー代替え作物に切換えられてきた。すなわち、これらを代表する大豆、オレンジ及び砂糖キビの栽培面積は68/69年度に州内耕地面積（5.2百万ha）の15%程度であったものが、83/84農年には全栽培面積6.5百万haの46%を占めるにいたっており、逆の立場にあるとうもろこし、米及び綿の栽培面積はこの間52.3%より34.4%へと減少している。このような有利作物への切換えは工場が集中し、輸出港を控えるサンパウロ州のすぐれた立地条件にもとづくものであり、有利作物への切換えがすすむにつれ農地の価値も上昇して来たものである。

サンパウロ州内における改良を加えた農地の価格を分析すると、農地面積が大きくなるにつれて1haあたりの価格が下がっているのが観察される。85年2月の調査によると7.2ha以下の農地が1haあたりCr\$ 7,728,600であったのに対して242ha以上の農地になると1haあたり価格はCr\$ 4,427,900へと下がっている。

サンパウロ州内の借地料は84年11月頃より値上りを始めており、作物別では綿5.0%、とうもろこし15%、落花生と米の場合は前年並みの借料であった。一般に借地料は農産物価格の変動に応じており、作物の価格があがると借地料も上るのを常としている。

牧草地の場合は牛肉価格の変動に影響され、牛肉価格が上昇する場合牧草地の借料も上昇する。83年より84年にかけてサンパウロ州内では牧場が集中するアラサツバ、サン・ジョゼ・ド・リオ・ブレット、プレシデンテ・ブルデンテ等の地域で借地料の上昇がみられた。

2.4 農働及び賃金

サンパウロ州農務局農業経済研究所が行った調査によると、1974年より84年にいたる間農村労働者の実質賃金は継続して減少した。この間76年より78年にかけてはインフレ率に平行した推移をみせたが、79年以降は実質価値の減少を続け84年にいたっては実質価値で74年頃のレベルを下廻る状況にある。

83年と84年の賃金を比較するとすべてのカテゴリーの労働者について実質20%以上の下降がみられる。夫婦頭+35%、月給労働者(-)26%、臨時労働者(-)30%、耕地内に居住する労働者(-)27%といった状況であった。

時労働者の場合は、労働力使用の季節性に影響されるので失業率が大きく平均賃金を下げている。その実質賃金は過去10年間に40%の下落をみたとされている。このため84年中には臨時労働者を中心とした労働条件の改善要求の動きがみられた。最初の動きは砂糖キビ収穫の労働者が労働の強化に対する抗議の形で起り、続いてコーヒー、オレンジ栽培に従事する労働者の間にも労働条件、賃金の向上を要求する動きが続いた。これらの地帯ではコーヒーにしろ、オレンジにしろモノカルチャーが拡大されていくため、労働力需要の季節性が次第にはげしくなることや、インフレ下での実質賃金の低下に対する待遇改善の要求が行われた。

とくにサンパウロ州農村労働者の最大の集地帯であるリベイロン・プレット地方では抗議ストが行なわれ、団体交渉の結果、砂糖キビ、コーヒー、オレンジの収穫を行なうための数多くの協定が結ばれた。

これらの協定は労働法の遵守、すなわち週間1日の休日、13ヶ月給料の支払、年次休暇の権利、退職補償金等に関するものであり、更に事故の場合の保障システム、特別手当の支給、労働者輸送の安全等地域の特殊性にかかわる問題も含まれている。

表58 1980年を100とした年度別賃金比較

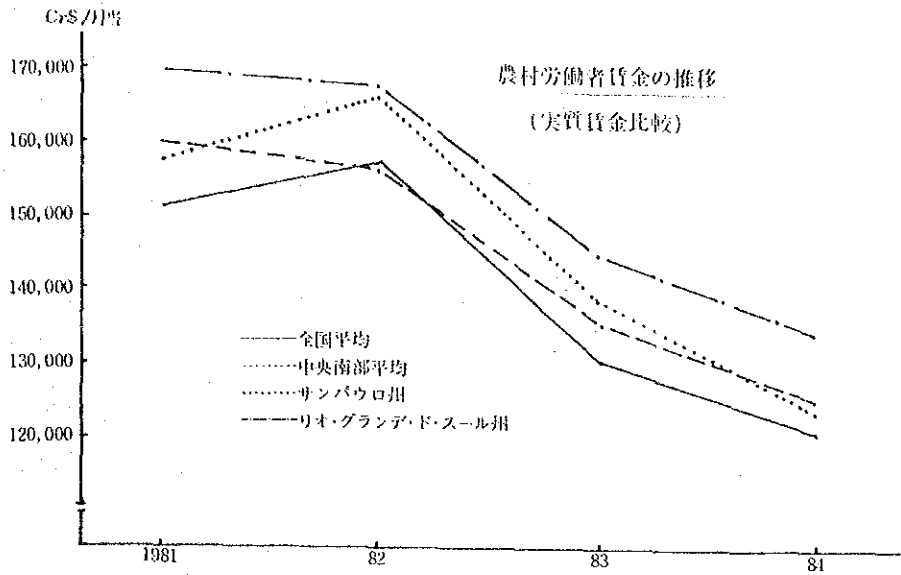
年 度	支 配 人	トラクター運転手	月 給 者	日 給 者	臨 時 雇
1974	87	95	94	100	98
75	90	100	99	101	101
76	91	97	97	101	101
77	100	103	100	105	111
78	109	110	122	108	109
79	102	107	106	101	102
80	100	100	100	100	100
81	89	92	91	89	93
82	96	100	101	91	88
83	91	92	95	88	84
84	70	71	70	65	59

出所：IEA

表59 農村労働者賃金推移

州 別	常備、1月分給料 Cr\$			
	1981年	1982年	1983年	1984年
リオ・グランデ・ド・スール	10,289	20,221	45,349	236,528
サンタ・カタリーナ	10,130	20,269	44,431	132,227
マット・グロソン	9,637	18,264	40,894	131,586
パ ラ ナ	9,954	19,158	44,079	130,474
リオ・デ・ジャネイロ	9,833	19,704	43,256	125,613
サンパウロ	9,460	19,865	43,197	125,613
ゴ ヤ ス	8,569	15,816	37,692	123,102
エスピリト・サント	9,285	18,416	41,079	121,260
ミナス・ジェライス	8,903	17,271	39,849	118,203
全国平均	9,058	18,145	40,594	122,079

出所：FGV



3. 1984年の生産流通実績

3.1 穀類

3.1.1 どうもろこし

イ)

1983/84農年のどうもろこし生産は収穫面積12.2百万ヘクタール、生産量21.2百万トンの規模で行われた。植付時期の市場価格がよく収益が確実視されたため植付面積が拡大され、前年を14%上廻る収穫面積となった。1ヘクタール当りの単収は前年並みであったが、面積の拡大により生産量も又前年比+13%の21.2百万トンに達

表60

どうもろこし：1984年生産実績

順位	州 別	収穫面積 1,000ha	生産量 1,000トン	単収 kg/ha
1	パ ラ ナ	2,447.0	5,400.0	2,207
2	リオ・グランデ・ド・スール	1,883.2	3,567.4	1,894
3	サン・パウロ	1,226.7	2,866.7	2,337
4	ミナス・ジェライス	1,539.2	2,563.6	1,666
5	サンタ・カタリーナ	936.1	2,345.2	2,505
6	ゴヤス	777.6	1,721.2	2,214
7	マット・グロソン	203.9	318.5	1,562
8	ベルナンソンコ	363.8	301.9	830
9	マラニオン	463.8	268.7	579
10	その他	2,363.9	1,821.0	770
	合 計	12,205.2	21,174.2	1,735

出所：IBGE

した。

栽培期間には中央-南部地方が1月に雨期中の乾燥に見舞われ、サンパウロ州、ミナス・ジェライス、パラナ及びゴヤス州のほか、米処のリオ・グランデ・ド・スール州が多大の被害を受け単収に大きな影響を受けており、その被害は約100万トンと見積られている。

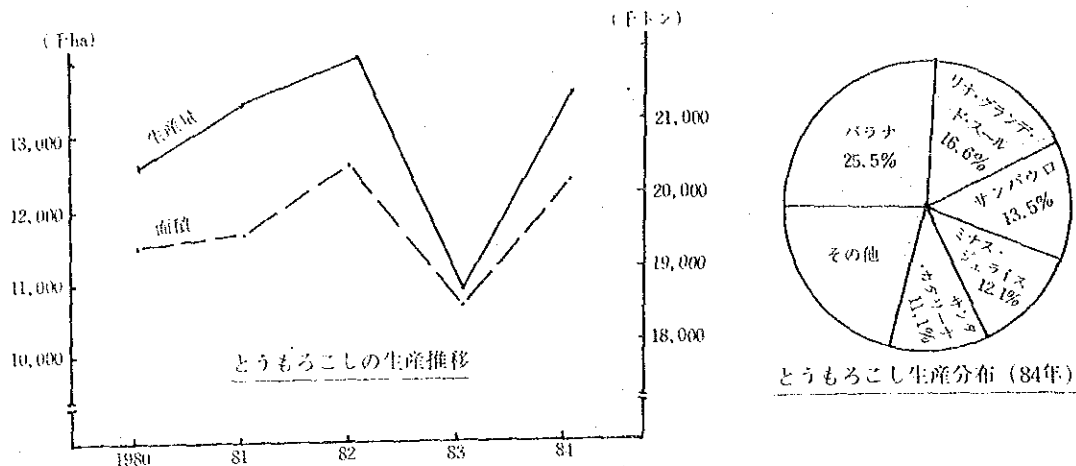


表61 どうもろこし：過去5ヶ年間の生産推移 1,000トン

州別	1980年	1981年	1982年	1983年	1984年
1, パラナ	5,467.0	5,363.1	5,430.0	5,018.9	5,400.0
2, リオ・グランデ・ド・スール	3,162.0	3,808.8	3,147.2	3,174.8	3,567.4
3, サン・パウロ	2,335.8	2,752.8	3,392.4	3,164.0	2,866.7
4, ミナス・ジェライス	3,008.8	2,912.9	3,053.8	2,696.0	2,563.6
5, サンタ・カタリーナ	3,010.0	3,162.6	2,628.7	1,687.3	2,345.2
6, ゴヤス	1,751.5	1,666.9	1,922.1	1,722.9	1,721.2
7, その他	1,637.0	1,499.9	2,291.2	1,279.9	2,710.1
計	20,372.1	21,167.0	21,865.4	18,743.8	21,174.2
面積 1,000ha	11,451.3	11,520.3	12,601.3	10,742.0	12,205.2

表62 どうもろこし：主要生産地の単収 kg/ha

州別	1980年	1981年	1982年	1983年	1984年
1, パラナ	2,535	2,480	2,385	2,125	2,207
2, リオ・グランデ・ド・スール	1,698	2,094	1,700	1,785	1,894
3, サン・パウロ	2,330	2,340	2,549	2,600	2,337
4, ミナス・ジェライス	1,724	1,724	1,845	1,888	1,666
5, サンタ・カタリーナ	2,669	2,750	2,371	1,588	2,505
6, ゴヤス	2,180	1,945	2,180	2,183	2,214
7, 全国平均	1,779	1,833	1,735	1,745	1,735

出所：IBGE

ロ) 国際市場とブラジルの輸出入

1984年7月に米国農務省が行った推定によると、同年米国におけるとうもろこしの植付面積は32.3百万ヘクタールで前年の面積を35.7%上廻ったが、同年頭初に予想されていた33百万ヘクタールには達していない。生産量は193百万トンと見積られており、前年をはるかに勝る量ではあったが、年頭に予想されていた207百万トンを大中に下廻る予想となったため、一時的に市場価格の上昇をひきおこした。

世界の市場は主にドル高を理由として停滞しており、消費量は80年代始めに比して減少しているため、米国の輸出力は少量の増加に止まる見込みである。

米国の需給関係における84/85農年の期末在庫は23.3百万トンと予想されているが、その量は大きなものではなく、これが更に減少する場合、価格の上昇を招くので今期の生産動向は特別の関心が寄せられている。

米国の気象状況は安定しておらず、西部の降雨多量や東部の降雨不足など地域によって大きな変化があり、米国の主要生産地帯となっているオハイオ州では洪水の被害によって植直しが行なわれるなど各地に問題があったため成行きが注目されていたが、後日の情報によると生産量は194.7百万トンに落ち着いた模様である。

世界生産の約半分を占める米国の生産動向が、とうもろこしの国際相場に大きな影響を与えるが、84年には大巾な変動はなく、大豆にみられたような価格の下落もなかった。今後の価格動向は米国の生産状況とソ連の減産(目標200百万トンに対して予想180百万トン)の程度にかかわっており、減産が確定的となる場合、世界の貿易量が增加し、価格に影響することが予想されている。

表63 とうもろこし：米国の需給 100万トン

区 分	83/84年	84/85年	%
供給量			
期首在庫	79.8	13.2	— 83.5
生産量	106.8	193.0	80.7
計	186.6	206.2	10.5
需要量			
飼料原料	101.0	105.4	4.4
食用、種子用	24.1	26.0	7.9
輸 出	48.3	51.4	6.4
計	173.4	182.9	5.5
期末在庫	13.2	23.3	76.5

出所：USDA

表64 とうもろこし輸出実績 1984年

輸出先国	重量 1,000トン	金額 100万ドル
イ ラ ン ダ	84.0	11.2
ス ペ イ ン	86.8	11.2
ナイジェリア	7.0	0.9
ボ リ ビ ア	0.3	0.1
そ の 他	0.1	0.2
計	178.2	23.6

出所：CACEX 10,05,02,00

表64-A とうもろこし油輸出実績 1984年

輸出先国	重量 1,000トン	金額 100万ドル
オ ラ ン ダ	7.6	4.7
南アフリカ連邦	0.4	0.2
レ ゾ ン ト	0.4	0.2
ベルギー	0.3	0.2
そ の 他	0.2	0.1
計	8.9	5.4

出所：CACEX

ブラジルのとうもろこし輸出入は、とうもろこし(豆)において年の前半に178千トンを出したあと後半に254千トンを入力しており、とうもろこし油では8.9千トンの輸出が行なわれている。ただし、いずれも少量であり金額的に大きなものではない。

ハ) 国内市場及び価格

国内市場における84年度の需給関係は、生産量21.2百万トンに前年よりの繰越し分1百万トンを加えた22.2百万トンの供給量に対し、国内消費量は20百万トンと推定されており若干の余裕を持つ形となっている。しかし、前年よりの繰越し分は収穫が開始されるまでの端境期に相当量消費されてしまうことや、生産量自体もあくまで推定量であり正確な量とはいえないので、実際の需給関係は予想通りには運ばず市場の品不足、予期せぬ価格の上昇などを起すことが屢々ある。

とうもろこしの国内消費量は前年末にみられた価格の上昇が影響して減少気味である。この消費傾向は81年以降減少を続けており、養鶏、養豚業界の需要後退を反映している。肉鶏生産者連盟 (APINCO) の情報によると、84年上半期における鶏肉生産が前年同期に比して減少しており、これが84年前半のとうもろこし需要を減少させたもっとも大きな理由となっている。養豚業界の方も同様の傾向にあり、最近養豚活動が復活しているものの短期に飼料需要の急激な増加は期待薄である。

このような消費の減少予想から期末在庫は220万トンとなる見通しが立てられ、一部の輸出が許可されたものである。国際市場では9月以降、米産とうもろこしの輸出が始まり相場を落すので、その前に輸出する必要がある。

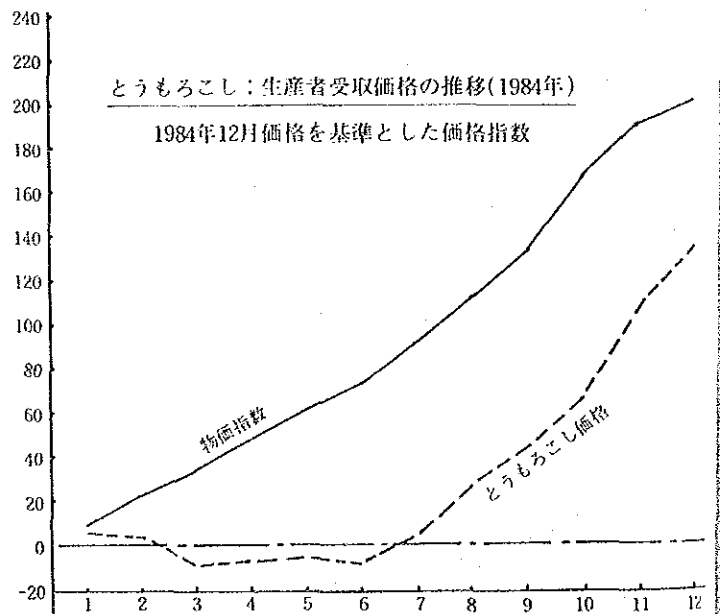
国内販売面では最近の金利の上昇から飼料工場がストック形成を避けて、必要量だけを購入する方法をとり始めたため生産者にとっては可成り不利な立場を余儀なくされており、手持ちの農産物の中市況のよいものから販売し、市場価格の低いとうもろこしの場合、銀行融資の返済期限まで持ちこたえて値上りを待つ状況が支配した。

このような状況下で取引されたとうもろこし価格は収穫直後で1俵(60kg)あたりCr\$8,000~9,000程度で、

表 65 とうもろこし：生産者受取価格

月別	Cr\$	
	1983年	1984年
1	1,720	9,964
2	1,849	9,636
3	1,890	8,247
4	1,938	8,337
5	2,034	8,813
6	2,687	8,929
7	3,175	9,800
8	4,075	12,257
9	8,183	13,608
10	9,274	15,576
11	9,192	19,870
12	9,434	22,220

出所：IEA



一年前の価格と比較してインフレ率を下廻る低いレベルであった。

一方、最低保証価格の方は84年2月1日の時点で1俵あたりCr\$6,180であったが、当時の市価がCr\$9,000を越しており、その開きが大きかったため政府への売込みはなく、ここ数年続いた政府の買上げは極度に減少した。

表65は1984年中におけるインフレ率ととうもろこし価格の関係を表わしたものである。インフレ率はゼツリリオ・ヴァルガス経済研究所が毎月発表する総物価指数とし、とうもろこし価格は83年12月の生産者受取価格を基準とし、84年中各月の生産者受取価格との関係(名目上の上昇率)をグラフに表わしたものである。作物価格の上昇が物価指数の上昇よりも上に位置する場合は実質的な値上りを示し、逆に物価指数よりも下方に位置する場合はインフレ率を下廻り実質的に値下りしたことになる。以下各作物にも同様のグラフによりインフレ率との関係を明らかにした。

とうもろこしの場合、3月より6月にかけて価格が低く、6月に最低の価格レベルに落ちている。これは収穫物が出廻ったための現象であったが、8月以降もインフレ率を下廻る値上りに止まっており、年間の中でとくに高値はみられなかった。

二) 生産コスト

表66 とうもろこし生産コスト 41俵(60kg) サンパウロ州

区 分		84 / 85年		85 / 86年	
A, 作業コスト	所要日数	単価 Cr\$	金額 Cr\$	単価 Cr\$	金額 Cr\$
1) 一般労働力	6.09	6.9	42.0	21.7	132.2
2) トラクター運転手	3.04	9.9	30.2	27.4	83.3
3) 4輪トラクター	3.04	65.3	198.5	191.8	582.9
4) 耕 起	0.83	3.6	3.0	12.4	10.3
5) 碎 土	0.41	7.6	3.1	37.2	15.3
6) 機 械 耕 運	0.62	2.2	1.4	5.2	3.2
7) 播 種 ・ 施 肥	0.41	1.6	0.7	9.6	4.0
8) 運 搬	0.41	4.4	1.8	14.5	5.9
9) 収 穫	0.36	16.4	5.9	49.3	17.8
小 計	--	--	286.6	--	854.8
B, 資材コスト					
1) 種 子	19.00 kg	1.0 / kg	18.1	6.0 / kg	114.0
2) 追 肥 用 硫 安	0.16 T	322.2 / T	51.6	1,364.2 / T	218.3
3) 配 合 肥 料	0.30 T	370.3 / T	111.1	1,376.1 / T	412.8
4) 袋	41.00 U	0.8 / U	33.8	3.2 / U	131.2
小 計	--	--	214.6	--	876.3
累 計	--	--	501.2	--	1,731.1
C, 間接コスト					
1) 機 械 償 却 費			48.3		173.4
2) 銀行利息、生産費 固定投資			448.9		1,572.4
合 計	--	--	1,013.9	--	3,476.9

サンパウロ州農務局農業経済研究所が発表したサンパウロ州におけるとうもろこし生産の84/85農年及び85/86農年コスト予想は表66~68の通りである。

表67 とうもろこし生産コスト：1ha当り47俵(60kg)収穫の場合 リバイロン・プレット地区(SP)

区 分	所要日数	84/85年		85/86年	
		単価 Cr\$	金額 Cr\$	単価 Cr\$	金額 Cr\$
A, 作業コスト					
1) 一般労働力	1.85			23.6	43.7
2) トラクター運転手	2.00			30.7	61.3
3) 4輪トラクター	2.00			191.8	383.5
4) 耕 起	0.38			12.4	4.7
5) 石 灰 散 布	0.18			24.8	4.5
6) 砕 土	0.25	※	※	37.2	9.3
7) 播 種 ・ 施 肥	0.22			48.6	10.7
8) 機 械 耕 運	0.25			5.2	1.3
9) 防 除	—			—	—
10) 運 搬	0.49			29.3	14.4
11) 収 穫	0.23			49.3	11.3
小 計	—			—	544.7
B, 資材コスト					
1) 種 子	19.47 kg			6.0 / kg	116.8
2) 石 灰	0.75 T			100.0 / T	75.0
3) 追 肥 用 硫 安	0.12 T			1,364.2 / T	163.7
4) 配 合 肥 料	0.30 T	※	※	1,376.1 / T	412.8
5) 殺 虫 剤					
6) 殺 蟻 剤	1.00 kg			10.0 / kg	10.0
7) 袋	50.00 U			3.2 / U	160.0
小 計	—			—	938.3
累 計	—			—	1,483.0
C, 間接コスト					
1) 機 械 償 却 費					131.5
2) 銀行利息、生産費 固定投資					1,347.1 —
合 計	—			—	2,961.6

出所：IEA ※資料なし。

表68

とうもろこし生産コスト：1ha当り37俵(60kg)収穫

サンパウロ州

区 分		84 / 85年		85 / 86年	
A, 作業コスト	所要日数	単価 Cr\$	金額 Cr\$	単価 Cr\$	金額 Cr\$
1) 一般労働力	13.17	6.4	84.3		
2) トラクター運転手	1.48	8.8	13.1		
3) 4輪トラクター	1.48	65.3	96.6		
4) 家畜	0.99	0.8	0.8		
5) 耕起	0.51	3.6	1.8		
6) 砕土	0.21	7.6	1.6	※	※
7) 播種・施肥	0.24	1.6	0.4		
8) 家畜中耕	0.99	0.2	0.2		
9) 運搬	0.38	4.4	1.7		
10) 脱穀	0.14	4.5	0.6		
小計	—	—	201.1		
B, 資材コスト					
1) 種子	17.83 kg	1.0 / T	16.9		
2) 追肥用硫酸	0.32 T	370.3 / T	118.5		
3) 配合肥料	0.67 kg	2.3 / kg	1.5	※	※
4) 袋	37.00 U	0.8 / U	30.5		
小計	—	—	167.4		
累計	—	—	368.5		
C, 間接コスト					
1) 機械償却費			22.9		
2) 銀行利息、生産費			330.2		
固定投資			7.3		
合計	—	—	729.0		

出所：IEA

※資料なし。

3.1.2 米

イ) 生産

83/84農年の米作は前年の不作を回復し900万トンを越す生産をあげた。栽培面積は過去5ヶ年間の平均以下で大きなものではなかったが、過去5ヶ年間の中では最高の単収を得たため生産量を増加したもので、過去の実績と比較すると75/76年の9.76百万トン、79/80農年の9.78百万トン、81/82農年の9.72百万トンに匹敵する大型の収穫であった。このようにブラジルの米作としては平均以上の生産規模ではあったが、この生産量も国内供給を満足するものではなく、まして価格調整在庫の形成を可能とするには程遠い規模であり、ブラジルは更に一年間基礎食糧の供給に問題を残した。

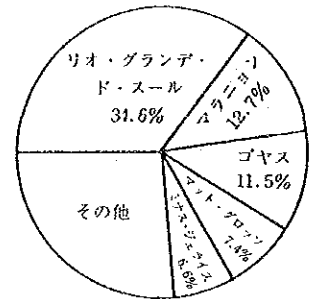
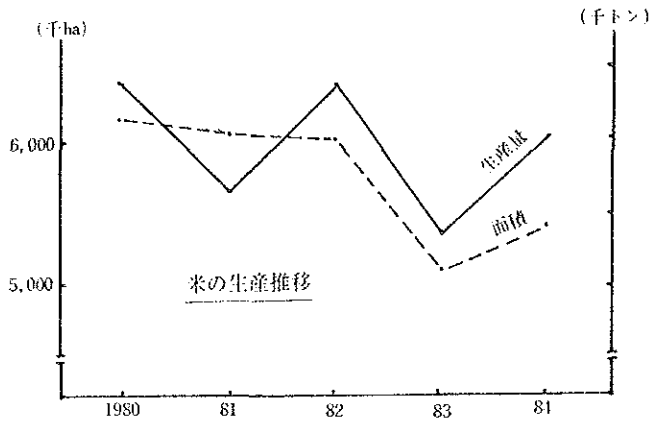
政府としては基礎食糧の確保を図るため植付面積の拡大を図る意向であったが、作付時点で発表された農業政策とくに農業融資制度の変更はむしろ生産意欲をそぐ結果となっており、農業融資に対する補助の撤廃の中で生産者は高金利の商業銀行資金を利用して生産を行なうか、生産コストに大きな割合を占める生産資材の使用を

表69

米(秈) 1984年生産実績

順位	州 別	面積 1,000ha	生産量 1,000トン	単収 kg/ha
1	リオ・グランデ・ド・スール	724.6	3,119.0	4,304
2	マ ラ ニ ョ ン	820.2	1,145.2	1,396
3	ゴ ヤ ス	1,029.6	1,037.8	1,008
4	マ ッ ト ・ グ ロ ッ ソ ン	570.6	672.7	1,179
5	ミ ナ ス ・ ジェ ラ イ ス	547.9	593.0	1,082
6	サ ン タ ・ カ タ リ ナ	139.8	452.0	3,233
7	サ ン パ ウ ロ	340.7	398.8	1,170
8	マ ッ ト ・ グ ロ ッ ソ ン ・ ド ・ スール	343.1	384.6	1,112
9	パ ラ ナ	196.7	242.6	1,233
10	そ の 他	643.1	978.9	1,522
合 計		5,356.3	9,021.6	1,684

出所：IBGE



州別生産量 (83/84)

表70

米：過去5ヶ年間の生産推移

1,000トン

州 別	1980年	1981年	1982年	1983年	1984年
1, リオ・グランデ・ド・スール	2,293.4	2,455.3	2,590.0	2,220.5	3,199.0
2, マ ラ ニ ョ ン	1,281.3	691.0	1,576.5	430.9	1,145.2
3, ゴ ヤ ス	1,455.4	920.6	1,394.5	1,080.7	1,037.8
4, マ ッ ト ・ グ ロ ッ ソ ン	1,175.0	941.6	999.0	784.2	672.7
5, ミ ナ ス ・ ジェ ラ イ ス	833.8	688.8	729.7	779.2	598.1
6, そ の 他	2,736.8	2,531.0	2,426.3	2,454.0	2,368.8
合 計	9,775.7	8,228.3	9,716.0	7,749.5	9,021.6
面積 1,000 ha	6,243.1	6,101.7	6,015.8	5,110.4	5,356.3

出所：IBGE

表71

米：主要生産地の単収

kg/ha

州 別	1980年	1981年	1982年	1983年	1984年
リオ・グランデ・ド・スール	3,828	4,006	4,149	3,488	4,804
マラニオン	1,295	672	1,351	596	1,396
ゴヤス	1,226	821	1,235	1,097	1,008
マット・グロソン	1,310	1,091	1,257	1,116	1,179
ミナス・ジェライス	1,405	1,083	1,297	1,468	1,090
全国平均	1,565	1,349	1,615	1,516	1,684

出所：IBGE

減少して投下資金を縮小するか、のいずれかを選択せざるを得ない困難な状況に置かれた。

83/84農年の生産増加を決定づけたのは国内最大の生産地帯を構成するリオ・グランデ・ド・スール州における320万トンに達する増産と、前年洪水のために大きな被害を受けていた東北地方マラニオン州の生産回復によるものであった。水田地帯のリオ・グランデ・ド・スール州における増産は面積における前年比14%増に加え、単収が前年の3,488kg/haに対し4,304kgに大巾に向上したことによっている。同州における豊富な水資源、水田用IR-409, IR-410品種の高単収のほか年間を通じた適切な降雨や気温が増産の要因となった。

他方、東北地方最大の米作地帯としてのマラニオン州では、最近ゴールド・ラッシュの傾向をみせたカラジャス地方への採金のための出稼ぎが多く、農業労働力の流出という問題や優良種子の入手が困難であった問題等にもかかわらず、良好な気象条件に恵まれたため1haあたりの単収が前年の596kgより1,396kgへと飛躍したため、大巾な増産となった。

この両州に続きブラジルの米生産に大きな比重を占める中西部地方では、ゴヤス州、マット・グロソン州共に前年をやや下廻る生産に止まり、また南東部地方を代表するミナス・ジェライス州の生産は前年を(-)23%下廻るものであった。

サンパウロ州では成育期間中の長期乾燥が米作地帯に大きな被害を与えたため、栽培面積の増加にもかかわらず単収の低下により生産量を減少した。このため州内供給に大巾な不足を来し、他州とくにリオ・グランデ・ド・スール州よりの供給を受けている。

ロ) 国際市場とブラジルの輸出入

83年12月にFAOが行なった推定によると83年度における米の世界生産量は435.8百万トンで、82年及び81年をそれぞれ2.7%及び6.0%上廻っている。また84年6月に米国農務省が行なった推定では84年度の生産量は447.8百万トンで前年を更に上廻るものとされている。74~76年当時の世界生産量347.4百万トンと比較すると大巾な増加である。

世界の米生産はアジア諸国(中国、インド、インドネシア、バングラデッシュ、日本、タイ)が圧倒的に大きく、70年代の中期には世界生産の91%、83年には93.0%を占めた。80年代には、生産を落した日本と生産変動のないタイを除く他の生産国は生産性の向上によって生産を伸ばしている。

これらアジア諸国は大生産地帯であると同時に世界の消費地帯でもあるため、世界生産の増加にもかかわらず世界の貿易はそれ程活発ではなく、加えて輸入諸国の国内生産増加によって世界の輸入量は81年の13.6百万トンより82年には11.6百万トンに減少しており、83年も上半期に若干の活気をとり戻したものの年間を通じて大きな変化はなかった。

この様な世界需給の中で米の国際価格は1981年以降下降しており、タイ産米を例にとると81年に5%の碎米を含む白米のバンコック渡し価格がトン当たり423ドルであったものが82年には270ドルに下落、83年も82年と同レベルが継続した。

同じく米国農務省の推定によると84/85農年の世界生産量は前年を更に3.2%上廻る466百万トンに達したものとされている。生産量がこのように増大するのは、それに見合う消費があることを意味するものであり、その90%近くは生産国自体の消費に当てられている。84/85農年の世界消費量は462百万トンで前年を2.4%上廻ったが、大半が生産国の消費増であることや、各輸入国が不時の事態に対処するため十分のストックを保留していたことなどのため国際間交易は拡大していない。

この様な状況のため84年度の価格も低調であり、タイ産米の平均価格(15%碎米)はバンコック渡しで平均225ドルであった。

84年中ブラジルの国内生産は国内需要を下廻ったが、前年末に行なわれた輸入による在庫品の繰越分が需要を賄ったため新たな輸入は行なわれていない。

ハ) 国内市場と価格

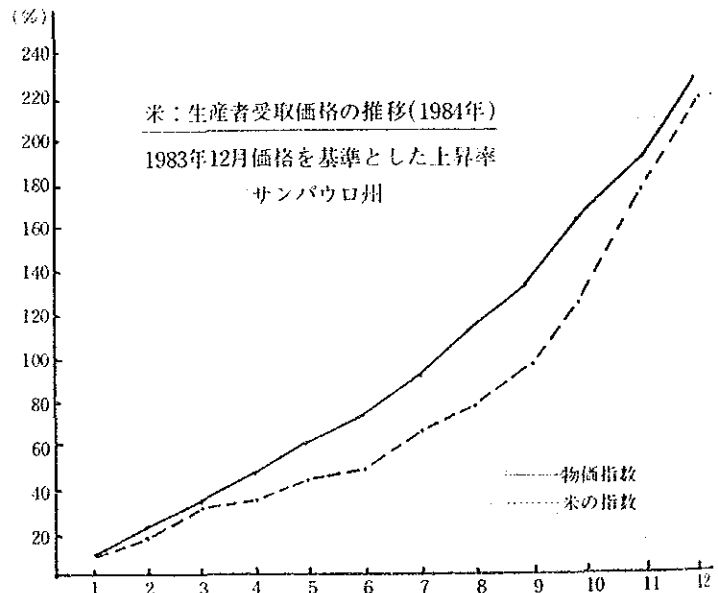
CFP(生産融資公社)が行なった国内需給予想では当初国内生産量を860万トンと推定し、前年よりの繰越在庫を加えた930万トンの供給量では、950万トンと見積られる国内消費に応ずることが出来ず、価格の動向に応じて随時輸入を必要とする見込みであったが、最終的に国内生産量が900万トンに達したこと、その後の価格動向にとくに大きな変化がみられなかったことのため輸入は行なわれず、また国内価格も年間を通じてインフレ率を下廻る価格推移に終わった。

84年の場合、国内の供給事情が安定したのは米どころのリオ・グランデ・ド・スール州とマラニョン州の生産復活であり、これによりサンパウロ、リオ・デ・ジャネイロの二大消費地帯や東北地方が年頭の数ヶ月にわたって供給が保証されたことにある。

このように供給面においては問題を生じなかったが、生産者側にとっては最低保証価格制度による現物担保融資の資金解除が遅れたため、それまでの銀行融資返済のため生産物を早目に販売せざるを得ない状況にあり、更

表72 米：生産者受取価格 Cr/60kg

月別	1983年	1984年
1	4,561	12,591
2	4,330	13,717
3	4,208	15,229
4	4,362	15,734
5	4,605	16,421
6	5,518	16,956
7	6,926	18,886
8	8,776	20,561
9	11,178	22,802
10	11,792	26,685
11	11,933	32,160
12	11,513	36,650



に市価を低めるといふ不利な状態に立たされた。このため供給量は増加し国内の主要市場が適当に供給されたため価格の反騰はみられなかった。

米価格の低迷による生産者収益の減退が明らかとなったためリオ・グランデ・ド・スール州では、その産米価格が1俵(50kg)あたりCr\$6,000以下で出荷されないよう生産者組合が販売ボイコットを行なうなど生産者側にとって深刻な動きもあった。

表73 米：生産コスト 1ha当り27俵(60kg)収穫 リベイロン・プレット地区(SP)

区 分		84 / 85年		85 / 86年	
A, 作業コスト	所要日数	単価 Cr\$	金額 Cr\$	単価 Cr\$	金額 Cr\$
a) 直接雇用					
1) 一般労働力	2.75/2.83	7.5	21.3	23.6	66.8
2) トラクター運転手	2.52	10.7	27.0	30.7	72.2
3) 4輪トラクター	2.52	65.3	164.5	191.8	483.2
4) ロータリーカッター	0.22	3.7	0.8	15.2	3.3
5) 耕 起	0.48	3.6	1.7	12.4	6.0
6) 碎 土	0.39	7.6	3.0	37.2	14.5
7) 播 種 ・ 施 肥	0.26	9.0	2.3	48.6	12.6
8) 中 耕	0.66	2.3	1.5	10.0	6.6
9) 運 搬	0.41	4.4	1.8	14.5	5.9
10) 石 灰 散 布	0.10	5.7	0.6	24.8	2.5
小 計	—	—	224.6	—	678.7
b) 請負費					
1) 収 穫 費			151.2		378.0
小 計	—	—	375.8	—	1,056.7
B, 資材コスト					
	数 量				
1) 石 灰	1.00 T	29.0 / T	29.0	100.0 / T	100.0
2) 種 子	30.00 kg	1.1 / kg	27.8	3.0 / kg	90.0
3) 配 合 肥 料	0.26 T	482.5 / T	125.4	1,942.2 / T	505.0
4) 追 肥 用 硫 安	0.10 T	322.2 / T	32.2	1,364.2 / T	136.4
5) 殺 蟻 剤	0.80 kg	2.3 / kg	1.8	10.0 / kg	8.0
6) 〃	27.00 U	0.8 / U	22.3	3.2 / U	86.4
7) 袋	0.06 T	562.6 / T	33.8	1,753.4 / T	105.2
小 計	—	—	272.3	—	1,031.0
累 計	—	—	648.1	—	2,087.7
C, 間接コスト					
1) 機 械 償 却 費			38.5		145.8
2) 銀行利息、生産費 固定投資			464.4		1,517.1
			12.5		—
合 計	—	—	1,163.6	—	3,750.6

出所：IEA

年間を通じ市場は供給過剰の状態にあり、販売のための融資金は不足し、価格は収益をもたらす水準になかったのが84年米作の全般的な状況であった。

サンパウロ州における生産者受取価格の推移及び年間のインフレ率と対比した米価の動きは、表72及びグラフに示す通りであり、年間を通じてインフレ率を下廻る状況が示されている。

二) 生産コスト

サンパウロ州農務局農業経済研究所が発表した84/85農年及び85/86農年の生産コストは表73~74の通りである。

表74 米：生産コスト（水稲） 1ha当り39俵収穫 バレー地区（SP）

区 分	所要口数	84 / 85年		85 / 86年	
		単価 Cr\$	金額 Cr\$	単価 Cr\$	金額 Cr\$
A, 作業コスト					
1) 一般労働力	9.36	7.5	69.7	21.9	205.0
2) トラクター運転手	2.86	10.0	28.7	27.4	78.4
3) 4輪トラクター	2.74	65.3	178.9	191.8	525.4
4) 耕 起	0.35	3.6	1.3	12.4	4.4
5) 碎 土	0.56	7.6	4.3	37.2	20.8
6) 播 種	0.57	2.9	1.7	10.5	6.0
7) 施 肥	0.33	9.0	3.0	48.6	16.0
8) ロータリー・カッター	0.12	3.7	0.4	15.2	1.8
9) 運 搬	0.67	4.4	3.0	14.5	9.7
10) 防 除	0.14	4.1	0.6	16.6	2.3
11) 収 穫	0.12	126.8	15.2	382.5	45.9
小 計	—	—	306.7	—	915.7
B, 資材コスト					
	数 量	単価 Cr\$	金額 Cr\$	単価 Cr\$	金額 Cr\$
1) 種 子	90.00kg	1.1/kg	101.3	3.0/kg	270.0
2) 配 合 肥 料	0.25 T	370.3 / T	92.6	1,376.1 / T	344.0
3) 硫 安	0.10 T	322.2 / T	32.2	1,364.2 / T	136.4
4) 防 除 剤	2.00 L	36.2 / L	72.4	114.8 / L	229.6
5) 〃	7.00 L	19.0 / L	133.1	57.8 / L	404.6
6) 殺 虫 剤	0.60 L	14.4 / L	8.6	40.7 / L	24.4
7) 袋	39.00 U	0.8 / U	32.2	3.2 / U	124.8
小 計	—	—	472.4	—	1,533.8
累 計	—	—	779.1	—	2,449.5
C, 間接コスト					
1) 機 械 償 却 費			47.9		179.8
2) 銀行利息、生産費 〃 固定投資			558.4		1,780.0
3) ポーデル使用料			60.0		90.0
合 計	—	—	1,462.0	—	4,499.3

出所：IEA

3.1.3 フェイジョン

イ) 生産

ブラジル人の基礎食品として重要なフェイジョンは国内の農産物の中でもっとも不安定な作物の一つであり、毎年上下の変動を繰り返している。国内需要が大きいため生産の変動は価格の変動につながり、時として価格の高騰を招くのもこの作物の特徴である。

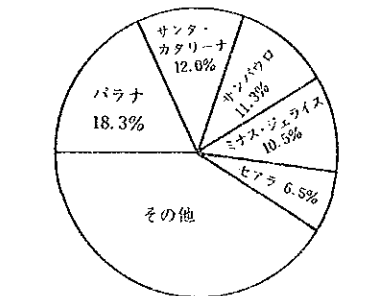
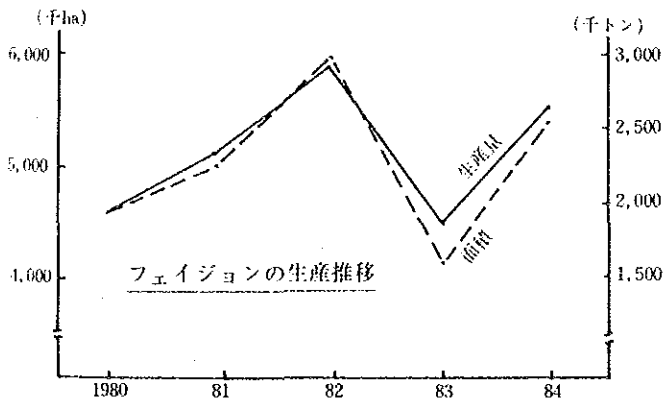
最近の生産状況を見ると81/82農年に300万トン近い記録的生産を行なったのち83年に激減、84年には再び260万トンに復活した。81/82農年にみられた増産は過去の不安定な生産を解消するため生産に対する手厚い恩典（最低保証価格の引上げ、VBCの改訂、小農業者を対象とした有利な農業融資、100%の農業保険、販売融資に対する十分な資金手当て）が与えられたためであったが、83年の下半期以降はIMFとの対外勘定調整にかんする協定にもとづく新しい経済政策の中で農業融資が圧迫され、融資利息の引上げによって、それまでのフェイジョン作に対する特別恩典が中止されたこと。81/82農年の豊作による市場価格の低下、天候不順等が重なり大巾な減産となったものであった。

この間、生産コストは82/83農年より83/84農年にかけて202%の増加（注：サンパウロ州農務局農業経済研究所の推定）をみたのに対し、VBC（営農費基準額）は単収601kg～800kgの生産性に対して125%、単収801

表75 フェイジョン：1984年生産実績

順位	州 別	面積 1,000ha	生産量 1,000トン	単収 kg/ha
1	パ ラ ナ	741.0	479.1	674
2	サンタ・カタリーナ	393.8	310.4	788
3	サンパウロ	477.5	296.8	622
4	ミナス・ジェライス	641.5	275.5	430
5	セ ア ラ	471.5	171.2	363
6	ベルナンブコ	330.3	147.0	446
7	パライーバ	307.2	133.6	436
8	リオ・グランデ・ド・スール	169.7	133.1	677
9	そ の 他	1,777.0	666.9	375
	合 計	5,309.5	2,613.6	492

出所：IBGE



フェイジョン：州別生産状況(83/84)

～1,000kgの生産性に対して128%の調整に止まったため、生産融資はコストの34%～42%をカバーするに止まった。このため不足分の資金を一般商業銀行に求めざるを得ず、その金融費用は82/83農年にコストの10%を占めていたものから83/84農年には20%以上に達した。制度の改正によって改良された唯一の恩典は農業保険制度で、従来農業融資だけが保険の対象とされていたのを生産者の自己資金も対象とすることに適応範囲が拡大された。しかし、この恩典だけでは生産を刺激する要因としては弱く、83/84農年にみられた生産回復は、前年の不作による国内供給量の減少によって83年下半年より価格の上昇が始まり、これが84年には更に上昇しようという思惑が大きく作用したものと考えられる。

国内の生産地帯はパラナ、サンタ・カタリーナ、サンパウロ及びミナス・ジェライス州が大きなシェアを占め、この4州で国内生産の50%以上が占められている。単収は依然として低く、全国平均で1haあたり0.5トンを越えていない。

ブラジルは世界でも数少ないフェイジョンの生産国で、インドや中国と並ぶ生産規模を有しており、年には世界最大の生産量に達することもある。国内で生産されている種類も多種にわたっているが、南部地方で多く栽培されている通称フェイジョン (Feijão) 学名 *Phaseolus Vulgaris* L と東北地方で栽培されている通称カウピ (Caupi) 学名 *Vigna Unguiculata* L に大別される。国の統計上この二種は区分されずフェイジョンとして一括されており、それぞれの生産量を知る方法はないが、EMBRAPA (ブラジル農牧研究公社) の資料によると生産割合はフェイジョンが80%、カウピが20%の率であろうと推定している。

フェイジョンはポルトガル語でFeijão、スペイン語でPoroto、英語でFrench Beanと呼ばれている。栽培時期は、雨期、乾期及び冬期の3期に分けられ、雨期栽培と乾期栽培の面積比率が大きく、冬期栽培は栽培地域が限定され面積も少ない。東北地方では冬期栽培はなく雨期と乾期の2回のみである。EMBRAPAの資料によると、フェイジョンの栽培時期は次ページの表の通りである。

表76 フェイジョン：過去5ヶ年間の生産推移 1,000トン

州 別	1980年	1981年	1982年	1983年	1984年
1, パラナ	462.2	570.9	666.8	347.0	479.1
2, サンタ・カタリーナ	120.0	246.1	321.0	162.4	310.4
3, サンパウロ	283.0	330.3	392.6	322.6	296.8
4, ミナス・ジェライス	327.4	393.2	335.8	243.8	275.5
5, その他	775.6	800.5	1,190.0	511.2	1,251.8
合 計	1,968.2	2,341.0	2,906.2	1,587.0	2,613.6

面積 1,000 ha	4,643.4	5,027.0	5,928.8	4,068.9	5,309.5
-------------	---------	---------	---------	---------	---------

出所：IBGE

表77 フェイジョン：主要生産地の単収 kg/ha

州 別	1980年	1981年	1982年	1983年	1984年
パラナ	567	669	758	496	674
サンタ・カタリーナ	503	870	861	465	788
サンパウロ	616	660	683	585	622
ミナス・ジェライス	496	521	452	447	430
全国平均	423	466	490	390	492

出所：IBGE

栽培に適する土壌はPH6~6.5の微酸性から中性に近い土壌で排水のよい地形とされており、石灰質で肥沃な土壌では収量は多いが品質は劣る。また花崗岩質の土壌では収量は少ないが煮やすく良質のものが得られる。

一方カウピは北部地方及び東北地方で栽培されている。北部地方ではパラ州及びアマゾンナス州内で熱帯型の年間平均気温25°C、降雨量1,500mmで年間平均した降雨のあることを条件としている。

また東北地方では、イ)アマゾン気象帯との境界地帯(マラニョン州)、ロ)中央及び北部セルトン地帯、ハ)アグRESTE (AGRESTE)地帯、ニ)マッタ (MATA)地帯が重要な栽培地帯となっている。とくにハ)のアグRESTE地帯での栽培が大きい。州別ではピアウイ州、セアラ州、リオ・グランデ・ド・ノルテ州、パライーバ州及びベルナンブコ州の一部で、乾燥地帯を含んでおり生産を不安定とする理由とされている。

北部地方の栽培は、8~10月の乾燥期に水が退いたあとの河川流域に植付ける方法と、雨期後期の5~6月に高地に植付ける2つの方法がとられている。低地の場合は毎年新しい土壌が堆積して肥沃度が高いのに対し、高地の場合はラトソール土壌のため肥沃度が低い。

このように全国的に栽培されながら生産が安定しない理由としては、次の事項があげられる。

- イ) フェイジョン栽培農家の形態としては小農が多くを占めており、栽培農家で100ヘクタールを越すものは20%程度である。サンパウロ州の場合は栽培農家の半分は5ヘクタール以下、また東北地方のマラニョン州では大半が5ヘクタール以下となっている。
- ロ) これらの栽培農家は、フェイジョン相場の変動がはげしく、価格の低下による損害を避けるため自家食糧を主体とし、わずかな余剰分を市場に出荷している。
- ハ) フェイジョンの生産がこのように小農業者に集中しているのは、その栽培を全面的に機械化することが

表78 フェイジョンの栽培時期

地 域 別	雨 期 収 穫	乾 期 収 穫	冬 期 収 穫
南 部 地 方	8 ~ 10月	1 ~ 2月	
南 東 地 方	9 ~ 11ヶ月	1 ~ 3ヶ月	5 ~ 8月
サンパウロ州	9 ~ 11ヶ月	1 ~ 3ヶ月	5 ~ 6ヶ月
ミナス・ジェライス州	10 ~ 11ヶ月	2 ~ 3ヶ月	6 ~ 8ヶ月
中 西 部 地 方	10 ~ 11ヶ月	1 ~ 3ヶ月	6 ~ 8ヶ月
東 北 地 方			
バ イ ア 州	11 ~ 12ヶ月	4 ~ 5ヶ月	
2 ~ 3ヶ月			
ベルナンブコ州	8 ~ 9ヶ月		
アグRESTE地方	3 ~ 4ヶ月		
パ ラ イ ー バ 州			
低 地 帯	3 ~ 4ヶ月	7 ~ 8ヶ月	
高 地 帯	1 ~ 2ヶ月		
北 部 地 方			
ア ク レ 州	3 ~ 4ヶ月		
パ ラ ー 州	4 ~ 5ヶ月		
栽 培 周 期	品種によって異なるが一般に70~100日間		

出所：EMBRAPA

表79 ブラジル人の食事の中に占めるフェイジョンのカロリー及び蛋白質 %

区 分	南 東 地 方		東 北 地 方 平 均	南 部 地 方 平 均	中 西 部 地 方 平 均	
	サンパウロ州	リオデジャネイロ州				
都 市	カ ロ リ ー	8.0	8.6	11.1	6.6	5.4
	蛋 白	17.7	19.6	23.5	14.3	9.9
農 村	カ ロ リ ー	10.5	10.5	17.2	10.0	データなし
	蛋 白	25.3	26.1	37.9	22.4	
大 都 市 圏	蛋 白	8.1	8.4	8.0	5.3	5.4
	カ ロ リ ー	16.3	16.6	15.9	10.8	6.5
平 均	蛋 白	8.6	8.6	14.5	8.5	7.1
	カ ロ リ ー	10.5	17.7	31.3	18.7	14.8

出所：EMBRAPA

困難であり、価格上も安定を欠くため大型の農業者が他の安定作物を選び、フェイジョンの栽培を避けているためでもある。

ブラジル人の食習慣の中に占めるフェイジョンの重要性は、その豊富な蛋白質によっており、日本人の味噌汁と同様にブラジル人のフェイジョンは食生活の中で不可欠のものとなっている。国民の階層の中ではとくに低階層の消費が大きく、これらの階層にとっては重要な蛋白摂取源である。

上の表はEMBRAPAの資料に発表された1970年度のもので、その後ある程度の変化はあると思われるが、ブラジル人の食生活に占めるフェイジョンの比重を知ることが出来る。都市と農村では農村においての消費が大きく、また地域別では東北地方が蛋白質の3分の1をフェイジョンに依存しているのが判明する。全国平均値では24%といわれている。

ロ) 国際市場とブラジルの輸出入

ここ数年間世界のフェイジョン栽培面積は年間9%の増加を続けてきたが、1983年度には減少し、生産量も82年の14百万トンより83年には12.8百万トンへと減少した。この減少は基本的にブラジル及び米国の減産を理由としている。

世界の生産国としては栽培面積においてインド、ブラジル及びメキシコが大きく、生産量はインド、ブラジル、中国の順となっている。1ヘクタール当りの単収は米国においてもっとも高く約1.5トン、中国が1トン前後、メキシコが600kg前後、ブラジル400kg前後のレベルである。

フェイジョンの消費国が少ないため世界の貿易量は少ないが、83年度は世界生産の減少により世界の貿易量も

表80 フェイジョン：ブラジルの輸出入 トン

年 度	輸 入	輸 出
1980	39,886.8	1,679.0
1981	3,799.7	6.1
1982	3,495.3	6,648.8
1983	1,404.6	14,937.5
1984	60,527.0	5,632.2

出所：CACEX

表81 黒フェイジョンの輸入実績 1984年

輸 入 先 国	重 量 トン	FOB 1,000ドル	CIF 1,000ドル
アルゼンチン	2,729.4	1,361.6	1,524.7
チ リ ー	1,500.0	786.5	871.3
そ の 他	0.9	1.2	1.9
計	4,230.3	2,149.3	2,397.9

出所：CACEX

関税番号 07.05.03.01

表82 白フェイジョンの輸入実績 1984年

輸入先国	重量 トン	FOB 1,000ドル	CIF 1,000ドル
アルゼンチン	3,213.6	1,354.2	1,463.9
米 国	144.2	51.9	72.0
計	3,357.8	1,406.1	1,535.9

出所：CACEX

関税番号 07.05.03.02

表83 その他のフェイジョン輸入実績 1984年

輸入先国	重量 トン	FOB 1,000ドル	CIF 1,000ドル
メキシコ	30,562.9	15,587.1	16,690.1
米 国	18,645.5	10,752.2	11,680.3
チリ	2,245.3	1,103.1	1,243.3
その他	1,485.2	722.9	809.9
計	52,938.9	28,165.3	30,423.6

関税番号 07.05.03.99

減少している。国際価格はロンドン市場において81年度トン当り412ポンド、82年361ポンド、83年368ポンドであった。

ブラジルは国内生産の状況によって不足分の輸入、時によって余剰品の輸出を行なっている。84年は国内供給不足のため輸出余力はなく、年の前半にみられた価格の高騰を避けるため総量6万トンの輸入が行なわれている。

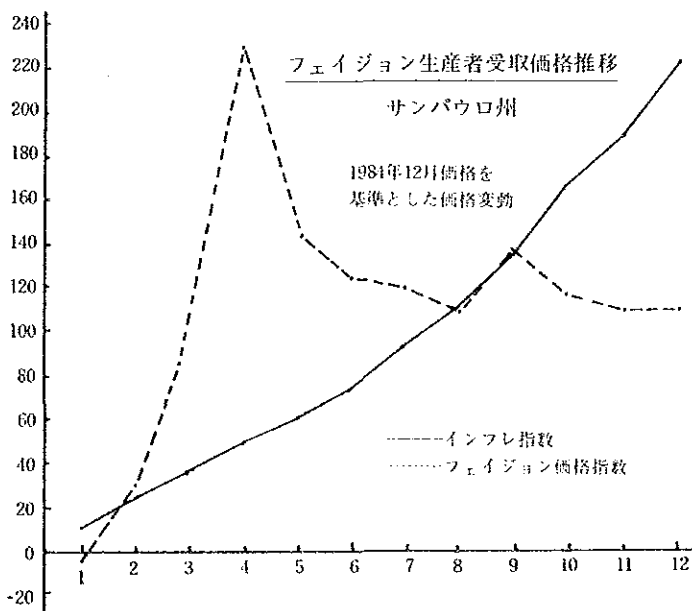
ハ) 国内市場と価格

83年度における国内生産の減少により、下半期より上昇した価格は83/84年生産物が出廻る時期まで継続し、とくに84年の4月には最高に達し、1俵あたり生産者受取価格はCr\$113,923に及んだ。1月の価格がCr\$33,474

表84 フェイジョン：生産者受取価格 Cr\$ / 60kg

月別	1983年	1984年
1	7,597	33,474
2	7,707	44,285
3	10,608	69,499
4	14,317	113,923
5	13,960	84,911
6	17,618	78,084
7	20,850	76,153
8	23,998	73,794
9	38,897	82,132
10	42,336	75,411
11	38,590	72,390
12	34,540	73,230

出所：IEA



であったことをみると短期の中に急激な値上りであった。

生産者受取価格の高騰に応じて消費市場価格も上昇し、サンパウロ市場価格では83年5月の1kg当り Cr\$326より84年5月には Cr\$2,296に上り、この間604%の値上りであった。

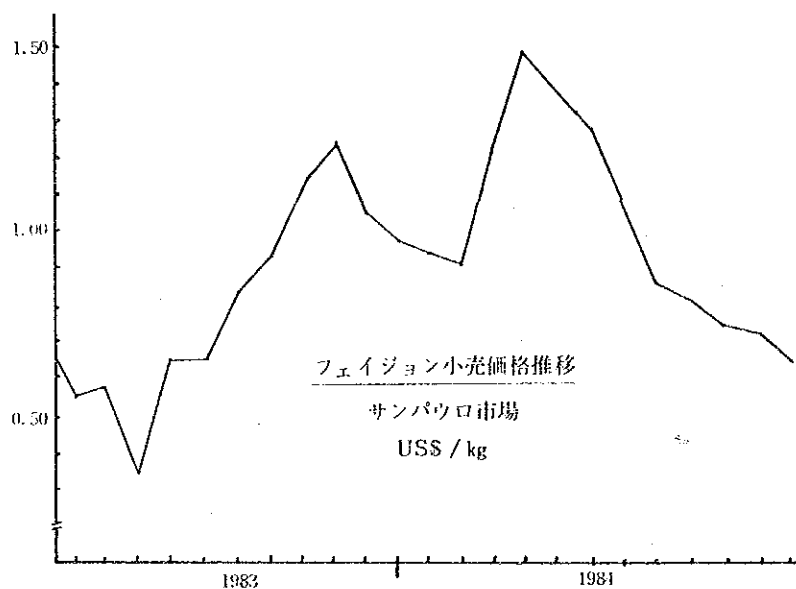
価格の変動にみられるとおり供給事情は84年4月に最悪の事態にいたるが、その後は新期収穫物の出廻りと輸入品によって市場価格の安定をとり戻している。

表85 フェイジョン：小売価格 Cr\$ / kg

月別	1983年	1984年
1	173	
2	202	1,118
3	241	1,617
4	284	2,314
5	326	2,296
6	353	2,018
7	517	2,009
8	628	1,835
9	837	1,900
10	1,035	2,000
11	955	2,097
12	972	2,145

出所：IEA

サンパウロ市



二) 生産コスト

サンパウロ州農務局農業経済研究所が発表した84/85農年及び85/86農年生産コスト予想は表86~87のとおりである。

表86 フェイジョン：生産コスト 1ha当り10俵(60kg) 収穫の場合 ソロカバ地区(SP)

区 分		84 / 85年		85 / 86年	
A, 作業コスト	所要日数	単価 Cr\$	金額 Cr\$	単価 Cr\$	金額 Cr\$
1) 労働力	17.81	6.4	114.0	21.6	383.8
2) 家畜	7.06	0.8	5.6	2.8	20.0
3) 耕起	1.62	0.4	0.6	1.3	2.1
4) 碎土	0.86	0.3	0.3	0.7	0.6
5) 播種・施肥	0.80	1.0	0.8	12.4	9.9
6) 中耕	1.50	0.2	0.3	0.7	1.1
7) 運搬	0.37	0.4	0.1	1.6	0.6
8) 防除	0.59	0.3	0.2	1.0	0.6
小計	—	—	121.9	—	418.6
B, 資材コスト	数量				
1) 種子	50.00 kg	3.5 / kg	175.0	4.5 / kg	225.0
2) 配合肥料	0.16 T	370.3 / T	59.3	1,376.1 / T	220.2
3) 殺菌剤	1.03 kg	10.6 / kg	10.9	32.0 / kg	33.0
4) 殺虫剤	0.37 L	19.5 / L	7.2	70.1 / L	25.9
5) 殺蟻剤	1.00 kg	2.3 / kg	2.3	10.0 / kg	10.0
6) 袋	10.00 U	0.8 / U	8.3	3.2 / U	32.0
小計	—	—	262.9	—	546.1
直接費計	—	—	384.8	—	964.7
C, 間接コスト					
1) 機械償却費			5.8		25.9
2) 銀行利息、生産費			172.4		438.2
固定投資			1.3		—
合計	—	—	564.3	—	1,428.8

出所：IEA

表87 フュイジョン：生産コスト 1 ha 16俵 (60kg) 収穫の場合 ソロカバ地区 (S P)

区	分	84/85		85/86	
		単価 CR	金額 CR	単価 CR	金額 CR
A- 作業コスト		所要時間			
1) 労働力	11.10	6.4	71.0	21.6	239.2
2) トラクター運転手	1.82	8.8	16.1	28.2	51.3
3) 4輪トラクター	1.82	65.3	118.8	191.8	349.0
4) 耕起	0.40	3.6	1.4	12.4	5.0
5) 碎土	0.56	7.6	4.3	37.2	20.8
6) 家畜肥	1.98	0.8	1.6	2.8	5.6
7) 播種施肥	0.22	1.0	0.2	12.4	2.7
7) 中耕	1.98	0.2	0.4	0.7	1.4
9) 防除	0.25	3.5	0.9	19.6	4.9
10) 運搬	0.26	4.4	1.1	14.5	3.8
11) 膜穀	0.13	7.4	1.0	29.3	3.8
小計	—	—	216.9	—	687.5
B- 資材コスト		数量			
1) 種子	50.00 KG	3.5/ KG	175.0	4.5/ KG	225.0
2) 石灰	1.50 T	13.8/ T	20.7	70.0/ T	105.0
3) 配合肥料	0.40 T	370.3/ T	148.1	1,376.1/ T	550.4
4) 殺菌剤	4.50 KG	10.6/ KG	47.8	32.0/ KG	144.2
5) 殺虫剤	3.60 L	19.5/ L	70.0	70.1/ L	252.3
6) 殺蟻剤	1.00 KG	2.3/ KG	2.3	10.0/ KG	10.0
7) 袋	14.00 U	0.8/ U	11.6	3.2/ U	44.8
小計	—	—	475.5	—	1,331.8
直接費計		—	692.4	—	2,019.3
C- 間接コスト					
1) 機械償却費			29.9		116.7
2) 銀行利息 生産費			310.1		917.1
銀行利息固定投資			9.3		—
合計	—	—	1,041.7	—	3,053.1

出所：IEA

3.1.4 ソルガム

イ) 生産

83/84農年におけるソルガムの収穫面積は150千ヘクタールで前年を13.8%増加した。前年も9.5%増加していたので、このところ生産増加の傾向を示しており、80年以降上昇カーブを続けている。

生産量の方は、前年東北地方及び北部地方の天候不順によって単収を大巾に低下させたため、全体的に生産量は減少していたが、83/84年には単収のレベルをやや回復して2トン近い単収をあげたため、総生産量は300千トンに達し過去5ヶ年間最高の記録を作った。ただし76/77年に達した435千トンには遠く及んでいない。

ブラジルにおけるソルガムの栽培は雨期と乾期に分けて行なわれる。主要生産地の中リオ・グランデ・ド・スール州は雨期収穫、サンパウロ州は乾期収穫(2～3月に播種、6～7月に収穫)が主である。

ソルガムはとうもろこしと比較して乾燥に強いため、東北地方での栽培に適しており奨励されている。現在ま

表88 ソルガム：1984年生産実績

順位	州 別	面積 1,000ha	生産量 1,000トン	単 収 kg/ha
1	リオ・グランデ・ド・スール	66.0	136.7	2,072
2	サンパウロ	35.0	70.0	2,000
3	パラナ	15.0	39.6	2,629
4	ペルナンブコ	9.9	14.8	1,490
5	リオ・グランデ・ド・ノルテ	9.9	12.3	1,250
6	その他	15.0	27.2	1,813
	合 計	150.8	300.6	1,994

出所：IBGE

表89 ソルガム：過去5ヶ年間の生産推移 1,000トン

州 別	1980年	1981年	1982年	1983年	1984年
1, リオ・グランデ・ド・スール	141.0	131.0	105.6	106.0	136.7
2, サンパウロ	32.5	68.4	70.0	62.5	70.0
3, パラナ	1.6	4.3	13.8	33.1	39.6
4, その他	5.2	9.3	21.6	11.4	54.3
合 計	180.3	213.0	211.0	213.0	300.6
面積 1,000 ha	78.2	92.2	115.0	109.6	150.8

出所：IBGE

表90 ソルガム：主要生産地の単収 kg/ha

州 別	1980年	1981年	1982年	1983年	1984年
リオ・グランデ・ド・スール	2,399	2,505	2,095	2,047	2,072
サンパウロ	2,449	2,321	2,000	2,000	2,000
パラナ	4,197	3,660	2,338	2,686	2,629
全 国 平 均	2,305	2,309	1,835	1,941	1,994

出所：IBGE

でのところ栽培面積はそれ程大きなものではないが、とうもろこしと比較して天候不順による損害が少ないため、ソルガムの栽培に次第に関心が高まっており、東北地方の主要産地セアラー、リオ・グランデ・ド・ノルテ及びペルナンブコ3州の栽培面積は82/83農年より83/84農年にかけて倍加している。ただし単収は、いまだに低く1haあたり1.5トン程度で全国平均を下廻るレベルにある。

国内市場は、とうもろこしと競合しており、とうもろこしが不足するとソルガムの需要が増加し、価格が上昇する。83年には南部地方の水害によって、とうもろこしの供給が不順となったため、ソルガムの価格が上昇したが、84年はとうもろこしの生産・供給ともに順調であったため、ソルガム価格への大きな影響はみられていない。

ソルガムもとうもろこしと同様に最低価格保証制度に含められており、EGF（現物担保貸付）及びAGF（政府の買上）が行なわれている。CFP（生産融資公社）の資料によると過去10年間のEGF及びAGFは下表の通りであった。

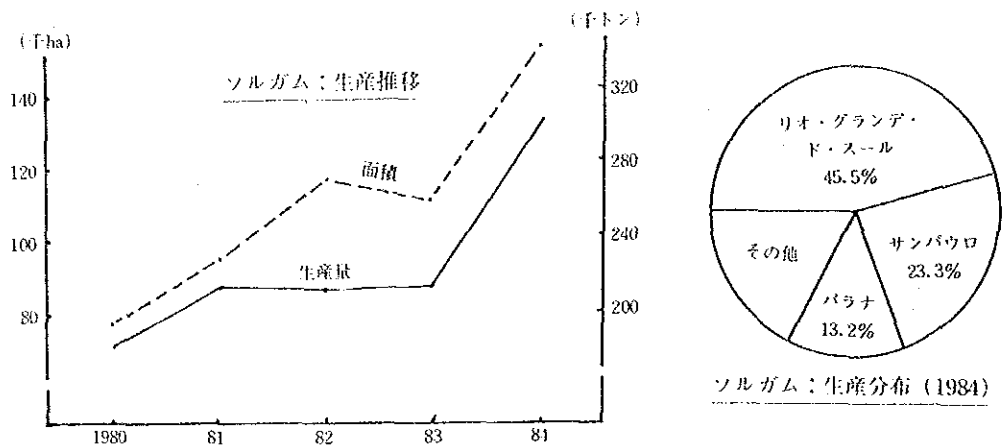


表91 ソルガム：最低価格保証制度による取扱量 トン

年 度	EGF	AGF
1975	6,819	768
76	76,665	9,344
77	50,566	95,423
78	9,388	10,472
79	3,264	445
80	14,539	—
81	44,734	818
82	22,183	46,621
83	18,693	12,142

出所：CFP

ロ) 生産コスト

3.1.5 小麦

イ) 生産

83/84農年の小麦生産は面積・生産量ともに前年を下廻り、過去5年間の中では面積において最低、生産量では82年のみに勝る低いレベルのものであった。全国平均の単収も1ヘクタール当り818 kgと低く、前年に達した

表92 ソルガム：生産コスト 1 haあたり52俵収穫 リベイロン・プレット地区 CR 1,000

項 目	所要日数	83/84		84/85	
		単 価	金 額	単 価	金 額
A- 作業コスト					
1) 労 働 力	1.57	7.5	11.8	23.6	37.1
2) トラクター運転手	2.36	10.7	25.3	30.7	72.3
3) 4輪トラクター	2.24	65.3	146.3	191.8	429.5
4) 耕 起	0.36	3.6	3.3	12.4	4.5
5) 碎 土	0.41	7.6	3.1	37.2	15.3
6) 運 搬	0.21	4.4	0.9	14.5	3.0
7) 施 肥 播 種	0.17	1.6	0.3	9.6	1.6
8) 中 耕	1.04	2.3	2.4	10.0	10.4
9) 収 穫	0.12	148.2	17.8	447.7	53.7
10) 防 除	0.25	4.9	0.2	19.6	1.0
小 計	—	—	209.4	—	628.4
B- 資材コスト					
1) 種 子	8.00 KG	3.6/KG	28.8	10.0/KG	80.0
2) 配 合 肥 料	0.41 T	370.3/T	151.8	1,376.1/T	564.2
3) 追 肥 用 硫 安	0.16 T	322.2/T	51.6	1,364.2/T	218.3
4) 殺 虫 剤	0.70 L	9.2/L	6.4	33.2/L	23.2
5) 殺 蟻 剤	1.10 KG	2.3/KG	2.5	10.0/KG	11.0
6) 袋	52.00 U	0.8/U	42.9	3.2/U	166.4
小 計	—	—	284.0	—	1,063.1
直接コスト計	—	—	493.4	—	1,691.6
C- 間接コスト					
1) 機 械 償 却 費			38.7		140.8
2) 銀 行 利 息 生 産 費			265.2		921.9
〃 固 定 投 資			13.9		
合 計	—	—	811.2	—	2,754.3

出所：IEA

表 93

小麦：1984年生産実績

順位	州 別	面積 1,000ha	生産量 1,000トン	単収 kg/ha
1	パ ラ ナ	829.2	1,086.7	1,310
2	リオ・グランデ・ド・スール	634.2	611.6	965
3	サンパウロ	138.3	113.1	817
4	マット・グロッソ・ド・スール	111.1	108.8	979
5	ミナス・ジェライス	13.1	23.7	1,810
6	その他	15.4	12.6	818
	合 計	1,741.3	1,956.5	1,124

出所：IBGE

表 94

小麦：過去5ヶ年間の生産推移

1,000トン

州 別	1980年	1981年	1982年	1983年	1984年
1, パ ラ ナ	1,350.0	915.0	1,025.0	1,066.0	1,086.7
2, リオ・グランデ・ド・スール	1,016.2	1,073.0	517.0	794.5	611.6
3, サンパウロ	195.3	131.5	134.0	200.0	113.1
4, マット・グロッソ・ド・スール	110.0	65.4	120.0	158.2	108.8
5, ミナス・ジェライス	21.0	16.0	39.4	27.5	23.7
6, そ の 他	9.1	8.7	14.0	18.8	12.6
合 計	2,701.6	2,209.6	1,849.4	2,265.3	1,956.5
面積 1,000 ha	3,122.1	1,920.1	2,829.0	1,885.0	1,741.3

出所：IBGE

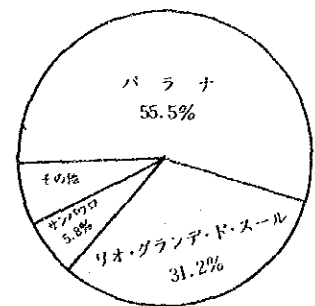
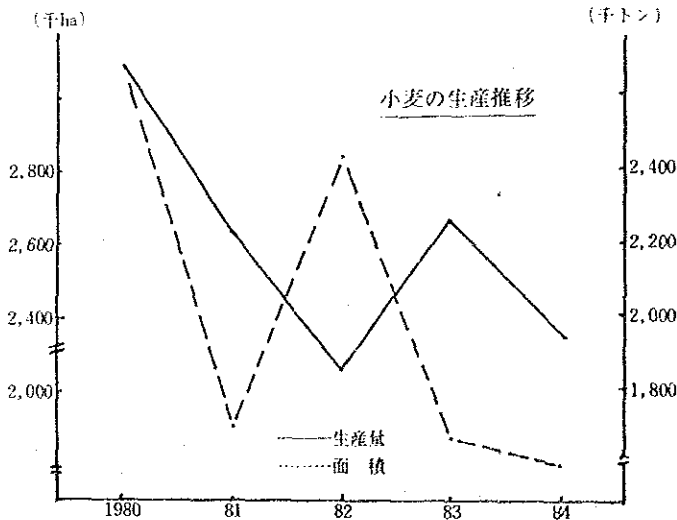


表 95

小麦：主要生産地の単収

kg/ha

州 別	1980年	1981年	1982年	1983年	1984年
パ ラ ナ	937	1,166	872	1,187	1,310
リオ・グランデ・ド・スール	748	1,186	395	1,156	965
サンパウロ	1,109	999	1,000	1,367	817
マット・グロソ・ド・スール	900	813	734	1,383	979
ミナス・ジェライス	1,623	1,626	1,600	1,442	1,810
全 国 平 均	865	1,151	654	1,202	818

出所：IBGE

1,202kgを32%減少しており、これが減産の大きな理由となっている。主要生産地帯の中ではパラナ州が前年を大きく上廻り、過去5ヶ年間で最高の単収をあげた以外は全国生産に31%のシェアを占めるリオ・グランデ・ド・スール州、同じく5.8%を占めるサンパウロ州とも単収を減じており、これが全国平均の単収減に影響した。過去5ヶ年間で82年の654kgに勝るだけの低いレベルであった。このように単収を低下させたのは主要生産地帯が見舞われた長期乾燥によるものであり、場所によっては50日以上降雨がなく水分の不足が成育に大きな影響を与えたことを理由としている。

通常、高い単収を記録した次の年は栽培面積が拡大されるのを常としているが、83/84農年に逆に面積を縮小したのは次の理由によっている。

- 1) 83/84農年より農業融資条件が変更され、金融費用が増大し営農収益をおびやかした。
- 2) 小麦作の運転資金とされる大豆作の販売融資(EGF)資金量が不足したほか、その貸付時期が遅延した。
- 3) サンパウロ州では小麦生産北部委員会(Comissão Norte Brasileira de Trigo)が設定した作付奨励品種の決定が3月になって行なわれ、4月より開始される播種時期に対し、生産者の植付意志決定の期間として短かすぎたこと。
- 4) 生産融資の基準とされるVBC(生産費基準額)については、84年3月22日付中銀回章第1008号によって生産性が1,201~1,400kg/haのものに対し、ヘクタール当りCr\$239,500と定められたが、サンパウロ州農務局が算出したコストCr\$576,049/haに比して極めて低い水準のものであり、生産者の満足する線ではなかった。このため生産者団体による対政府交渉が行なわれ、その結果、融資枠を中農に対しては60%より80%へ、大農は40%より60%へと引上げられることとなった。ただしこの決定が行なわれたのは5月であり、すでに大半の植付けが終った時期であったので実際の効果は現わしていない。

ロ) 国際市場とブラジルの輸入

米農務省が行なった推定によると、83/84農年における小麦の世界生産は栽培面積において前農年を4.2%減少したが、世界の生産地帯が一般的に天候に恵まれたため平均単収が向上し(1ヘクタール当り前農年の20.3俵に対し83/84農年は21.7俵)、また、米国、アルゼンチン、ソ連など世界の主要生産国の減産が、オーストラリア、中国、インド等の増産によってカバーされたため、世界の生産量は490.1百万トンの史上最高の記録となった。

主要生産国の中、米国の減産は同国政府がすすめた減反政策(PIK - Payment in Kind)によるものであり、冬期栽培面積が前農年の23.6百万トンより19.1百万トンに減少したためである。ただし栽培期間を通じて気象条件がよかったことや、生産性の低い地帯での栽培を避けたことなどから単収は史上最高のレベルに達した。米国の小麦生産量65.9百万トンの中82%は冬期栽培、18%が春期栽培によるものである。また品種は生産量の50%が

Hard Red Winter、31%がSoft Red Winter、14%がWhite、その他となっている。

83/84農年に世界最大の生産を行なった中国は栽培面積の増加に加え、天候条件に恵まれて史上最高の単収をあげ生産量増大を決定づけた。

また対前年比145%という大巾な生産増をみたオーストラリアの場合は、前年乾燥によって小麦地帯が多大の被害を受け、8.9百万トンの生産量に終わっていたのを復活したものである。

表 96 小麦：世界の生産 100万トン

国 別		82/83	83/84
中 国		68.4	81.4
ソ 連		86.0	78.0
米 国		76.5	65.9
E C 圏		59.8	59.3
イ ン ド		37.5	42.5
東 欧 諸 国		34.7	35.3
カ ナ ダ		26.8	26.9
オーストラリア		8.9	21.8
ト ル コ		13.8	13.3
パ キ ス タ ン		11.1	12.4
ア ルゼンチン		14.5	12.0
そ の 他		42.6	41.3
計		480.6	490.1

出所：USDA/NUMERO ESTADISTICO

表 97 小麦：国際市場価格（カンサス）

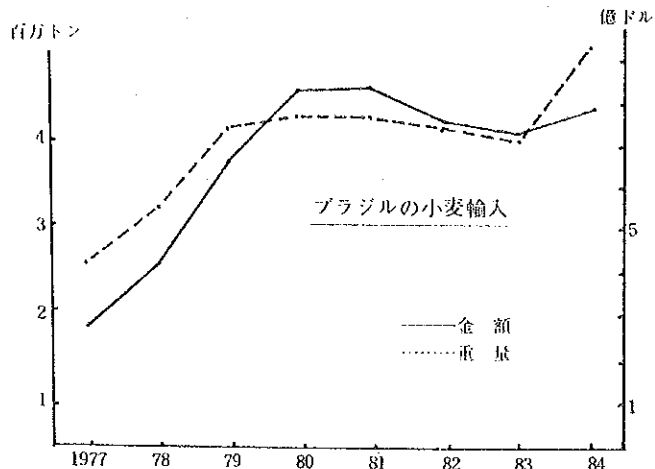
月別	1982/83年		1983/84年	
	US\$/トン	前月比 %	US\$/トン	前月比 %
8月	133.19	- 0.90	141.99	7.11
9月	139.70	4.89	142.27	0.20
10月	131.31	- 6.16	139.29	- 2.09
11月	135.28	3.02	136.82	- 1.77
12月	138.49	2.37	136.41	- 0.30
1月	138.94	0.32	135.66	- 0.55
2月	143.13	3.02	132.86	- 2.06
3月	146.98	2.69	137.16	3.24
4月	144.83	- 1.46	139.30	1.56
5月	140.57	- 2.94	137.85	- 1.04
6月	131.59	- 6.39	134.09	- 2.73
7月	132.56	0.74	132.05	- 1.52

出所：NUMERO ESTADISTICO 84

表98 小麦：ブラジルの輸入推移

年度	重量 1,000トン	金額 FOB 100万ドル
1977	2,608	290
78	3,261	412
79	4,149	657
80	4,355	822
81	4,360	832
82	4,224	762
83	4,182	727
84	4,867	755

出所：CACEX



ソ連の減産は栽培面積の減少、天候不順にもとづくものであり、主要生産地帯のウクライナ地方、ボルガ下流地方が乾燥の被害を受けたためであった。

南米最大の小麦生産国であるアルゼンチンも又、前年比生産を減少した国の1つで、前年の14.5百万トンより12.0百万トンへと(-)17.2%生産を落した。これは作付面積自体が前年を下廻ったのに加え、天候不順のため一部の地域で収穫が放棄され、収穫面積が更に減少したためのものであった。しかし、この生産量は前農年に次いで史上2番目の大型収穫となっている。

世界の小麦貿易をみると、83年7月より84年6月間における世界の輸出量は106.8百万トンで前年とほぼ同水準であった。世界の主要輸出国は米国を始めとしカナダ、フランス、アルゼンチン、オーストラリアの割合が大きく、83年度の統計では世界輸出量の92%がこの5ヶ国によって占められていた。これに対し世界の輸入国としては中国、日本、ブラジル、エジプト、ポーランド、アルゼリア等の輸入が大きく、中でもブラジルの輸入は82年度において世界輸入の4.2%、83年において4.7%を占めている。またブラジルの輸入は南米諸国輸入量の40%に相当する量である。

世界の小麦需給は米国農務省の推定によると、82/83農年より繰越された96.3百万トンに83/84農年の生産量490.1百万トンを加えた586.5百万トンの供給量に対し、消費の方は生産の増加率を下廻る見込みのため83/84農年末の世界在庫は、前年の96.3百万トンに対し101.4百万トンに増加する見込みである。

世界の小麦相場は、このように豊富な供給態勢の中で低迷しており、小麦と飼料作物との価格関係、とくにPIK政策によって価格の上昇をみたとうもろこしの価格関係を悪化した。

1984年度におけるブラジルの輸入は国内生産の減少を反映して487万トンの記録的な量に達したが、上記の国際市場が幸して輸入金額はその割合に伸びておらず755百万ドル(FOB)に止まっている。しかしこの金額は農産物輸入の50%、輸入総額の6%を占め、単独項目としては石油に次ぐ大型の輸入品目である。

輸入先国は米国、カナダ、及びアルゼンチンの3国によっており、それぞれ2,558千トン、1,509千トン及び890.7千トンの供給を受けている。

ハ) 国内市場及び価格

小麦の買上げ販売は依然として公的機関(ブラジル銀行)によって行なわれており、民間の介入は許されていない。ブラジル銀行による国産小麦の買付けは年末の3ヶ月に集中して行なわれる。

月別	1982	1983	1984
1	—	—	11,135
2	—	—	—
3	—	—	—
4	—	—	18,025
5	—	—	—
6	—	—	—
7	—	—	—
8	3,059.90	7,458	25,381
9	3,104.70	8,216	28,101
10	3,288.26	9,093	30,570
11	3,298.85	9,256	—
12	3,301.90	11,131	—

出所：IEA

月別	1982	1983	1984
月別	45	81	305
2	47	86	310
3	48	100	388
4	48	105	408
5	56	103	433
6	69	114	441
7	70	188	524
8	71	216	619
9	72	250	619
10	74	286	660
11	73	290	793
12	79	291	890

出所：IEA

また小麦が国民の基礎食糧であるところから、すでに長期にわたって小麦に対する補助が続けられてきた。小麦に対する補助は、政府が生産者より買上げる価格と、各製粉工場へ配給する価格に差をつけその差額を補助する形で続けられている。83年の第4四半期に政府が買上げた価格はトンあたり Cr\$ 168,794であったが、84年7月以降製粉工場に対する販売価格は Cr\$ 223,809に定められたが、前年末に買付けられ繰越された小麦については事実上補助なしで販売されることになる。

しかし、輸入小麦の方は依然として補助が継続されている。すなわち84年7月のシカゴ相場をクルゼイロに換算するとトンあたり Cr\$ 225,810 (FOB)となり、ほぼ国内の製粉工場に対する販売価格に相当するが、この他、海上運賃、保険料等が20%ばかりかかるので、この分が補助される形となっている。

世界の需給関係、世界在庫のレベル等よりみて世界の相場は短期に上昇する見通しはなく、シカゴの先物相場も84年7月渡しが Cr\$ 225,810/トン、85年7月渡しのものが Cr\$ 235,650/トンとなっている。

国産小麦の買上げ価格はトンあたり US\$ 225と定められ、毎月1日の交換レートでクルゼイロに換算される仕組みとなった。買上げ価格は82年に275ドルであったものが83年2月のクルゼイロ大巾切下げの際203ドルに改訂されたあと、84年にこれを調整し生産奨励策としたものである。

84年の第1四半期における買上げ価格は225ドルでクルゼイロに換算した Cr\$ 702,580となる。これに対し製粉工場渡し価格は Cr\$ 223,809であるため、小麦に対する補助を撤廃するためには現行の製粉工場渡し価格に対し214%の調整を行なう必要が生じる。

ソバについて

ブラジルでは Trigo Mourisco と呼ばれているソバの生産は、パラナ川のポンタ・グロッサ市を中心とする地域で行われ、70年代の始めに日本より進出したマック・ブロス社 (Mak Bros. 注：日本本社は島田屋) による買付け、加工、日本への輸出により生産が維持されてきた。しかしながら83/84農年には上記マック・ブロス社が倒産したためポンタ・グロッサ周辺の生産が中止され、全国的に大巾な減産となった。(注：リオ・グランデ・ド・スール州でも栽培されている)

マック・プロス社の倒産のほか国際市況も悪く、生産者の植付意欲を刺激しなかった点も生産を落した理由となっている。すなわち植付準備に入る時期の国際相場はトンあたり170ドルで最低の採算線よりも低い状態にあった。ただし83/84農年の生産量は、従来唯一の情報提供者であったマック・プロス社の業務中断により全く不明であり、輸出量より推定する以外にない。

ソバの輸出は1983年に重量で30,098トン、金額で4.4百万ドル、輸出平均単価はトンあたり146.19ドルで1982年の平均単価198.90ドルを大巾に下廻った。1984年度は上記の情勢の中で輸出量は6,740トン、輸出額136万ドルに減少、ただし平均単価は201.8ドルであった。

ソバの輸出価格は1980年にトンあたり315ドルまで上昇したあと、83年の一時期には110ドルまで落ちており極めて安定性を欠いている。

海外市場では従来、日本が最大の買手であったが、対日輸出を行ってきたマック・プロス社の閉鎖により84年は日本の輸入は減少しており、オランダへの輸出が全量の87%を占めている。

3.1.6 大 麦

イ) 生 産

南部3州を生産地帯とする大麦の国内生産は、80年より82年にかけて大巾な栽培面積の増加がみられたが、面積が最高に達した82年度に天候不順のため単収を半減して生産を落して以降、栽培面積は再び復活することなく減少を続けており84年には80年のレベルに戻っている。この間83年には単収の回復により生産量はやや増加したものの、84年は面積の大巾な減少により生産量を再び落している。

表 101 大麦：1984年生産実績

順 位	州 別	面 積 1,000ha	生産量 1,000トン	単 収 kg/ha
1	リオ・グランデ・ド・スール	42.1	47.2	1,122
2	パ ラ ナ	19.6	18.4	940
3	サンタ・カタリーナ	11.4	11.8	1,030
合 計		73.1	77.4	1,059

出所：IBGE

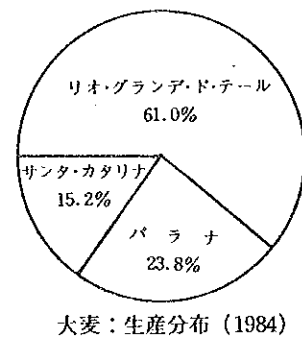
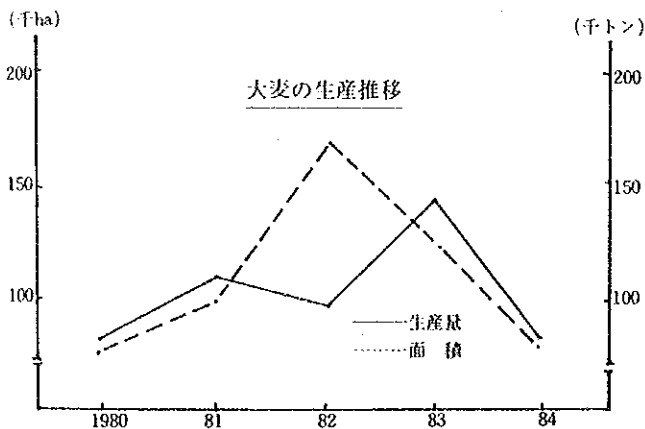


表 102

大麦：過去5ヶ年間の生産推移

1,000トン

州 別	1980年	1981年	1982年	1983年	1984年
1, リオ・グランデ・ド・スール	37.1	63.4	56.6	91.2	47.2
2, パラナ	35.0	35.4	31.2	22.0	18.4
3, サンタ・カタリーナ	2.5	11.4	10.6	18.0	11.8
合 計	74.6	109.9	98.4	131.2	77.4
面積 1,000 ha	72.0	95.6	167.0	122.3	73.1

出所：IBGE

表 103

大麦：主要生産地の単収

kg/ha

州 別	1980年	1981年	1982年	1983年	1984年
リオ・グランデ・ド・スール	964	1,185	519	1,030	1,122
パラナ	1,160	1,017	710	1,048	940
サンタ・カタリーナ	753	1,504	774	1,418	1,030
全 国 平 均	1,036	1,149	590	1,073	1,059

出所：IBGE

ロ) 国際市場とブラジルの輸入

国内の生産地帯が限定され大麦を原料とするビール工業用麦芽の絶対量が不足し、毎年多額の輸入を行なっている。ブラジルにとって国際市場の動き、とくに価格の動向は大きな関心事である。

大麦の世界生産はソ連、カナダ、英国、米国及びフランスを主要生産国とし、FAOの統計によると1983年度で167百万トンの生産が行なわれている。中でもソ連の生産が大きく世界生産の54%を占めるが、国内消費が大きいため輸出国としてはカナダ(83年で世界輸出の31.2%)を筆頭とし、フランス、英国、米国及びオーストラリアとなっている。

世界の輸出货量は約2千万トン程度であり、その3分の1を占めるカナダの供給態勢が大麦の国際相場に大きく影響する。カナダの需給関係は下の表に示す通りで、83/84年には供給態勢がすべての項目について前年を下回ったのに対し、国内消費量は増加しており、それだけ供給能力を弱めている。このような供給量の減少は、83年の後半より84年の始めにかけて北半球を襲った極度の乾燥と高温の被害によるものであり、カナダの大麦供給の減少は、米国のとうもろこしの減産と共に世界の穀物及び油脂原料作物の相場に影響した。

表 104

大麦：カナダの需給関係

項 目	82/83	83/84	前年比%
収穫面積 1,000ha	5,189	4,622	(-)10.9
単 収 トン/ha	2.71	2.30	(-)15.1
生産量 1,000トン	14,074	10,616	(-)25.6
国内消費量	7,241	7,400	2.2
輸 出 量	6,045	5,500	(-)9.0
期末在庫量	5,324	2,540	(-)52.3

出所：NUMERO ESTADISTICO 84

ブラジルの輸入は大麦及び麦芽の2種の形態で行なわれている。工業原料としての大麦の需要量は、83年度で225千トンであったので、84年もほぼ同等とすれば国内生産量はその半分にも満たず、結局年間を通じて146千

表 105 大麦：カナダWINNIPEG市場価格

月 別	1982/83	1983/84		82/83 83/84
	価格US\$ / トン	価格US\$ / トン	前月比 %	対比 %
8月	84.4	90.34	20.3	11.8
9	75.9	104.58	10.9	37.9
10	74.0	109.75	4.9	48.3
11	80.7	105.61	- 3.8	30.8
12	81.3	102.91	- 2.6	26.5
1	84.9	107.94	4.9	27.2
2	85.8	101.15	- 6.3	17.9
3	84.5	102.85	1.7	21.7
4	86.9	103.31	0.3	18.9
5	84.6	108.98	5.5	28.9
6	80.7	105.20	- 3.5	30.3
7	78.4	97.42	- 7.4	24.3

出所：NUMERO ESTADISTICO 84

表 106 大麦：1984年の輸入実績

輸 入 先 国	重量 1,000トン	FOB 100万ドル	CIF 100万ドル
ウルグァイ	64.3	16.1	16.1
オーストラリア	41.8	7.8	9.4
アルゼンチン	20.0	4.7	4.8
チリ	14.0	2.5	2.8
スエーデン	6.3	0.8	1.0
計	146.4	31.9	34.1

出所：CACEX

表 107 麦芽：1984年の輸入実績

輸 入 先 国	重量 1,000トン	FOB 100万ドル	CIF 100万ドル
ウルグァイ	39.5	16.0	16.0
西 独	30.2	7.8	10.0
チリ	15.9	5.7	6.5
アルゼンチン	13.3	5.4	5.4
デンマーク	11.3	3.3	4.2
東 独	10.7	2.6	3.7
そ の 他	26.0	6.8	9.0
計	146.9	47.6	54.8

出所：CACEX

トンの輸入が行なわれ、34百万ドルが支出された。またビール原料としての麦芽の工業消費は34万トン(83年度)であり、83年は国内生産が185千トンであったため不足155千トンに対して161千トンの輸入が行なわれた。84年はビールの国内消費減少により輸入量は146千トンに減少しており、54.8百万ドルが支出されている。麦芽の平均価格はトンあたり82年353ドル、83年326ドル、84年は321ドルであった。

ブラジルの輸入先市場は大麦の場合、ウルグァイ、オーストラリア、アルゼンチン、チリー及びスウェーデン、また麦芽の場合はウルグァイ、西独、チリー、アルゼンチン等を主要市場としている。

3.1.7 からす麦

イ) 生産及び消費

表 108

からす麦：1984年生産実績

順位	州 別	面 積 1,000ha	生産量 1,000トン	単 収 kg / ha
1	リオ・グランデ・ド・スール	60.5	60.5	1,000
2	サンタ・カタリナ	38.7	44.6	1,151
3	パラナ	21.3	28.0	1,318
	合 計	120.5	133.1	1,104

出所：IBGE

表 109

からす麦：過去5ケ年間の生産推移

1,000トン

州 別	1980年	1981年	1982年	1983年	1984年
1, リオ・グランデ・ド・スール	48.0	59.0	39.1	53.3	60.5
2, サンタ・カタリーナ	13.0	21.4	15.0	17.2	44.6
3, パラナ	15.0	18.1	14.0	28.0	28.0
合 計	78.0	98.5	68.1	98.5	133.1

面 積 1,000 ha	75.5	90.2	97.1	97.0	120.5
--------------	------	------	------	------	-------

出所：IBGE

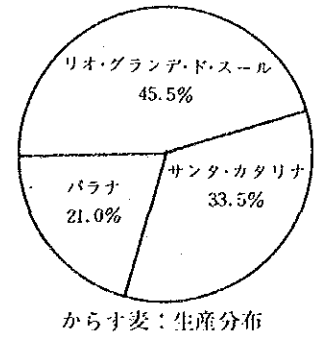
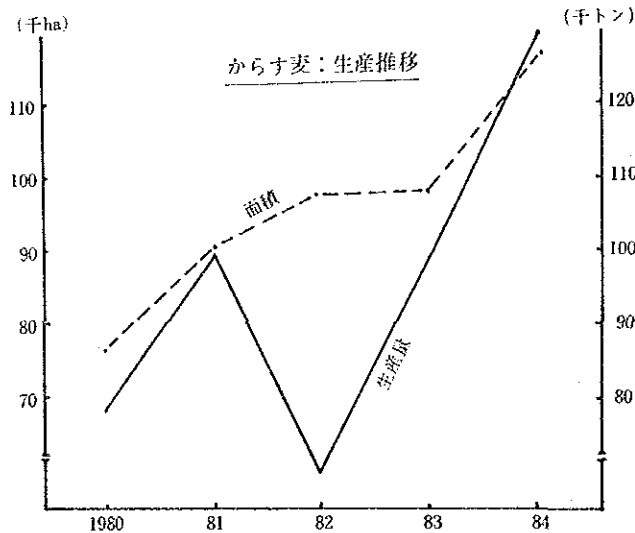


表 110

からす麦：主要生産地の単収

kg/ha

州 別	1980年	1981年	1982年	1983年	1984年
リオ・グランデ・ド・スール	932	1,029	644	790	1,000
サンタ・カタリーナ	781	924	745	750	1,151
パラナ	1,926	1,852	855	1,400	1,318
全 国 平 均	1,001	1,091	701	1,018	1,104

出所：IBGE

大麦の場合と同様に1982年に天候不順のため大巾に単収を落し、結果的に生産量を減少したあと83年に生産を回復、84年には栽培面積の拡大に応じて生産量も過去5ヶ年間最高の規模に達した。

国内では南部3州だけで生産されており、その他の州での生産記録はない。中でもリオ・グランデ・ド・スール州の生産がもっとも大きく、全作の45.5%を占めている。

からす麦の国内消費量は1983年で約10万トンと推定され、不足分として17.2千トンが輸入された。84年の国内消費量を明らかとした資料はないが、1万トンの輸入が行なわれているので国内消費量は可成り増加したものと推定される。

3.1.8 ライ麦

ブラジルのライ麦生産は1981年に24千トンの生産が行なわれたのを最後に、以後減少し84年度もわずか2.8千トンの微々たる生産に止まっている。82年に高温と降雨過剰によって病気が蔓延したため、同年に期待されていた

表 111

ライ麦：1984年生産実績

順位	州 別	面積 1,000 ha	生産量 1,000トン	単収 kg/ha
1	パラナ	2.6	1.8	707
2	サンタ・カタリーナ	0.6	0.5	819
3	リオ・グランデ・ド・スール	0.6	0.5	915
	合 計	3.8	2.8	756

出所：IBGE

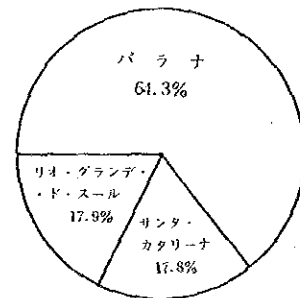
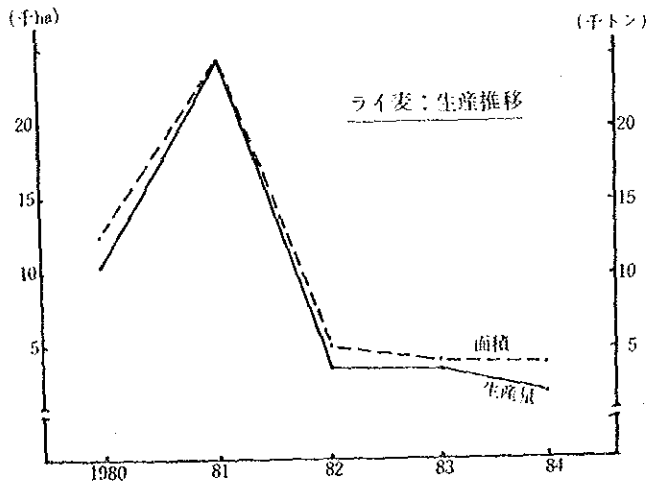


表 112 ライ麦：過去5ヶ年間の生産推移 1,000トン

州 別	1980年	1981年	1982年	1983年	1984年
1, パ ラ ナ	2.6	15.2	1.8	1.4	1.8
2, サンタ・カタリーナ	2.4	6.0	0.7	1.2	0.5
3, リオ・グランデ・ド・スール	5.4	3.2	1.2	1.0	0.5
合 計	10.4	24.4	3.7	3.6	2.8
面積 1,000 ha	12.2	24.3	4.7	3.9	3.8

出所：IBGE

表 113 ライ麦：主要生産地の単収 kg/ha

州 別	1980年	1981年	1982年	1983年	1984年
パ ラ ナ	710	992	1,020	875	707
サンタ・カタリーナ	768	1,087	687	1,031	819
リオ・グランデ・ド・スール	1,013	930	636	868	915
全 国 平 均	857	1,005	796	922	737

出所：IBGE

た60千トンの予想がわずか3.7千トンに落ちて以降回復していない。

からす麦は製粉材料として小麦粉に混入出来るが、現状では供給量不足のためにそれも行なわれていない。

3.2 油脂原料作物

3.2.1 大豆

イ) 生産

83/84農年の大豆生産は過去5ヶ年間最大の面積942万ヘクタールの規模で行なわれたため、17百万トン台の記録的生産が期待されていたが、種子の品質が悪く発芽率が低下したことや、金融費用を中心としたコスト高が

表 114 大豆：1984年生産実績

順位	州 別	面積 1,000 ha	生産量 1,000トン	単収 kg/ha
1	リオ・グランデ・ド・スール	3,641.8	5,415.5	1,487
2	パ ラ ナ	2,177.9	4,121.0	1,892
3	マツト・グロソッ・ド・スール	1,179.4	2,002.6	1,698
4	マ ッ ト ・ グ ロ ッ ソ ッ	538.2	1,050.1	1,951
5	サ ン パ ウ ロ	483.1	870.7	1,802
6	ゴ ヤ ス	581.9	847.4	1,456
7	サンタ・カタリーナ	420.2	578.8	1,377
8	ミナス・ジェライス	332.2	554.2	1,688
9	そ の 他	62.0	95.5	1,540
	合 計	9,416.7	15,535.8	1,650

出所：IBGE

ら肥料の使用度が減少したことなど生産資材面の問題に加え、育成期間中数回にわたる長期乾燥等によって単収を落したため生産は伸びず、結局15.5百万トンに落ち着いた。単収の低下は主要生産州の全体にわたってみられ、例年1haあたり2トン以上の生産を行ってきたパラナ州が1,892kg/haに単収を落したのを始め、最大の生産地帯リオ・グランデ・ド・スール州でも前年を(-)4%下廻る単収に止まったのが全国平均の単収低下に大きく影響した。

国内の生産地帯は、伝統的な南部、南東部の他70年代中期より開始された中西部のセラード地帯に及んでおり、その範囲は広範にわたっている。主体は南部地方のリオ・グランデ・ド・スール州及びパラナ州で、この両州が

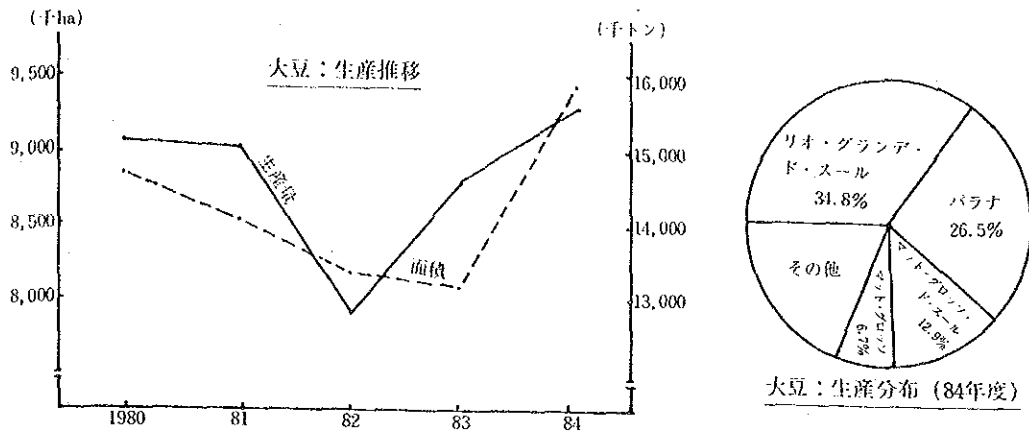


表 115 大豆：過去5ヶ年間の生産推移

州 別	1980	1981	1982	1983	1984
1 リオ・グランデ・ド・スール	5,737.2	6,088.3	4,220.6	5,269.0	5,415.5
2 パラナ	5,400.2	4,983.2	4,200.0	4,315.0	4,121.0
3 マット・グロッシ・ド・スール	1,322.1	1,347.4	1,537.3	1,801.0	2,002.6
4 マット・グロッシ	117.2	225.0	365.5	611.2	1,051.1
5 サンパウロ	1,099.0	1,032.0	993.3	966.0	870.7
6 その他	1,480.3	1,331.5	1,518.3	1,619.8	2,074.9
合計	15,156.0	15,007.4	12,835.0	14,582.0	15,535.8
面積 1,000ha	8,774.0	8,501.2	8,202.2	8,136.5	9,416.7

出所：IBGE

表 116 大豆：主要生産地の単収

州 別	1980	1981	1982	1983	1984
リオ・グランデ・ド・スール	1,438	1,595	1,192	1,548	1,487
パラナ	2,240	2,198	2,000	2,134	1,892
マット・グロッシ・ド・スール	1,639	1,733	1,825	1,946	1,698
マット・グロッシ	1,663	1,873	1,881	2,025	1,951
サンパウロ	1,959	1,901	1,925	2,055	1,802
全国平均	1,727	1,765	1,565	1,792	1,650

出所：IBGE

全国生産の60%を占めるが、州内の栽培地帯は限界に達しているため生産量にほとんど変化がなく、80年と比較して両州ともむしろ生産が落ちているのに対し、セラード地帯のマット・グロッソ・ド・スール及びマット・グロッソ両州の生産は伸びており、過去5ヶ年間の生産記録をみると前者において51%、後者の場合800%という飛躍的な生産増加が観察される。

ロ) 国際市場とブラジルの輸出入

83/84農年における油脂作物主要8品目の世界生産量は165.4百万トンと推定されており、前年を8%下廻っ

表 117 大豆(豆)：世界の生産、加工及び貿易

区 分	1981/82	82/83	83/84	83/84構成比%	83/84前年比%
<u>生産</u>					
米 国	54,136	59,611	43,400	53.6	(-) 27.2
ブラジル	12,835	14,582	15,220	18.8	4.4
中 国	9,328	9,030	9,760	12.1	8.1
アルゼンチン	4,150	4,000	6,100	7.5	52.5
そ の 他	6,149	6,438	6,481	8.0	0.7
計	86,598	93,661	80,961	100.0	(-) 13.6
<u>搾油</u>					
米 国	28,037	30,444	26,241	36.0	(-) 13.8
ブラジル	12,838	13,677	12,512	17.2	(-) 8.5
E C 諸 国	11,518	10,945	9,489	13.0	(-) 13.3
その他西欧	4,138	4,307	3,948	5.4	(-) 8.3
日 本	3,564	3,889	3,846	5.3	(-) 1.1
そ の 他	14,379	15,454	16,869	23.1	9.4
計	74,474	78,716	72,905	100.0	(-) 7.4
<u>輸出</u>					
米 国	25,524	24,546	19,601	77.3	(-) 20.2
アルゼンチン	1,726	1,418	3,045	12.0	114.7
ブラジル	523	1,106	1,552	6.1	40.3
そ の 他	1,149	1,308	1,143	4.6	(-) 12.6
計	28,922	28,378	25,341	100.0	(-) 10.7
<u>輸入</u>					
日 本	12,227	12,005	9,406	37.1	(-) 21.7
メキシコ	4,486	4,871	4,671	18.4	(-) 4.1
マレー	699	1,024	1,788	7.0	74.6
マレー	195	178	141	0.5	(-) 20.8
そ の 他	11,316	10,205	9,355	37.0	(-) 8.3
計	28,933	28,283	25,361	100.0	(-) 10.3

出所：OIL WORLD./ NUMERO ESTADISTICA

ている。OIL WORLDのデータによると、この中に占める大豆の比率は48.6%、重量にして80,961千トンで前年を14%下廻っており、これが油脂作物世界生産減少の大きな原因となっている。

83/84農年における大豆の世界生産減少を決定づけたのは世界最大の生産国米国の減産によるものであり、他の主要生産国のブラジル、中国、アルゼンチンはそれぞれ前年比生産を伸ばしている。このように他の生産国の増産にもかかわらず世界生産を減少させた米国の減産は、まず米国政府が採用した減反政策(PIK)によって栽培面積が縮小されたのに加え、乾燥による被害によって前年の生産量を30%近く減少した43.4百万トンの生産に止まったためであった。米国のこの生産量は過去13年間最低のレベルであり、また前年比栽培面積の減少率(-12%は1930年以来もっとも大きな減少率であったといわれている。米国では一般に大豆の方が、とうもろこしよりも

表 118 大豆：国際市場価格
ロッテルダム CIF US\$ / t

月別	1982	1983	1984	83/82%	84/83%
1	262	235	305	(-)103	29.8
2	254	242	293	(-)4.7	21.1
3	254	253	314	(-)0.4	24.1
4	265	252	315	(-)4.9	25.0
5	269	243	338	(-)9.7	39.1
6	254	263	308	3.5	17.1
7	249	339	270	36.1	(-)20.7
8	234	352	261	50.4	(-)25.9
9	216	350	245	62.0	(-)30.0
10	214	329	245	53.7	(-)25.5
11	231	324	250	40.2	(-)22.8
12	232	311	241	34.0	(-)22.5

出所：OIL WORLD WEEKLY

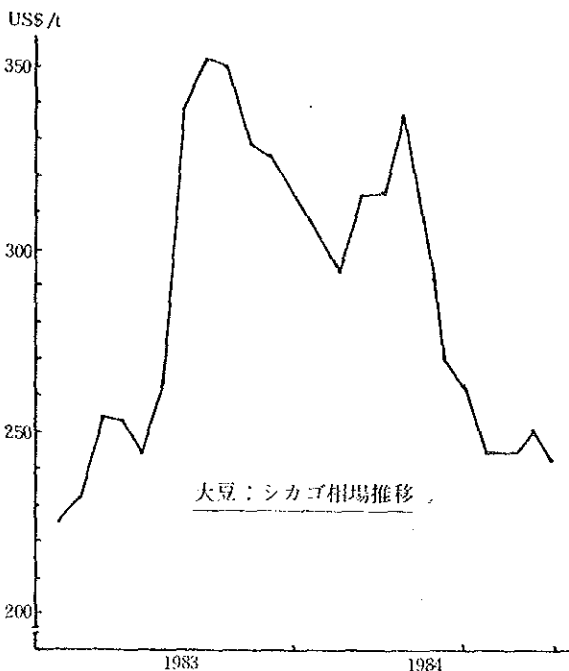


表 119 大豆(豆)ブラジルの輸出 1984年

輸出先国	重量 1,000トン	金額 100万ドル
スペイン	363.9	110.7
メキシコ	347.3	100.4
イタリア	181.9	53.0
ベルギー	180.8	50.1
オランダ	168.2	45.0
ポルトガル	149.9	44.5
フランス	70.9	21.4
西 独	45.2	13.6
そ の 他	53.0	15.4
計	1,561.1	454.1

出所：CACEX

12.01.04.00

乾燥に強いといわれているが、83/84年を襲った乾燥は、この大豆のもつ利点をも生かせ得ない程強烈なもので

表 120 大豆油：世界の需給 1,000トン

国 別	1981/82	82/83	83/84	83/84の前年比%
生産量				
米 国	4,980	5,461	4,936	- 9.6
ブラジル	2,406	2,563	2,350	- 8.3
E C	2,005	1,924	1,718	- 10.7
中 国	721	705	721	2.2
日 本	633	688	701	1.9
そ の 他	2,484	2,722	2,946	8.2
計	13,229	14,063	13,372	- 5.0
消費量				
米 国	4,322	4,469	4,322	- 3.3
ブラジル	1,498	1,641	1,475	- 10.0
E C	1,656	1,464	1,382	- 5.6
イ ン ド	558	546	780	42.9
中 国	719	731	755	3.3
そ の 他	4,887	5,110	5,180	1.4
計	13,640	13,961	13,894	- 0.5
輸 出				
ブラジル	854	1,020	994	- 2.5
E C	908	903	918	1.7
米 国	945	921	822	- 10.7
E C 外 西 欧	579	546	597	9.3
アルゼンチン	121	273	397	45.4
そ の 他	103	107	140	30.8
計	3,510	3,770	3,868	2.6
輸 入				
イ ン ド	256	281	357	27.0
E C	500	480	525	9.3
イ ラ ン	256	281	357	27.0
パキスタン	364	319	356	11.6
東 独	158	288	171	- 40.6
そ の 他	2,051	2,024	2,105	4.0
計	3,585	3,673	3,871	5.4
世界在庫				
計	1,681	1,686	1,167	- 30.8

出所：OIL WORLD/NUMERO ESTADISTICO

あり単収を落した。

世界生産の60%近くを占める米国の大巾な減産は、他の生産国における少々の増産ではカバーし得ず、結果的に前年を(-)13.6%下廻ることとなったものである。

世界生産の減少に伴ない工業加工原料としての大豆消費量、世界の貿易量ともに減少した。工業加工原料としての消費量も生産量の場合と同様に米国が最大のシェアを持ち、ブラジルがこれに続いており、輸出面では(豆)に限って米国に次いでアルゼンチンがブラジルに勝っている。世界貿易の減少は米国の輸出量減少によるものであるが、このほか世界供給の減少による国際価格の上昇に加え、ドル高による輸入国側の買い控えも大きく作用した。

83/84農年における大豆の国際相場はCIFロッテルダムの場合、平均281.67ドル/トンで前年を15.2%上廻るものであり、世界供給の減少を反映した。

次表はシカゴ市場における平均価格で、83年7月より84年6月にかけての高値が観察される。

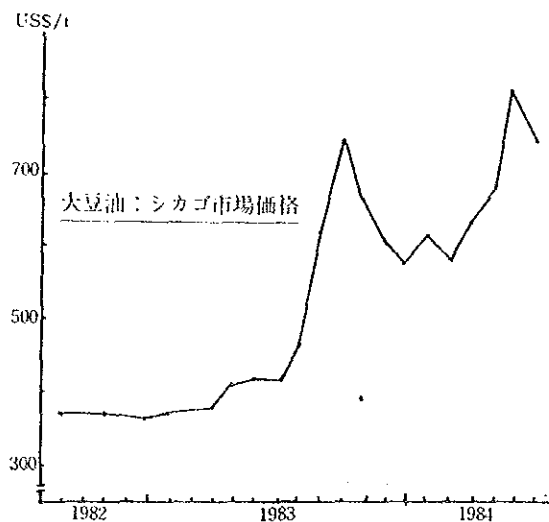
ブラジルの大豆(豆)輸出は、84年中に156万トンが販売され81年以降最大の輸出量となった。輸出先国は前年12万トンの買付けを行なったソ連が姿を消した以外は同様の市場構成であり、スペインが最大の輸出先市場となっている点も前年と同様である。大豆(豆)の輸出金額は前年を47%上廻って454百万ドルに達している。

次に大豆油の世界需給をみると、大豆(豆)の生産減少により搾油原料の供給が減少したため、油の生産も減少し13.4百万トンが生産されている。これに対する世界の消費量は13.9百万トンで生産量をオーバーしており、その分世界の期末在庫を減少した。世界の貿易量は390万トン弱でブラジルが最大の輸出国となっており、EC圏、米国、EC外西欧諸国、アルゼンチンが主要供給側にあり、インド、EC、イラン、パキスタン、東独等が主要輸入国である。84年の世界貿易をみると輸出国側においてブラジル、EC、及び米国が輸出量を減少したのに対し、アルゼンチンが大巾に増加しており、輸入国側では東独の輸入減少以外、主要輸入国が輸入を増加しているのが観察される。

生産国を含む世界の消費は米国がもっとも大きく、ブラジル、ECがこれに続いている。

大豆油：
シカゴ市場価格 US\$/t

月別	1982/83	83/84	前年比 %
8	386.27	624.46	61.7
9	379.60	732.22	98.2
10	378.06	674.17	78.3
11	376.60	610.67	62.2
12	365.36	590.09	61.5
1	373.65	624.36	67.1
2	379.53	590.79	55.7
3	386.55	642.78	66.3
4	418.90	692.42	65.3
5	427.80	819.55	91.6
6	418.11	750.72	79.6
7	469.99	666.25	41.7



出所：NUMERO ESTADISTICO

世界生産の減少にかかわらず、世界の消費量は前年のレベルを維持したため、世界の在庫は前年を(-)30.8%下廻る水準に落ち、これが国際相場に影響して価格をつりあげた。すでに米国の大豆(豆)減産が予想されていた83/84農年頭初よりヨーロッパの買付けが始まり、83年9月には前年同月比90%高という高値が記録されている。また84年に入るとマレー半島やスマトラにおけるオイルパームの生産減少によって、アジア諸国がその代替品として大豆油を求めたのも大豆価格相場を維持した理由の一つとなっている。

84年の5月にみられた前年同期比92%の高騰はアルゼンチンの収穫遅延、インドの需要、ブラジルの輸出登録の中止等によるものであった。

表 122 大豆油(精製油)輸出実績 1984年

輸出先国	重量 1,000トン	金額 100万ドル
インド	49.2	35.4
アングラ	20.7	20.3
イラン	20.7	13.8
チリ	8.1	5.9
フランス	5.3	3.8
ニュージーランド	4.9	3.6
セネガル	3.7	2.4
オーストラリア	3.5	2.4
オランダ	2.0	1.5
ブルガリア	2.0	1.3
パキスタン	1.2	1.1
その他	3.9	2.7
計	125.2	94.2

出所：CACEX

15.07.02.01

表 123 大豆油(粗油)輸出実績 1984年度

輸出先国	重量 1,000トン	金額 100万ドル
インド	348.0	244.7
イラン	167.4	113.7
チリ	61.8	42.8
ソ連	72.2	41.5
パキスタン	48.5	40.6
オランダ	24.5	20.2
ブルガリア	17.0	10.9
オーストラリア	13.5	8.7
モロッコ	10.0	7.0
英国	10.3	6.1
その他	29.8	21.0
計	803.0	557.2

出所：CACEX

15.07.01.01

ブラジルの大豆油輸出は粗油と精製油の形態で行なわれ、粗油で 803 千トン、精製油では 125 千トンの輸出で

表 124

大豆粕：世界の需給

1,000トン

国 別	1981 / 82	82 / 83	83 / 84	83 / 84前年比%
生産量				
米 国	22,348	24,234	20,679	(-) 14.7
ブラジル	9,946	10,598	9,699	(-) 8.5
E C	9,273	8,775	7,568	(-) 13.8
中 国	3,097	3,110	3,143	1.1
日 本	2,778	3,027	2,968	(-) 2.0
アルゼンチン	1,063	1,699	2,280	34.2
そ の 他	10,191	10,634	10,848	2.0
計	58,696	62,077	57,185	(-) 7.9
消費量				
米 国	16,071	17,514	16,004	(-) 8.6
E C	16,507	15,505	14,820	(-) 4.4
東 独	4,073	4,268	4,603	7.8
日 本	2,932	3,207	3,116	(-) 2.8
中 国	2,956	2,683	2,793	4.1
そ の 他	16,770	18,191	17,066	(-) 6.2
計	59,309	61,368	58,402	(-) 4.8
輸 出				
ブラジル	8,156	8,241	8,035	(-) 2.5
米 国	6,266	6,449	4,896	(-) 24.1
E C	4,245	5,297	4,621	(-) 12.8
アルゼンチン	730	1,546	2,089	35.1
E C外西欧圏	421	719	1,075	49.5
中 国	141	427	350	(-) 18.0
そ の 他	428	304	318	4.6
計	20,387	22,982	21,384	(-) 7.0
輸 入				
E C	11,889	11,987	11,522	(-) 3.9
東 独	3,280	3,223	3,558	10.4
ソ 連	1,211	2,788	647	(-) 76.8
カナダ	384	419	453	8.1
そ の 他	4,280	4,595	5,315	15.7
計	21,044	23,012	21,495	(-) 6.6
世界在庫	3,124	3,863	2,757	(-) 28.6

出所：OIL WOLDO/NUMERO ESTADISTICA

表 125 大豆粕：シカゴ市場価格 USS / トン

月別	82 / 83	83 / 84	増減%
8	182.28	255.92	40.4
9	172.94	263.10	52.1
10	174.00	253.86	45.9
11	190.11	255.73	34.5
12	191.37	239.00	24.9
1	197.56	225.41	14.1
2	195.06	210.00	7.7
3	199.11	220.94	10.9
4	207.96	215.33	3.5
5	202.87	209.38	3.2
6	192.58	202.81	5.3
7	209.34	184.92	- 11.7

出所：OIL WOLDO

あった。このいずれの場合もインドへの輸出が大きく、イラン、チリー、ソ連、パキスタン等が主な市場となっている。

副産物の大豆粕の世界需給は次の状況にあった。

- a) 原料生産の減少に伴う大豆油搾油量の減少により大豆粕の生産もこれに平行して減少した。

世界の生産量は57.2百万トンで前年を(-)8%減少しており、米国の始めとする主要生産国に減産がみられた。

- b) 世界生産の減少に伴ない世界の消費量も減少し

ており、前年の61.4百万トンより58.4百万トンへと落ちた。

- c) 世界の貿易量は21.5百万トンで大豆(豆)の貿易量に類似しており、ブラジルは最大の輸出国として世界輸出の37.5%を占めている。世界の貿易量も又前年に比して減少した。

- d) 世界の在庫量は84年に前年比(-)3.7%減少した。世界消費量に対する在庫の割合は、前年の5.3%より4.7%へと落ちており供給事情の悪化を示している。

ブラジルの大豆粕輸出は、大豆及び副産物の中ではもっとも重要な項目であり、毎年800万トン前後の輸出により年によっては20億ドル以上の外貨を獲得している。

84年度は大豆、大豆油の価格上昇にもかかわらず大豆粕の価格は伸びず、前年を下廻ったため輸出量の減少と共に前年をはるかに下廻る輸出金額に終わった。

輸出先市場はフランス、オランダ、スペイン、イタリー、西独等EC圏のほか、社会主義圏への輸出も大量に行なわれている。

以上を総合した大豆及び副産物の84年度における輸出量は合計10,076千トンで前年を7.2%減少したが、大豆(豆)及び大豆油にみられた国際価格の上昇により輸出金額は前年とほぼ同等の2.565百万ドルを維持し、輸出

表 126 大豆(粕)輸出実績(1984年)

輸 出 先 国	重 量 1,000トン	金 額 100万ドル
フ ラ ン ス	1,674.7	338.5
オ ラ ン ダ	1,493.1	288.7
東 独	698.6	133.2
ブ ル ガ リ ア	655.1	109.6
ス ペ イ ン	543.7	102.0
ハ ン ガ リ ー	473.8	94.7
イ タ リ ー	379.3	68.9
西 独	315.4	59.9
ベ ル ギ ー	267.3	51.4
ポ ー ラ ン ド	248.0	49.8
チ エ コ ス ロ バ キ ア	201.4	38.2
日 本	91.9	18.2
イ ラ ン	94.0	17.2
イ ン ド ネ シ ア	55.8	11.1
ジ ョ ル ダ ン	53.6	10.3
南 ア フ リ カ 連 邦	50.3	9.8
タ イ	38.1	7.8
ア ル ジ エ リ ア	32.9	7.7
ソ 連	35.8	7.6
イ ラ ク	38.6	7.5
そ の 他	145.6	28.1
計	7,587.0	1,460.2

出所：CACEX

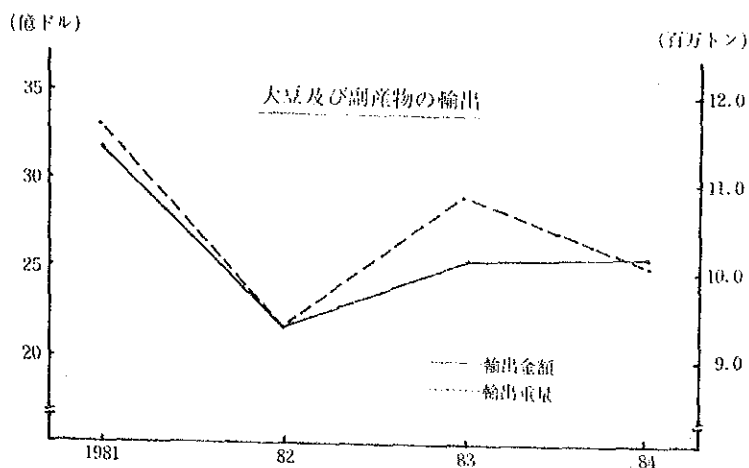


表 127 大豆及び副産物の輸出

	大豆 粕	大豆油(粗油)	大豆(豆)	大豆油(精製油)	計	前年比%
輸出金額 100万ドル						
1981	2,136.2	544.9	403.7	106.1	3,190.9	—
82	1,667.9	222.4	126.5	156.7	2,173.5	(-) 31.9
83	1,793.2	155.0	308.6	305.9	2,562.7	17.9
84	1,460.2	557.2	454.1	94.2	2,565.7	0.1
輸出重量 1,000トン						
1981	8,884.7	1,107.6	1,449.7	173.6	11,615.6	—
82	7,954.4	500.3	513.3	340.0	9,308.0	(-) 19.9
83	8,492.8	354.4	1,295.1	716.5	10,858.8	16.7
84	7,587.0	803.0	1,561.1	125.2	10,076.3	(-) 7.2
平均価格 US\$ / トン						
1981	240.00	499.40	278.45	611.17	—	—
82	209.60	444.50	246.40	460.88	—	—
83	211.15	437.36	238.28	462.94	—	—
84	192.46	693.89	290.88	752.39	—	—

出所：CACEX

総額の 9.5% を占めた。

大豆及び副産物の輸出については次のような措置がとられた。

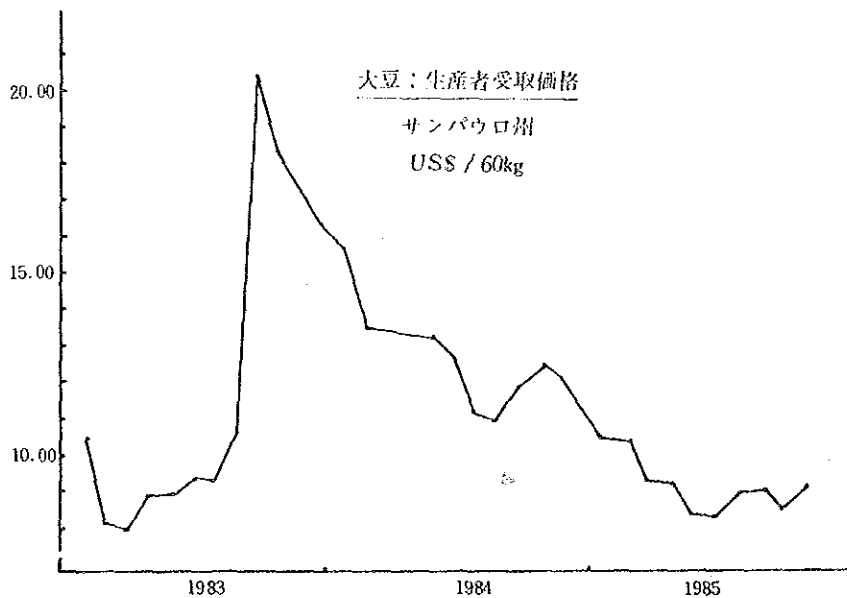
- 1) 83年第3四半期にみられた国際価格の上昇はこの期間中国内価格に反映したが、第4四半期より84年2月にかけての国際価格の下降傾向がブラジルの新期収穫物によって更に下落するのを防ぐため、2月10日付大豆及び副産物の輸出を一時的に中止した。
- 2) 輸出中止措置は3月12日まで継続されたが、この時期に入ると再び国際価格の回復がみられたため輸出が解禁された。ただし輸出限度は各輸出業者の前年3月より6月までの輸出量の40%に制限された。また船積の期限を大豆(豆)について5月30日、大豆粕4月30日及び大豆油6月30日と定めた。

- 3) 上記輸出生の限度及び船積期限は3月～4月間に変更され、3月27日付の決定では輸出生の限度を40%より60%へ、また、船積期限もそれぞれ6月30日（大豆及び大豆粕）7月31日（大豆油）と変更された。4月に入ると大豆粕については輸出生の限度が撤廃され、船積期限のみが続行されることとなり、5月には大豆（豆）についても同様の措置がとられた。大豆油のみは変更されず前年輸出生の60%、船積の最終期限は7月31日とした決定が継続された。
- 4) 83年の暮より84年の始めにかけて下降した大豆油の国際価格が再び上昇を始めたため、4月の始め政府は一時的に大豆（豆）及び大豆油の新时期輸出登録の受付を一時的に中止し、収穫、搾油加工の状況分析を行ない、5月14日に大豆油の輸出登録を再開した。この際、輸出生は各輸出業者の前年実績の80%までとし、船積期限を7月31日とした。大豆粕は重量上無制限とされたが船積期限は7月31日と定められた。
- 5) 政府は大豆油の輸出再開を許可すると同時に、金融操作税免除による大豆油（精製油）の輸入をも許可している（中銀決議第919号）。
- 6) 大豆（豆）の輸出は5月17日に再開され、前年度輸出生を限度とし、84年中にすでに輸出した量を差引いた分を新しい輸出割当量とした。また搾油工場の原料大豆輸出は禁止された。

以上の通り84年度の大豆輸出は国際相場の変動に応じてコントロールされ、輸出の中止、解禁が繰返えされてきたが、この貿易政策は下半期の米国収穫による相場の下落によって、年度前半の好機を逸した嫌いがあり、国内生産量の前年比増加にもかかわらず輸出生減少、輸出生額は前年並みといった結果を招いたものと思われる。

ハ) 国内市場及び価格

83/84農年における大豆及び加工品の国内消費量は、大豆粕が221万トンで前年を1.56%上廻るものであったが、80/81年に達した280万トンと比較すると大巾な減少であり、養豚、乳牛及び養鶏活動の減退を反映したも



のとされている。

83/84農年における大豆油の消費量は156万トンで、前年の153万トンを1.96%増加した。

大豆及び副産物は輸出を主体とする商品であるため、その国内価格は国際市場の動きに敏感に反応する。政府の統制下に置かれている大豆油の価格も国際価格の変動に応じて国内価格が調整されている。

84年の場合、国際価格の上昇に伴い政府は4月に大豆油の国内価格を16.7%調整して1箱(900ml入20缶)

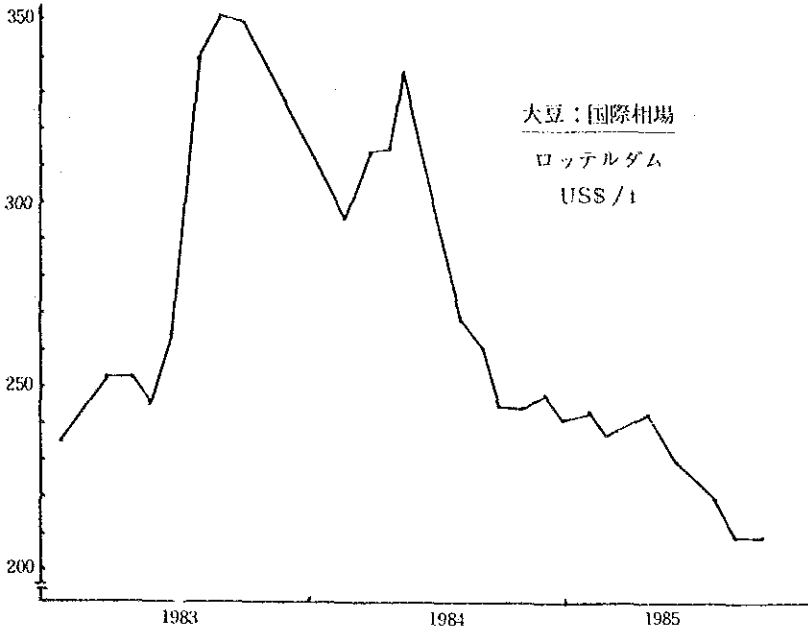
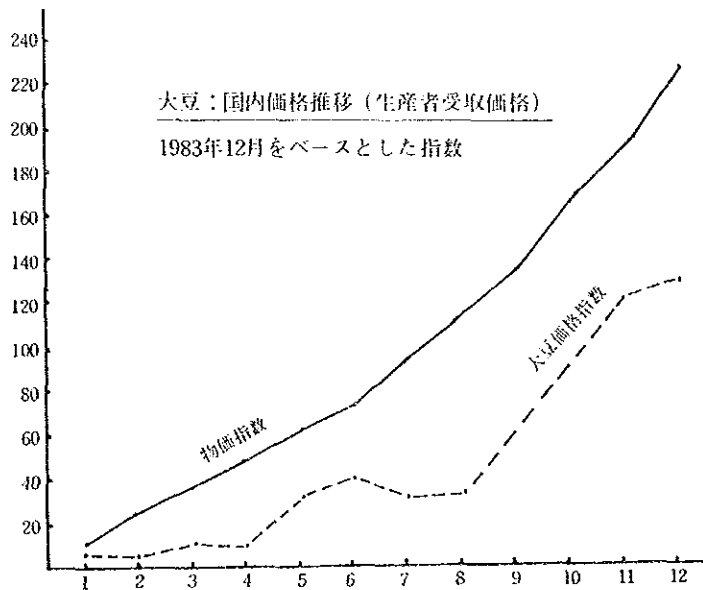


表 128 大豆：生産者受取価格 Cr\$/60kg

月別	1983年	1984年
1	2,929	17,051
2	3,083	16,695
3	3,400	17,918
4	4,095	19,517
5	4,444	21,041
6	5,108	22,314
7	5,646	21,000
8	7,272	21,310
9	15,094	25,891
10	15,384	30,739
11	15,616	35,604
12	16,033	36,727

出所：IEA

サンパウロ州



の価格をCr\$ 25,500としたのを始めとし、5月にはCr\$ 28,100、6月Cr\$ 33,500と変更している。

生産者受取価格は、1983年には下半期の価格上昇により年間を通じて447%とインフレ係数(211%)をはるかに上廻る値上りを示したが、84年に入ると値の動きは緩慢となり、とくに後半の値下りが影響して年間の上昇率は129%に止まり、インフレ率(224%)をはるかに下廻る価格に終止した。

ニ) 生産コスト

表 129 大豆：生産コスト 1ha当り30俵(60kg)収穫の場合 リベイロン・プレット (SP)

区 分		84 / 85年		85 / 86年	
A, 作業コスト	所要日数	単価 Cr\$	金額 Cr\$	単価 Cr\$	金額 Cr\$
1) 一般労働力	1.07	7.5	8.1	23.6	25.3
2) トラクター運転手	1.50	10.7	16.0	30.7	46.0
3) 4輪トラクター	1.40	65.3	91.0	191.8	268.5
4) 耕 起	0.49	3.6	1.8	12.4	6.1
5) 碎 土	0.33	7.6	2.5	37.2	12.3
6) 機 械 中 耕	0.09	2.2	0.2	5.2	0.5
7) 播 種 ・ 施 肥	0.13	9.0	1.2	48.6	6.3
8) 石 灰 散 布	0.09	5.7	0.5	24.8	2.2
9) 防 除	0.16	3.3	0.5	11.9	1.9
10) 運 搬	0.11	4.4	0.5	14.5	1.6
11) 収 穫	0.10	126.8	12.7	382.5	38.2
小 計	—	—	135.4	—	408.8
B, 資材コスト	数 量				
1) 種 子	70.57 kg	1.0 / kg	70.6	3.1 / kg	218.8
2) 石 灰	1.70 T	29.0 / T	49.3	100.0 / T	170.0
3) 配 合 肥 料	0.30 T	441.5 / T	132.4	1,479.9 / T	444.0
4) 殺 虫 剤	1.20 L	19.5 / L	23.3	70.1 / L	84.1
5) 除 草 剤	2.00 L	18.0 / L	36.0	54.2 / L	108.5
6) 殺 虫 剤	0.41 L	21.7 / L	8.9	56.4 / L	23.1
7) ヶ	0.41 L	18.7 / L	7.7	102.8 / L	42.2
8) ヶ	0.25 L	3.2 / L	0.8	9.1 / L	2.3
小 計	—	—	329.0	—	1,093.0
直接費計	—	—	464.3	—	1,501.8
C, 間接費					
1) 機 械 償 却 費			26.8		100.3
2) 銀行利息、生産費 固定投資			291.2		954.9
			9.4		—
合 計	—	—	791.6	—	2,557.0

出所：IEA

3.2.2 落花生

イ) 生産

このところ減少を続けている落花生の生産は、83/84農年も又面積・生産量共に前年を下廻り、落花生油が食用油としてブラジル人の食生活に取入れられた1958年以降最低の水準に落ちた。この間最盛期の70年代始めには100万トン近い生産が行なわれていたことと比較すると、現在の生産規模はその $\frac{1}{2}$ に縮小している。

国内の生産地帯はサンパウロ州に集中し84年には全国生産量の87%を占めた。州内ではリベイロン・プレット及びマリリア地方が雨期収穫地帯、マリリア及びプレシデンテ・ブルデンテ地方が乾期収穫地帯となっている。

サンパウロ州に次いでパラナ州及びリオ・グランデ・ド・スール州、パイア州でも生産が行なわれているが量は僅少である。

これらの生産地帯を通じて最近みられる生産減少の傾向は主に次の理由によっている。

- 1) 落花生はコーヒーの間作として普及していたが、コーヒー栽培の減少（とくにパラナ州）に伴ない落花生生産も減少した。
- 2) 大豆や砂糖キビの栽培拡大に伴ない落花生の最大の生産者である借地農による落花生の借地が減少した。
- 3) 70年代の中期より問題となっているAFLATOXINA毒素の問題が継続しており、食用の落花生や飼料用の粕の消費を制約した。
- 4) 改良種子の供給が少なく、かつ高価であること。
- 5) 収穫物の短時間乾燥の方法が開発されていないこと。
- 6) 営農融資のコストが高く小農業者を主体とする生産者の負担限度外にあること。

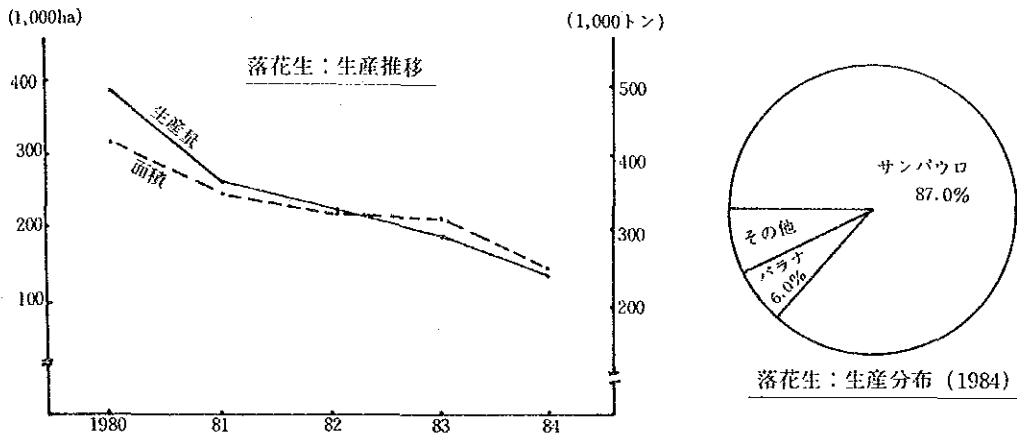


表 130 落花生：1984年生産実績

順位	州 別	面積 1,000 ha	生産量 1,000トン	単収 kg/ha
1	サンパウロ	123.7	215.2	1,739
2	パラナ	10.3	14.8	1,440
3	リオ・グランデ・ド・スール	6.2	6.3	1,019
4	パイア	2.2	3.0	1,341
5	その他	7.5	8.1	1,080
	合計	149.9	247.4	1,650

出所：IBGE

以上のほか販売融資の資金量が少なく最低保証価格制度による買上げや融資が十分に行なわれず、生産者が生産物を最低価格以下の市場価格で手放さざるを得ず、低い営農収益に終った前年の経験なども生産にブレーキをかけた理由の一つとなっている。

83/84農年には面積・生産量ともに減少したが、1ヘクタール当り単収だけは向上しており全国平均の1,653kg、サンパウロ州の1,744kgともに過去5ヶ年間の最高であった。

以上の通り落花生栽培の現状は決してかんばしいものではなく、衰退の一途をたどっているが、最近国際市場での需給関係がくずれて需要が高まっていることや、砂糖キビ畑の地力回復のため輪作作物としての重要性が再

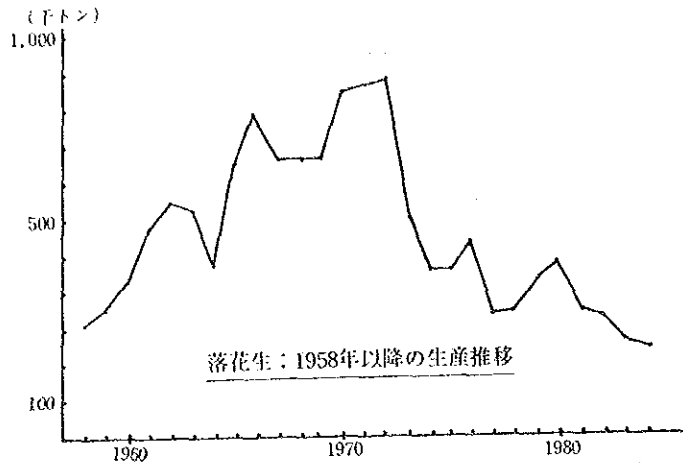


表 131 落花生：過去5ヶ年間の生産推移 1,000トン

州 別	1980	1981	1982	1983	1984
1 サンパウロ	337.0	269.5	249.2	232.8	215.4
2 パラナ	80.0	44.1	38.0	28.5	14.8
3 リオ・グランデ・ド・スール	7.4	7.1	6.5	6.5	6.3
4 バイア	3.4	3.0	3.5	2.7	3.0
5 その他	55.0	31.3	20.0	13.8	7.9
合計	482.8	355.0	317.2	284.3	247.4

面積 1,000ha	1980	1981	1982	1983	1984
	313.0	245.0	237.0	212.2	149.8

出所：IBGE

表 132 落花生：主要生産地の単収 kg/ha

州 別	1980	1981	1982	1983	1984
サンパウロ	1,598	1,454	1,355	1,365	1,744
パラナ	1,465	1,493	1,402	1,337	1,423
リオ・グランデ・ド・スール	1,112	997	986	1,001	1,016
バイア	1,500	1,449	1,435	1,368	1,340
全国平均	1,542	1,450	1,340	1,340	1,653

出所：IBGE

認識されてきたことなどから、改めてその栽培を奨励する動きが始まっている。

以下はサンパウロ州マリリア市で開催されたA B I O V E（全国植物油工業連盟）及びA B F A（落花生輸出入業者協会）の主催、C A C E X（ブラジル銀行貿易局）の後援による落花生の生産促進に関する会議に先立ち、C A C E X 食品部が提供した落花生の重要性についての資料の抜粋である。

《概況》

落花生油がブラジル人の食生活にとり入れられたのは1958年以降で、それまで用いられてきたラードに代って次第に普及を開始した。その風味のよさと粕に含まれる高度の蛋白質（48%）～最終コストに影響がない限り配合飼料原料の重要な条件となる～を持つ利点を生かして以後14年間にわたって綿実をしのぐ需要を継続させた。

この間、落花生の生産量は1958年の308千トンより1972年の950千トンへと年間平均14%の増加を続け、これを原料とする食油の国内消費と輸出、粕の配合飼料への利用が進み、国際市場ではHPSピーナッツ（Hand Picked Selected Peanut）の重要な輸出国の一つに数えられるにいたった。

このように順調にすべり出した落花生の生産も、70年代の始めより開始された大豆の機械栽培による生産増加と国際市場での高い需要の前に、落花生の競争力が失なわれ73年を境として生産は減少し始め、1958年頃の生産量に落ちて今日にいたっている。

生産の減少が始まって以来、大型農家が落花生栽培を放棄して他の有利作物に転向していく中で、落花生栽培は小農の手に委ねられるようになり、そのため栽培形態は旧態依然として進歩せず、この頃より発生し始めた毒性の細菌（A F L A T O X I N A）問題と共に他の油脂作物との競争力をいちじるしく落していった。

他方、70年代以降他の安価な食油（大豆油）に押されて国内消費も減少したため、その市場を海外に求めるようになり輸出は伸びていくが、この輸出市場への転換も大型栽培者を落花生栽培に止めさせることは出来ず、生産コストと生産物価格との関係が更に有利な他の作物へ転向し、落花生栽培は事実上大型農家より放棄される状態にいたった。

ブラジルにおけるこのような状態は、現在、世界の主要生産国であるインド、中国、米国及びアフリカの一部の国が生産量の大半を自国の国内消費にあてているため輸出余力が少なく、国際市場では供給不足の状態にあることを考えると、貴重な外貨獲得源が利用されず放置されていることも意味するものである。

すなわち世界最大の生産国（700万トン以上）インドは国際市場の40%を占める粕の輸出だけに限定され、400万トン以上を生産している中国は落花生油のみの輸出しか行っておらず、HPS（落花生豆）の輸出は随時行なわれる程度である。米国は150万トン以上を生産してHPSでは最も重要な輸出国として平均30%のシェアを占めるが、副産物の輸出能力は有していない。またアフリカ諸国では国内供給に追われて輸出余力は少なく、わずかにスダンとセネガルが油と粕の輸出を行っている程度である。

このような供給態勢の前に世界の需給関係はくずれ、84年には主要輸入圏のECブロックが年間の落花生需要50万トンに対し、商品不足のため29万トンの輸入に止まるという事態を生じ供給量の絶対量不足が明らかとされている。その不足分約20万トンは原料に換算して75万トンとなるが、この量はブラジルの現在の生産量の3倍にあたる量である。

以上の情勢下でブラジル政府は落花生の生産回復を図るべく一連の恩典措置を与えてきた。恩典措置の一つとして最低保証価格は84/85農年に対し455%（25kg当りCr\$ 4,085よりCr\$ 22,675）の調整を行ったが、これは同農年に対する調整率としては最高であり、また融資の基準となるVBC（生産費基準額）も又乾期収穫分に対して310%、雨期収穫に対しては400%の高率の調整を行った。

またブラジル銀行はC A C E Xを通じて1984年9月にサンパウロ州リベイロン・プレットにおいて「砂糖キビ

の改良全国プログラム」にもとづく砂糖・アルコール院の調査結果の発表を試みるセミナーを開催したが、この際、砂糖の輪作物として土地改良面よりみても、又遊休労働力の利用の面においても、更に収益面からみても落花生がもっとも適当な作物であることが発表されている。その際、輪作におけるテスト段階ではあるが落花生の単収が2.5トンに達し得ることが示されており、栽培周期115日間で生産コストの135%の純益が可能であることが説明されている。

このような落花生栽培奨励の気運の中で、製糖工場側も落花生種子の購入に対する融資や技術援助を通じて生産を援助しているため、州内の各砂糖キビ生産地帯とくにモジアーナ地方に現生産量の半に相当する75千トンの落花生生産が期待されている。

〈国際市場〉

a) 落花生(豆)

80/81~83/84年間の世界生産量は年間平均12百万トンで、その約7%に近い80万トンが世界市場の取引量である。また世界取引量の56%に相当する45万トンは直接食用に供されるHPSとなっている。

世界の輸入市場としては、ヨーロッパ(西欧及び東欧)及びアジアが大きく、それぞれ世界輸入の58%及び28%を吸収している。

一方、世界の落花生(豆)輸出は米国が約26%を占めており、中国20%、アルゼンチン8%がこれに続いている。ブラジルの世界貿易への参加比率は低く1%以下の状態にある。ブラジルの輸出は殆んどヨーロッパに向けられており、中でも対スペインの輸出が大半を占める。1970年以降の輸出実績をみると輸出重量では1975年に達した59.1千トン、金額では、1981年の32.4百万ドルを最高としている。

ブラジルの落花生にとって問題となっているのは毒性の細菌問題(これは70年代よりブラジルの落花生輸出を落した最大の問題点となっている)と高い生産コストで競争力に弱い点にある。風味と外見では外国市場の受けはよく、アルゼンチン産よりもトンあたり50~60ドル高く取引きされる場合もある。

表 133 落花生(豆) : 世界の生産量及び輸入量 1,000トン

年 度	生 産 量	輸 入 量	内 H P S
80/81	10,529	831	432
81/82	13,533	807	453
82/83	12,077	804	452
83/84	12,207	760	465

出所: OIL WORLD / CACEX

表 134 落花生(豆) 世界の輸入 1,000トン

輸 入 市 場	80/81	81/82	82/83	83/84
東 ヨ ー ロ ッ パ	358.6	458.3	374.4	396.0
西 ヨ ー ロ ッ パ	61.8	68.3	67.5	64.8
ア ジ ア	323.9	167.8	233.8	167.0
カ ナ ダ	66.0	60.2	64.8	62.0
そ の 他	20.6	52.0	63.1	70.5
世 界 計	830.9	806.6	803.6	760.3

出所: OIL WORLD

表 135 ブラジルの落花生(豆)輸出

年度	重量 1,000トン	金額 100万ドル	平均価格 ドル/トン
1970	53.4	12.2	229
71	35.6	8.8	247
72	55.9	13.6	244
73	54.2	19.4	359
74	52.9	28.1	532
75	59.1	32.2	544
76	25.2	13.1	522
77	30.9	19.8	640
78	17.3	11.6	669
79	24.4	15.7	644
80	32.3	21.4	661
81	30.3	32.4	1,068
82	17.3	11.2	648
83	12.4	8.3	673
84	12.8	9.4	739

出所: CACEX

表 136 落花生(殻つき)輸出 1984

輸出先国	重量 1,000トン	金額 100万ドル
スペイン	5.7	4.1
イタリア	2.3	1.8
フランス	1.6	1.2
オランダ	1.0	0.8
その他	1.3	0.9
合計	11.9	8.8

出所: CACEX

表 137 落花生(殻なし)輸出実績 1984

輸出先国	重量 1,000トン	金額 100万ドル
英国	0.4	0.4
イタリア	0.3	0.2
その他	0.2	0.1
合計	0.9	0.7

出所: CACEX

このように高い品質を持つブラジルの落花生栽培は、まず最大の問題とされているAFLATOXINA毒性の問題を解決し、砂糖キビとの輪作による砂糖キビ圃場のインフラの利用や、北米で行なわれているような機械化栽培の導入によってコストを落す場合、消費市場より距離的に遠い中国との競合に勝る条件を持つ可能性がある。

b) 落花生油

落花生油の世界生産量は年間平均 250 万トンで、落花生(豆)供給量の約半分が油の製造に向けられる。

表 138 落花生油: 世界の生産 1,000トン

国 別	80/81	81/82	82/83	83/84
インド	1,047	1,365	1,150	1,240
中国	480	546	547	531
セネガル	60	214	246	178
スダン	142	185	173	118
ビルマ	83	113	147	164
米 国	64	78	49	83
ブラジル	68	74	66	55
アルゼンチン	37	48	52	40
その他	354	374	345	331
計	2,335	2,997	2,775	2,720

出所: OIL WORLD

大豆油生産国の大半は生産された油を自国で消費しており、セネガル、アルゼンチン及びブラジルが例外的に殆んど全量を輸出に廻し、世界の市場を中国と二分している。

世界の輸入はヨーロッパに集中しており、中でもフランスは世界輸入の50～60%を占めている。フランスへの主要供給国はセネガルで、両国間協定によりセネガル産落花生油に対しては関税上の特典が与えられており、ま

表 139 落花生油：世界の輸出

輸 出 国	80/81	81/82	82/83	83/84
セネガル	20	154	180	130
中 国	56	55	47	64
ブラジル	46	77	57	45
アルゼンチン	35	35	46	40
そ の 他	181	129	195	111
計	338	450	525	390

出所：OIL WORLD

表 140 落花生油：世界の輸入

輸 入 国	80/81	81/82	82/83	83/84
フ ラ ン ス	161	197	221	172
香 港	128	26	3838	33
そ の 他	163	214	268	184
計	352	437	527	389

出所：OIL WORLD

表 141 落花生：粗油輸出実績 1984年

輸 出 先 国	重 量 1,000トン	金 額 100万ドル
オランダ	6.9	6.4
西 独	4.2	4.0
カナダ	1.7	1.5
そ の 他	1.0	0.9
計	13.8	12.8

出所：CACEX 15.07.02.03

表 142 落花生：精製油輸出実績 1984年

輸 出 先 国	重 量 1,000トン	金 額 100万ドル
香 港	10.1	10.2
オランダ	2.2	1.6
東 独	0.4	0.3
計	12.7	12.1

出所：CACEX 15.07.02.03

表 143 落花生油：ブラジルの輸出

年 度	重 量 1,000トン	金 額 100万ドル	平均単価 ドル/トン
1970	31.6	9.9	314
71	58.5	21.8	372
72	77.2	27.4	355
73	44.4	19.5	439
74	31.6	30.5	965
75	37.4	32.0	855
76	94.1	60.5	643
77	49.4	39.8	805
78	60.2	57.2	949
79	82.6	73.9	894
80	121.9	86.2	707
81	45.7	46.6	1,019
82	77.6	45.4	586
83	56.9	27.4	482
84	26.4	24.9	942

出所：CACEX

表 144

植物油の平均単価 CIF ロッテルダム

US\$/トン

年 度	落花生油	植物油の平均単価 CIF ロッテルダム				US\$/トン	
		大豆油	綿実油	ヒマワリ油	ココヤシ油	パーム・オイル	
1978/79	990	654	780	768	970	652	
79/80	782	613	683	632	746	597	
80/81	1,112	540	666	666	583	589	
81/82	667	463	582	558	500	479	
82/83	588	463	611	501	680	424	
83/84	1,036	722	855	765	1,123	746	

出所：USDA

た世界の4大輸出国に数えられる中国は輸出の大半を近距離の香港に向けている。

表 138 ~ 140 にみられる通りセネガルと中国が世界需要の半分を供給し、その輸出先市場がフランス及び香港であるため、ブラジルとアルゼンチンはその他の50%の市場を対象としている。しかし生産量が少ないため需要に応じ得る態勢にはない。1984年の場合、ブラジルは粗油においてオランダ及び西独、精製油は香港を主要市場とした。

南米大陸の中の供給国としてのブラジルとアルゼンチンを比較すると、ブラジルはより広い栽培適地を持つ他、落花生の油含有量においてもすぐれているためアルゼンチンに勝る条件を備えている。

したがって生産に対する決定的な政策が確定する場合、確実な外貨獲得源としての落花生部門が新たに出現することとなる。

その際、搾油工場については過去に12万トンの輸出実績を作った生産設備を有しており、そのために新たな投資は必要としない。

ブラジルの落花生油がもつ他の利点は油の含有量が41%と高い点にあり、これらの利点を利用し、平均価格が他の油脂作物よりも常に高い商品価値を利用した外貨の獲得を図る機会が残されているといえる。

c) 落花生粕

表 145

落花生粕：世界の生産と輸出

1,000トン

国 別	81/82		82/83		83/84	
	生産量	輸出量	生産量	輸出量	生産量	輸出量
インド	1,979	259	1,667	278	1,798	332
中国	793	8	792	16	696	17
セネガル	264	178	302	197	220	142
ビルマ	161	—	209	—	233	—
スダダン	293	80	276	125	186	60
米 国	105	15	67	17	87	14
アルゼンチン	73	38	80	34	62	40
ブラジル	100	42	89	37	75	30
その他	484	76	445	85	511	91
世界計	4,252	696	3,927	789	3,868	726

出所：OIL WORLD

落花生搾油粕の生産量は、落花生（豆）の生産量のほぼ32%に相当する。世界で生産される粕はセネガルとアルゼンチンを例外としてほとんど生産国の国内消費にあてられる。セネガルとアルゼンチンの場合は生産量の半分が輸出されている。インドの場合は生産量のわずか17%だけが輸出に廻されるが、生産量自体が大きいため世界最大の輸出国となっており、セネガル、スダン、ブラジル及びアルゼンチンが続いている。

表 146 落花生粕：世界の輸入 1,000トン

国 別	80/81	81/82	82/83	83/84
ポ ー ラ ン ド	139	149	160	200
西 独	158	197	139	93
そ の 他 西 欧	207	182	300	276
そ の 他 東 欧	24	109	83	75
そ の 他	248	115	72	81
世 界 計	723	711	754	725

出所：OIL WORLD

表 147 落花生粕：国際市場の平均単価 CIF ロッテルダム US\$/トン

年 度	大豆 粕	落花生 粕	ココヤシ 粕	綿 実 粕	菜 種 粕	ヒマワリ 粕
1978/79	238	207	206	183	181	180
79/80	242	224	215	202	199	186
80/81	272	260	200	226	205	212
81/82	225	195	186	187	186	177
82/83	224	176	181	172	169	156
83/84	221	197	172	181	164	154

出所：USDA

表 148 落花生粕：ブラジルの輸出推移

年 度	重 量 1,000トン	金 額 100万ドル	平均単価 US\$/トン
1970	201.1	15.7	78
71	200.5	16.6	83
72	168.4	14.4	85
73	79.5	14.3	180
74	71.8	9.8	136
75	34.8	3.8	110
76	87.9	10.7	122
77	47.5	9.1	12
78	52.7	8.1	155
79	86.1	14.5	170
80	101.4	16.5	163
81	46.4	9.0	195
82	41.4	6.1	148
83	36.5	3.7	101
84	13.3	1.6	122

出所：CACEX

落花生粕の世界輸入は西欧と東欧に集中し、世界輸入の平均85%を占めている。国別ではポーランドの輸入が大きく単独で世界輸入の22%に達することもあり、これに続く西独の輸入も20%に達している。

落花生粕は豊富な蛋白質を含有するためその需要は更に大きくなるべきであるが、その栽培、収穫、貯蔵形態に新しい技術を用いていない生産国（ブラジルも含む）の場合、毒性の細菌を含むため家畜に有害であり、その利用が限定されている。

ブラジルもこの問題を抱えながら最近では徐々に市場を獲得しており、世界市場の6%程度を占めるにいたっている。AFLATOXINA 毒性の問題が解決されればその市場は大巾に拡大され得るものであり、大豆粕に匹敵する国際価格を利用して、ここにも新しい外貨獲得源を持つ可能性が残されている。

ブラジルは過去に200千トンの輸出実績を持つが、その量は現在のセネガルに勝り、世界最大のインドに匹敵する量である。

ブラジルの落花生及び副産物の最近15ヶ年間における輸出実績を総合すると、1980年に達した124百万ドルを頂点とし、以後減少して1984年には36百万ドルに落ちている。この間1億ドルを越したのは1980年と1979年の2年のみであった。

現在落花生部門が抱えている大きな問題としては、AFLATOXINA 毒素の問題と大型農業資本の落花生離れの現象であり、これが生産の拡大と海外市場におけるブラジル商品の評価の問題を困難としてきた。その対策と今後の可能性についてCACEXは次の考え方を発表している。

- 1) AFLATOXINA 毒素の問題は現在の小規模栽培における栽培形態、不備な乾燥設備などがその発生源となっている。栽培規模を大型化し、播種—収穫—乾燥—貯蔵のインフラを改良することにより毒素の発生は解決され得るものであり、そのために必要とする大型の投資を行ない得ない現状の栽培形態が続く

表 149 落花生及び副産物の輸出実績

年 度	重 量 トン			金 額 US\$ / FOB
	落花生(豆)	粕	油	
1970	53,473	201,174	31,902	38,030
71	5,677	200,527	7,624	47,308
72	55,923	168,488	77,295	55,570
73	54,285	79,590	44,425	53,385
74	52,989	71,854	31,605	68,513
75	59,167	34,893	37,582	68,178
76	25,252	87,964	94,127	84,576
77	30,942	47,530	49,468	68,834
78	17,331	52,745	60,259	76,980
79	24,500	86,121	82,649	104,295
80	32,376	101,469	121,930	124,194
81	30,365	46,421	45,790	88,198
82	17,369	41,452	77,622	82,867
83	12,402	36,580	56,962	39,528
84	12,842	13,380	26,455	36,073

出所：CACEX

限り毒素の問題は解決し得ない。

- 2) 栽培の大型化を図る方法としては、砂糖キビ畑の地力回復を図る輪作形態として、落花生を導入する方法がもっとも現実的可能性のある方法である。砂糖キビ畑はまず面積が大きいためその輪作も又大規模に行なわれることになり、第2に砂糖キビ生産者は個人的にも組織的にも経済力が大きく、大型落花生栽培への投資を可能とする。

砂糖キビの輪作が実現する場合次の事項を期待することが出来る。

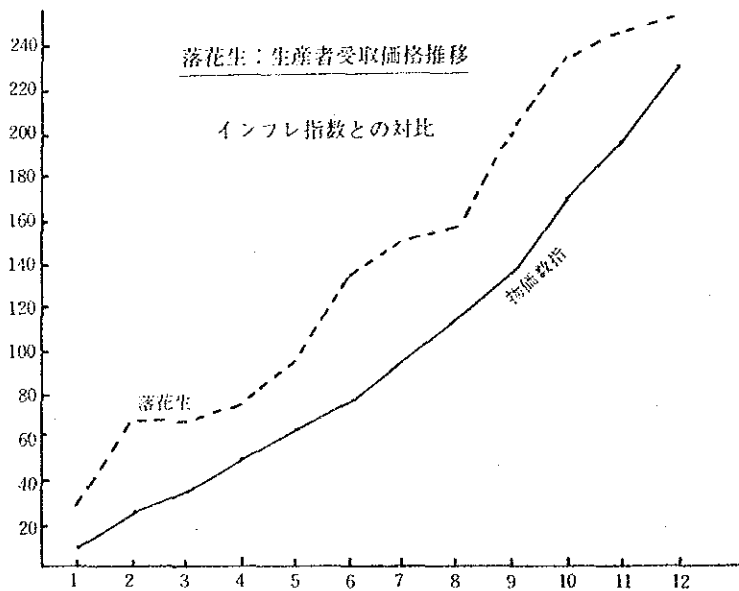
- 3) 落花生の榨油工業部門は70年代の始めにすでに100万トンの原料処理を行った実績があり、現在はその4

表 150 落花生：生産者受取価格 Cr\$ / 25kg

月別	1983年	1984年
1	1,369	9,073
2	1,432	11,620
3	1,655	11,582
4	1,878	12,147
5	2,111	13,750
6	2,636	16,170
7	3,055	17,070
8	3,857	17,766
9	6,222	20,894
10	7,145	23,013
11	6,978	23,895
12	7,001	24,425

出所：IEA

サンパウロ州の場合



分の1の作業しか行なわれておらず、多くの遊休施設をかかえているが、原料栽培の増加によりその遊休率を減少することが出来る。操業を中止している多くの施設が存在する。

4) 収穫物の選別のため多くの労働力を吸収する。殻つき及び殻なしの製品を調整するためには167kgの原料に対し1日1人の労働力を必要としている。このことは現在の12千トンの輸出規模で1日360人の女工を稼働させることになる。

5) 年間生産量が100万トンに達する場合、輸出による外貨収入は次の計算によって3億ドル近くに達することが出来る。

原料豆

殻つき落花生	生産量	1,000,000トン
	(-) 種子用保留(10%)	100,000 ♪
	(-) 国内推定消費量	100,000 ♪
		<hr/> 800,000 ♪
	(-) H.P.Sの輸出	100,000 ♪
	加工用原料	700,000 ♪

副産物

殻なし落花生		
	(-) 殻除却 700,000トン×36%	250,000トン
		<hr/> 450,000 ♪
	(-) H.P.Sの輸出	20,000
	榨油原料	430,000 ♪
落花生油	(-) 歩留り41%(輸出向)	176,000 ♪
♪ 粕	(-) ♪ 56%(♪)	241,000 ♪
	保留	13,000

輸出収入

1) HPS	120,000トン×US\$900	US\$ 108,000,000
2) 油	176,000 ♪ × 810	♪ 142,850,000
3) 粕	241,000 ♪ × 180	♪ 43,380,000
	計	<hr/> US\$ 299,210,000

ロ) 国内市場

国内生産量の減少から国内価格は高目に維持され、年間を通じてインフレ率を上廻る実質的な上昇を示した。81年度の農作物の中では安定した価格推移をみた数少ない作物の一つである。

ハ) 生産コスト

サンパウロ州農務局農業経済研究所が発表した落花生の生産コスト予想は次表の通りである。

項 目		84 / 85		85 / 86	
A- 作業コスト	所要日数	単 価	金 額	単 価	金 額
1) 一般労働力	20.68	7.5	155.7	23.6	488.0
2) トラクター運転手	2.53	10.7	27.1	30.7	77.5
3) 4輪トラクター	2.33	65.3	165.2	191.8	485.1
4) 耕 起	0.32	3.6	1.1	12.4	4.0
5) 石 灰 撒 布	0.14	5.7	0.8	24.8	3.5
6) 砕 土	0.32	7.6	2.4	37.2	11.9
7) 播 種 施 肥	0.21	6.5	1.4	23.2	4.9
8) 機 械 耕 運	0.39	2.2	0.9	15.2	2.0
9) 防 除	0.39	4.9	1.9	19.6	7.6
10) 運 搬	0.16	4.4	0.7	14.5	2.3
11) ロータリーカッター	0.15	3.7	0.6	15.2	2.3
12) 畦 立 機	0.24	2.1	0.5	4.3	1.0
13) 収 穫 機	0.21	19.0	4.0	83.1	17.5
14) 収 穫 物 輸 送			61.0		143.6
小 計			423.3		1,251.3
B- 資材コスト	所要量				
1) 種 子	115.0 kg	3.7/kg	431.3	6.2/kg	708.4
2) 石 灰	0.8 t	29.0/t	23.2	100.0/t	80.0
3) 肥 料	0.26 t	482.5/t	125.4	1,942.2/t	505.0
4) 殺 虫 剤	2.0 ℓ	9.2/ℓ	18.3	33.2/ℓ	66.4
5) 〃 Fosforado	0.8 ℓ	19.3/ℓ	15.6	70.1/ℓ	56.1
6) 〃	0.8 ℓ	21.7/ℓ	17.4	102.8/ℓ	82.3
7) 殺 菌 剤	2.5 kg	11.1/kg	27.7	47.8/kg	119.6
8) 殺 蟻 剤	0.93 kg	2.2/kg	2.1	10.0/kg	9.3
9) 展 着 剤	0.3 ℓ	3.2/ℓ	1.0	9.1/ℓ	2.7
10) 除 草 剤	2.0 ℓ	18.0/ℓ	36.0	54.2/ℓ	108.5
11) 袋	90.0 個	0.8/ヶ	74.3	3.2/ヶ	288.0
小 計			772.1		2,026.2
直接費計			1,195.4		3,277.6
C- 間接コスト					
1) 機 械 償 却 費			41.3		147.8
2) 銀行利息、生産費			749.6 (13.5)		2,084.0
合 計			1,999.8		5,509.4

出所：IEA

3.2.3 ヒマ

イ) 生産

表 152

ヒマ：1984年生産実績

順位	州別	面積 1,000ha	生産量 1,000トン	単収 kg/ha
1	バイア	293.4	120.3	410
2	パラナ	27.2	39.5	1,453
3	サンパウロ	30.2	26.2	869
4	ベルナンブコ	26.8	14.0	520
5	その他	35.2	25.0	710
	合計	412.8	225.0	545

出所：IBGE

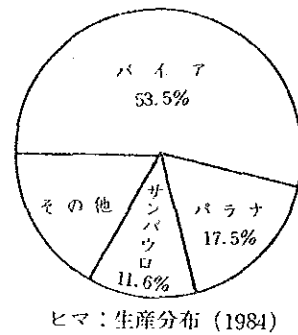
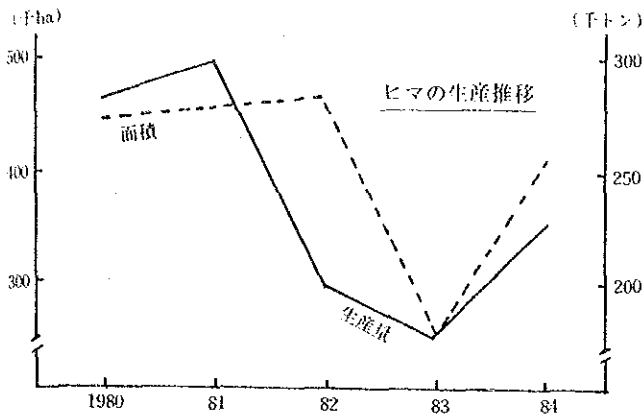


表 153

ヒマ：過去5ヶ年間の生産推移

1,000トン

州別	1980年	1981年	1982年	1983年	1984年
1, バイア	129.6	203.0	90.0	96.0	120.3
2, パラナ	82.6	42.0	43.3	37.1	39.5
3, サンパウロ	32.6	18.0	27.0	22.0	26.2
4, その他	36.2	29.0	32.1	16.5	39.0
合計	281.0	292.0	192.4	171.6	225.0
面積 1,000ha	440.5	447.4	463.0	271.3	412.8

出所：IBGE

表 154

ヒマ：主要生産地の単収

kg/ha

州別	1980年	1981年	1982年	1983年	1984年
バイア	450	609	264	515	410
パラナ	1,695	1,460	1,515	1,400	1,453
サンパウロ	1,200	672	1,161	1,000	869
全国平均	637	652	416	632	545

出所：IBGE

前年東北地方の乾燥と南部・南東地方の降雨多量によって多大の被害を受けたヒマの83/84農年における生産は、再び国内最大の生産地バイア州にあける病菌の発生により当初の予想30万トンを下廻る225千トンに終わったものの、前年の171千トンに落ちた生産規模をやや回復した。

国内生産は依然としてバイア州に集中しており、同州が全国生産の半分以上を占めている。州内ではイレセ (IRFCE) 地方の生産が大きく、とうもろこし、フェイジョン、綿、ソルガムなどと合作されている。

ロ) 国際市場とブラジルの輸出

OIL WORLDの資料によると83/84農年におけるヒマの世界生産量は890千トンで、前年を90千トン上廻ったが78/79農年に達した905千トンには及んでいない。従来、世界最大の生産国であったブラジルはこのところ天候不順による生産減少からインドの270千トンに次ぐ2位の生産国となっている。その他中国、ソ連及びタイの生産が大きい。

ヒマ油の世界消費量は、82/83農年の321.1千トンより83/84農年には345.9千トンに増加した。

ブラジルの国内消費量は殆んど変化していないが、インドの消費が前年の49.8千トンより65.4千トンに増加したのが世界消費の増加に影響している。

世界の搾油量は832.2千トンで前年の773.6千トンを上廻った。

ブラジルの輸出は62.6千トンで前年の42.5千トンより47%上廻り65.9百万ドルの外貨を得ている(前年は38百万ドル)。平均輸出単価は前年のトンあたり917ドルに対し84年度は1,053ドルであった。この輸出規模も従来約1億ドルの規模からみては低く、国内生産の減少を反映している。

ハ) 国内市場及び価格

前年は国内生産の減少から生産者受取価格は年間510%の上昇を示し、年度後半に高値が支配したが、84年度に入ると生産の回復による工場原料の増加により価格は伸びず、年間122%の低い増加率に止まった。年間5~6月にインフレ係数を上廻る値の動きをみせたときもあったが、以後インフレ率を下廻る価格推移で年間を終っている。

消費市場ではプレーキ油の需要が増加しており、その消費は増加傾向にある。

国内の搾油工場はサンパウロに多く集っており、同州が国内搾油能力の48%を占める。その搾油能力は年間250日稼働で640千トンといわれている。主要搾油工場としてはSANBRA(サンパウロ市及びプレシアンテ・ブルデンテ市)、BRASWEY(サンパウロ市)、OLIVE(ベドウドロ市)、LOTUS(サンパウロ市)、EMPRESOL(パリリ)等があるが、いずれも原料不足のため施設の遊休化を余儀なくしている状況にある。

表 155 ヒマの輸出実績 1984年

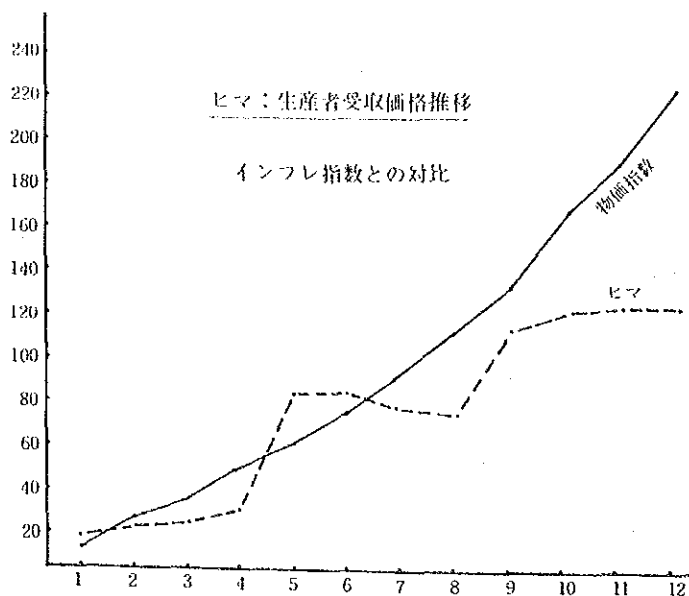
輸 出 先 国	重 量 1,000トン	金 額 100万ドル
米 国	27.7	29.3
オ ラ ン ダ	12.5	12.7
フ ラ ン ス	9.1	9.0
英 国	2.5	2.6
チェコスロバキア	2.1	2.5
ソ 連	1.5	2.3
ブルガリー	1.4	1.4
南アフリカ連邦	1.2	1.2
そ の 他	4.6	4.9
計	62.2	65.9

出所: CACEX

ヒマ：
表 156 生産者受取価格 Cr\$/kg

月別	1983年	1984年
1	64	461
2	74	478
3	82	481
4	89	510
5	128	717
6	164	716
7	196	698
8	258	683
9	450	834
10	454	866
11	347	869
12	391	870

出所：IEA サンパウロ州



3.2.4 ココヤシ

表 157 ココヤシ：1984年生産実績

順位	州 別	面積 1,000ha	生産量 1,000トン	単収 kg/ha
1	バ イ ア	34.3	123.9	3,613
2	セ ア ラ	19.2	103.7	5,400
3	リオ・グランデ・ド・ノルテ	18.3	67.1	3,668
4	セル ジ ッ ベ	40.7	66.3	1,630
5	アラゴ ア ス	16.6	56.8	3,420
6	その他の	29.0	103.2	3,559
合 計		158.1	521.0	3,295

出所：IBGE

表 158 ココヤシ：過去5ヶ年間の生産推移 1,000トン

州 別	1980年	1981年	1982年	1983年	1984年
1, バ イ ア	107.5	107.6	129.4	124.3	123.9
2, セ ア ラ	117.5	88.0	103.1	61.9	103.7
3, リオ・グランデ・ド・ノルテ	54.9	55.7	56.7	40.7	67.1
4, セ ル ジ ッ ベ	71.3	73.8	75.4	75.0	66.3
5, その他の	174.7	179.0	177.3	178.9	160.0
合 計	525.9	504.1	541.9	480.8	521.0
面積 1,000ha	164.8	167.2	165.9	168.7	158.1

出所：IBGE

表 159

ココヤシ：主要生産地の単収

kg/ha

州 別	1980年	1981年	1982年	1983年	1984年
パ イ ア	3,100	3,100	3,708	3,655	3,613
セ ア ラ	5,465	4,000	5,000	3,000	5,400
リオ・グランデ・ド・ノルテ	3,763	3,527	3,572	2,278	3,668
全 国 平 均	3,191	3,014	3,267	2,850	3,295

出所：IBGE

3.3 工業原料作物

3.3.1 砂糖キビ

イ) 生 産

国家アルコール計画に支えられた砂糖キビの生産は、上下の変動がはげしいブラジルの農産物の中でもっとも安定した作物の1つで栽培面積、生産量とも増加を続けている。

83/84農年も又面積の拡大と単収の増加による生産増が続いており、面積は366万ヘクタール、生産量は222百万トンに達した。生産の増加はサンパウロ州やアラゴアス州など伝統的な生産州に止まらず、従来砂糖キビの生産がそれ程盛んでなかったマツト・グロソ・ド・スール州（過去5ヶ年間に344%増加）、ゴヤス州（同じく307%）、パラナ（89%）等において急速な生産拡大がみられている。このような傾向はサンパウロ州への偏重を防ぎ地域格差の縮小を図ろうとしている国家アルコール計画の目標にもとづくものである。しかしサンパウロ州の生産比率は依然として大きく、面積において全国収穫面積の43%、生産量の52.6%がここに集中している。

表 160

砂糖キビ：1984年生産実績

順位	州 別	面 積 1,000ha	生産量 1,000トン	単 収 kg/ha
1	サ ン パ ウ ロ	1,579.8	117,210.2	74,192
2	ア ラ ゴ ア ス	457.5	21,300.5	46,558
3	ベ ル ナ ン ブ コ	398.2	19,871.2	49,000
4	ミ ナ ス ・ ジェ ラ イ ス	261.1	14,539.6	55,684
5	リ オ ・ デ ・ ジ ャ ネ イ ロ	215.1	9,560.8	44,439
6	パ ラ イ ー バ	155.7	8,951.8	57,491
7	パ ラ ナ	121.7	8,428.8	69,261
8	ゴ ヤ ス	72.7	4,960.0	68,235
9	マツト・グロソ・ド・スール	49.7	2,692.9	54,132
10	リオ・グランデ・ド・ノルテ	51.8	2,545.7	49,162
11	エスピリト・サント	38.3	2,433.5	63,536
12	パ イ ア	79.6	2,389.3	30,000
13	セ ア ラ	46.1	1,976.1	42,844
14	マツト・グロソ	22.5	1,275.7	56,645
15	そ の 他	110.8	4,580.1	41,336
	合 計	3,660.6	222,716.2	68,235

出所：IBGE

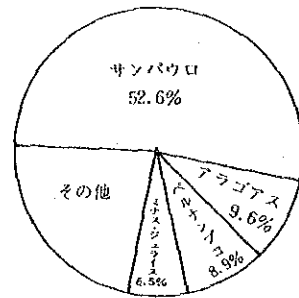
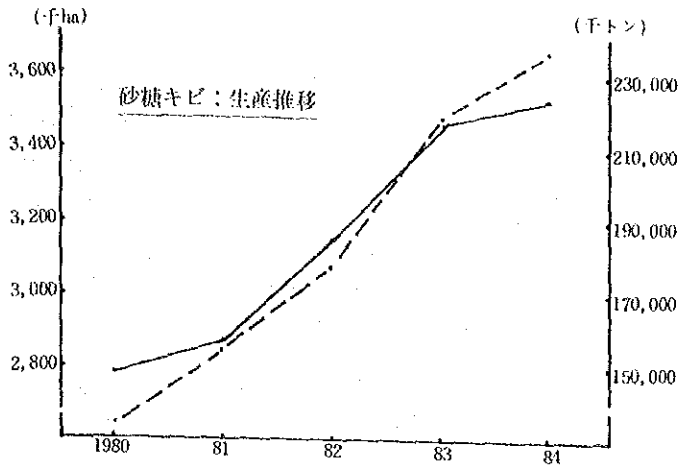


表 161

砂糖キビ：過去5ヶ年の生産推移

1,000トン

州 別	1980	1981	1982	1983	1984
1 サンパウロ	73,041.4	73,578.1	92,228.4	115,000.0	117,210.2
2 アラゴアス	17,103.9	20,670.4	21,535.6	22,065.2	21,300.5
3 ペルナンブコ	16,568.9	16,999.9	17,578.5	19,628.0	19,871.2
4 ミナス・ジェライス	8,175.8	8,952.8	10,879.0	13,600.5	14,539.6
5 リオ・デ・ジャネイロ	9,526.7	9,466.7	10,784.9	10,010.9	9,560.8
6 パライーバ	5,213.0	5,230.8	7,272.9	7,168.9	8,951.8
7 パラナ	4,451.5	4,888.0	6,840.0	9,680.0	8,428.8
8 ゴヤス	1,218.3	1,335.6	1,791.4	3,498.0	4,960.0
9 マット・グロン・ド・スール	606.7	912.7	1,507.1	2,512.2	2,692.9
10 その他	12,744.4	13,889.1	15,974.6	13,539.7	15,200.4
合 計	148,650.6	155,924.1	186,392.4	216,703.4	222,716.2

面積 1,000ha	2,607.6	2,825.9	3,085.7	3,447.4	3,660.6
------------	---------	---------	---------	---------	---------

出所：IBGE

表 162

砂糖キビ：主要生産地の単収

kg/ha

州 別	1980	1981	1982	1983	1984
サンパウロ	72,448	65,645	72,000	76,000	74,192
アラゴアス	49,000	55,699	56,000	51,530	46,558
ペルナンブコ	48,053	48,069	49,218	49,375	49,000
ミナス・ジェライス	43,644	46,417	50,119	56,158	55,664
リオ・デ・ジャネイロ	48,216	49,955	54,639	48,927	44,439
パライーバ	48,549	43,289	53,924	49,797	57,491
パラナ	76,762	70,712	76,000	88,000	69,261
全 国 平 均	57,006	55,177	59,947	60,405	68,235

出所：IBGE

砂糖キビを原料とする砂糖及びアルコールの生産は、砂糖の生産目標 900万トンに対し 908万トン、アルコールの場合は76億リットルの目標に対し、78億リットルの生産実績でそれぞれ目標を達成している。このように国家アルコール計画による砂糖及びアルコールの生産は順調にすすんでいるものの、最近砂糖の国際相場が極度に悪く、現状の生産を継続する場合、極度の安値で販売せざるを得ない情勢下にあるため、砂糖、アルコール生産計画が見直されており、とりあえず84/85農年に対しては砂糖の生産を前年のレベルより50万トン落した 850万トンに止め、その分アルコールの生産を当初の目標 7,615百万ℓ より 9,064百万ℓ に引上げるよう変更された。

砂糖及びアルコールの生産に大きな割合を占めているサンパウロ州の場合、輸出用砂糖の最大の生産州であるため、84/85年計画では砂糖の生産計画がもっとも大きく、削減された州で前農年を15.4%下廻る 668万トンの生産目標に変更されており、アルコールの生産を前年比 3.5%増加することになった。

砂糖の生産、輸出については国家アルコール計画の枠内で大巾な補助が行われてきたが、84年度には、従来一率に行われていた砂糖キビ買上げ価格の調整を地域別に異なる調整率とし、徐々に補助撤廃の方向に向けて動き出している。この調整では従来の常識を破って北部・東北部に低く、サンパウロ州に高い調整率が設定された。サンパウロ州の場合、トン当り砂糖キビの価格は前年5月の Cr\$ 5,178より Cr\$ 16,655へと222%の調整となったが、この間生産コストの上昇は 182%であったので、砂糖キビの生産収益を保証する妥当な調整であったとされている。このような採算線上での買上げ価格の決定によりサンパウロ州の砂糖キビ生産は順調に推移するものとみられている。逆に東北地方ではベルナンブコ州で25万人の収穫労働者がストに入り、待遇改善を要求する動きがみられた。

表 163

砂糖及びアルコールの生産実績

地方及び州別	砂 糖				アルコール			
	1983		1984		1983		1984	
	1,000トン	%	1,000トン	%	1,000ℓ	%	1,000ℓ	%
北部及び東北地方	3,245	36.6	3,574	39.3	1,187,128	20.4	1,129,638	14.4
中央南部地方								
サンパウロ	4,300	48.5	4,342	47.8	3,814,652	65.5	5,391,061	68.6
ミナス・ジェライス	487	5.5	491	5.4	293,785	5.1	491,570	6.2
リオ・デ・ジャネイロ	555	6.3	437	4.8	165,688	2.9	270,122	3.4
パラナ	155	1.8	151	1.7	190,029	3.3	203,483	2.6
エスピリト・サント	48	0.5	29	0.3	47,224	0.8	154,098	2.0
マット・グロソ	27	0.3	25	0.3	46,833	0.8	111,462	1.4
サンタ・カタリーナ	26	0.3	21	0.2	54,335	0.9	75,855	1.0
リオ・グランデ・ド・スール	7	0.1	8	0.1	12,792	0.2	22,981	0.3
ゴヤス	8	0.1	8	0.1	7,867	0.1	11,167	0.1
マット・グロソ・ド・スール	—	—	—	—	1,645	0.0	2,774	0.0
小計	5,613	63.4	5,512	60.7	4,634,850	79.6	6,734,573	85.6
全国計	8,858	100.0	9,086	100.0	5,821,978	100.0	7,864,211	100.0

出所：Instituto do Açúcar e do Alcool (I. A. A.)

ロ) 国際市場とブラジルの輸出

砂糖の国際市場は世界生産の増加と消費の減少、世界在庫の増加により供給過剰気味となり国際相場は81年の下半期以降低迷を続けている。世界生産の増加は主にEC諸国における砂糖大根を原料とする生産が国の援助によって大巾に拡大されたことを大きな理由とし、また消費の減少は米国、日本等の主要市場においてみられており、国際価格の回復を阻む他の問題としては国際砂糖協の足並みが揃っていないことが加えられる。

表 164 砂糖：世界の需給と在庫 100万トン

年 度	期首在庫	生産量	輸入量	供給計	消費量	輸出量	需要計	期末在庫
1981	23.61	88.78	27.14	139.53	89.69	27.14	116.83	22.70
1982	22.70	100.72	28.87	152.29	90.65	28.87	119.52	32.77
1983	32.77	101.15	28.36	162.28	93.81	28.36	122.17	40.11
1984	40.11	94.74	27.97	162.82	95.70	27.97	123.67	39.15
1985予想	40.27	97.55	26.28	164.08	96.14	26.26	122.40	41.68

出所：USDA

表 165 砂糖：原料別生産生産量

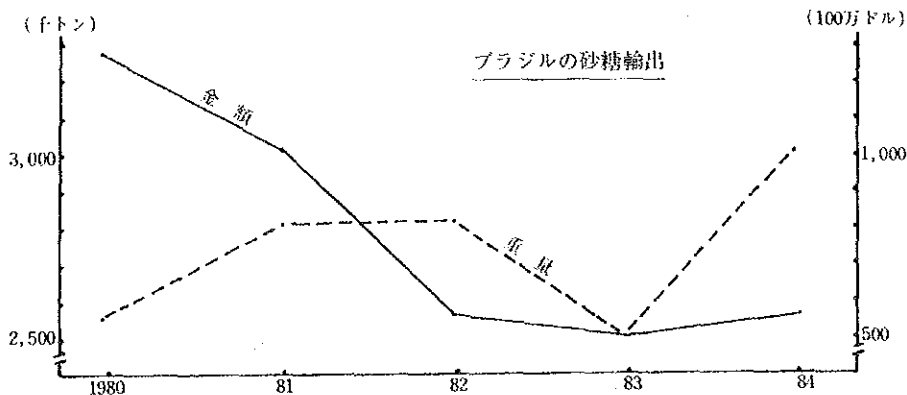
原 料 別	80 / 81	81 / 82	82 / 83	82 / 84	84 / 85
砂糖 キビ	55.8	63.7	63.8	60.2	61.5
砂糖 大根	33.0	37.0	37.4	35.4	36.1
計	88.0	100.7	101.1	95.6	97.6

出所：

表 166 砂糖：ブラジルの輸出実績

年 度	重 量 1,000トン				金 額 100万ドル			
	粗 糖	製精糖	結晶糖	計	粗 糖	製精糖	結晶糖	計
1980	1,392	612	569	2,579	624	346	317	1,287
81	1,564	916	222	2,702	579	396	87	1,062
82	1,222	1,090	398	2,710	259	244	77	580
83	1,575	783	146	2,504	333	168	26	527
84	1,545	1,212	303	3,060	326	213	48	587

出所：CACEX



83/84農年における世界の生産量は95.6百万トンと推定されている。この中60.2百万トンが砂糖キビを原料とするもの、又35.4百万トンが砂糖大根を原料とするものである。83/84年にはこの両者とも前年比(-) 5.6%の減少をみている。砂糖キビ生産国としてはブラジルの他キューバ、オーストラリアが大きく、また、砂糖大根の場合はEC圏が最大の生産地帯である。これに対する世界の消費量は93~94百万トンと推定されているが、人口の増加率に応じておらずこのため世界の在庫は増加し、1983年、1984年も世界消費量の43%及び41%という高いレベルであった。

1984年における世界の貿易は前年比(-) 1.6%の減少をみて約28百万トンに止まっており、85年は更に減少して26百万トンに落ちる見込みである。このような世界貿易の減少は米国の買付け減少を大きな理由としており、米国の輸入減少は砂糖の国産がすすんでいることのほか、主要清涼飲料水メーカーが低カロリーの代替甘味剤を使用することを決定し、砂糖の消費が減少したのを大きな原因としている。

以上の需給関係により砂糖の国際価格は81年下半期以降下降を続けており、82年、83年と続けてトンあたり 200ドル以下のレベルにあり、84年5月には 123ドル、85年始めには 100ドル以下に下落している。

国際価格の調整機関としては生産国と輸入国によって構成されている国際砂糖協定があるが、大型の生産国かつ輸出国としてのECが歩調を合せていないため、コーヒーの場合にみられるような機能を果しておらず、他の輸出国も価格を維持するための割当量減少に応じない状況のため供給過剰の状態は依然として継続中である。

このような国際市場の情勢下でブラジルの砂糖輸出もかんばんしくなく、量において増加しながら輸入金額は大幅に減少する事態を招いている。国家アルコール計画における砂糖生産目標の縮少は、このような国際環境にもとづくものである。

84年度の輸出も粗糖、精製糖及び結晶糖の形で行なわれ、重量合計 300万トンが輸出された。砂糖協定による

表 167 砂糖：粗糖輸出実績(1984年)

輸 出 先 国	重量 1,000トン	金額 100万ドル
ソ 連	715.6	113.8
米 国	279.8	104.0
ベネズエラ	94.5	41.7
モロッコ	148.9	21.8
アルジェリア	140.0	17.7
スウェーデン	41.9	6.9
そ の 他	124.2	20.2
計	1,544.9	326.1

出所：CACEX 17.01.01.02

表 168 砂糖：精製糖輸出実績(1984年)

輸 出 先 国	重量 1,000トン	金額 100万ドル
アルジェリア	251.4	41.8
イ ン ド	166.5	28.2
イ ラ ン	124.6	22.8
イ ラ ク	124.8	20.1
エジプト	91.0	15.1
シ リ ア	66.7	13.2
チ リ ー	55.3	11.4
チュニジア	56.0	9.9
サウジアラビア	50.8	8.8
そ の 他	221.5	41.2
計	1,211.6	212.5

出所：CACEX 17.01.02.00

表 169 砂糖：結晶糖輸出実績(1984年)

輸 出 先 国	重量 1,000トン	金額 100万ドル
エジプト	195.8	26.1
米 国	19.6	8.2
イ ン ド	51.4	7.2
アルジェリア	11.0	2.2
スリランカ	14.0	2.0
イ ラ ク	10.8	1.9
そ の 他	0.2	0.1
計	302.8	47.7

出所：CACEX 17.01.01.00

表 170 砂糖キビ：生産コスト 2年度 1haあたり62トン収穫の場合 カンピーナス（SP）

区 分		84 / 85		85 / 86	
A-作業コスト	所要日数	単価 Cr\$	金額 Cr\$	単価 Cr\$	金額 Cr\$
1) 一般労働力	17.08	7.0	120.2	22.8	388.6
2) トラクター運転手	3.89	10.7	41.5	30.7	119.2
3) 4輪トラクター	2.88	65.3	188.0	191.8	552.2
4) 家畜	0.37	5.0	1.8	18.6	6.9
5) レー	1.13	2.2	2.5	5.2	5.9
6) 砕土	0.38	7.7	2.9	33.5	12.7
7) 機械中耕	0.18	7.6	1.4	37.2	6.7
8) サブソイラー	0.19	3.3	0.6	11.9	2.3
9) 砕土搬	0.24	4.4	1.1	14.5	3.5
10) 運搬	0.39	9.7	3.8	29.5	11.5
11) トラック	1.10	69.8	76.8	196.0	215.6
小計	—	—	440.7	—	1,325.1
B-資材コスト	数 量				
1) 配合肥料	0.60 t	490.6 / t	294.4	1,552.9 / t	931.7
2) 殺蟻剤	0.35 kg	2.3 / kg	0.8	10.0 / kg	3.5
3) 除草剤	0.62 kg	107.9 / kg	66.9	462.5 / kg	286.7
4) ヶ	4.13 ℓ	28.1 / ℓ	116.2	136.6 / ℓ	564.1
小計	—	—	478.3	—	1,786.1
直接費計	—	—	919.0	—	3,111.2
C-間接コスト					
1) 機械償却費			58.2		196.9
2) 銀行利息生産費			987.9		3,391.2
2) ヶ 固定投資			18.2		—
合計	—	—	1,983.3	—	6,690.3

出所：IEA

表 171 砂糖キビ：生産コスト 3年度 1haあたり52トン収穫の場合 カンピーナス（SP）

区 分		84 / 85		85 / 86	
A-作業コスト	所要日数	単価 Cr\$	金額 Cr\$	単価 Cr\$	金額 Cr\$
1) 一般労働力	15.10	7.0	106.3	22.8	343.5
2) トラクター運転手	3.62	10.7	38.6	30.7	111.0
3) 4輪トラクター	2.70	65.3	176.3	191.8	517.7
4) レー	0.34	5.0	1.7	18.6	6.3
5) 機械中耕	1.04	2.2	2.3	5.2	5.4
6) サブソイラー	0.42	7.7	3.2	33.5	14.0
7) 砕土	0.15	7.6	1.1	37.2	5.6
8) 助除	0.19	3.3	0.6	11.9	2.3
9) 運搬	0.25	4.4	1.1	14.5	3.6
10) 荷積	0.31	9.7	3.0	29.5	9.2
11) トラック	0.92	69.8	64.2	196.0	180.3
小計	—	—	398.6	—	1,198.9
B-資材コスト	数 量				
1) 配合肥料	0.60 t	490.6 / t	294.4	1,552.9 / t	931.7
2) 殺蟻剤	0.37 kg	2.3 / kg	0.8	10.0 / kg	3.7
3) 除草剤	4.13 ℓ	28.1 / ℓ	116.2	136.6 / ℓ	564.1
4) ヶ	1.45 kg	25.1 / kg	36.4	75.5 / kg	109.4
小計	—	—	447.8	—	1,609.0
直接費計	—	—	846.3	—	2,807.9
C-間接コスト					
1) 機械償却費			53.2		180.1
2) 銀行利息生産費			909.8		3,060.6
2) ヶ 固定投資			16.7		—
合計	—	—	1,826.1	—	6,048.7

出所：IEA

ブラジルの輸出割当量は 280万トンとなっているのでその枠を越えた実績となっている。

輸出先市場は粗糖においてソ連、米國、ベネズエラと前年と同様の順位にあり、ソ連、米國の買付量は前年並み、ベネズエラは減少した。

前年精製糖の最大の買付けを行ったソ連は84年には姿を消しておりアルジェリア、インド、イラン、イラクが主要輸入市場となっている。また結晶糖では毎年エジプトの買付けが大きい。

84年度における輸出平均価格（トン当り）は粗糖が 211ドル、精製糖 175ドル、結晶糖 157ドル、平均で 192ドルであった。これに対し生産コストはトンあたり 275ドルに達しているため、その差額が補助されている形となっている。現在のところブラジルは砂糖の輸出が増える程国庫に負担をかける状態が続いている。

ハ) 国内市場価格

砂糖キビ生産者の受取価格は国家アルコール計画の中で政府が定める工場買上価格に従うので、他の作物にみられるような市場の需給関係による変動はない。それだけ安定した作物であり、買上げ価格が採算線にある限り生産者の収益が保証されていることになり、この作物への関心が高まる理由がそこにある。

84年の買上げ価格は6月1日以降トン当り Cr\$ 16,655.39と定められ、生産者の満足を得た線とされている。

ニ) 生産コスト

表 172 砂糖キビ：生産コスト 初年度 1haあたり95トン収穫の場合 カンピーナス地方（SP）

区 分	所要日数	84 / 85		85 / 86	
		単価 Cr\$	金額 Cr\$	単価 Cr\$	金額 Cr\$
A-作業コスト					
1) 一般労働力	29.58	7.0	208.2	24.0	709.9
2) トラクター運転手	8.04	10.7	85.8	26.2	210.6
3) 4輪トラクター	6.00	65.3	391.8	104.5	627.0
4) 家畜	0.55	0.8	0.4	2.8	1.5
5) 耕起	2.01	3.6	7.2	12.4	24.9
6) 砕土	0.96	7.6	7.3	37.2	35.7
7) 防除	0.19	3.3	0.6	11.9	2.3
8) 畦立	0.48	3.1	1.5	9.2	4.4
9) 家畜中耕	0.55	0.2	0.1	0.7	0.4
10) 機械中耕	0.58	2.2	1.3	5.2	3.0
11) 運搬	1.07	4.4	4.7	14.5	15.5
12) 石灰散布	0.27	5.7	1.5	24.8	6.7
13) 荷積	0.44	9.7	4.3	29.5	13.0
14) トラック	2.04	69.8	142.4	196.0	399.8
小計	—	—	857.2	—	2,054.7
B-資材コスト	数 量				
1) 種 苗	8.20 t	15.0 / t	123.0	35.0 / t	287.0
2) 石灰	1.69 t	17.5 / t	29.6	30.0 / t	50.7
3) 配合肥料	0.55 t	649.1 / t	357.0	1,402.1 / t	711.2
4) 硫酸安	0.25 t	322.2 / t	80.6	1,109.2 / t	277.3
5) 塩化カリ	0.05 t	531.2 / t	26.6	1,477.6 / t	73.9
6) 殺滅剤	0.37 kg	2.3 / kg	0.8	7.7 / kg	2.8
7) 防除剤	1.24 kg	107.9 / kg	133.8	356.2 / kg	441.7
8) 資材費	4.13 ℓ	28.1 / ℓ	116.2	105.2 / ℓ	434.5
小計	—	—	867.5	—	2,339.1
直接費計	—	—	1,724.7	—	4,393.8
C-間接コスト					
1) 機械償却費			118.6		355.6
2) 銀行利息生産費			2,781.1		7,183.9
々 固定投資			35.7		—
合計	—	—	4,660.0	—	11,933.3

出所：IEA

3.3.2 マンジョカ

(1) 生産

マンジョカ生産はこのところ減少を続けており、83/84農年には過去5ヶ年間で最低の規模に落ちた。収穫面積は182万ヘクタールで81年と比較して(-)13%、生産量は21.3百万トンで対81年比は同じく(-)13%である。

このような生産の減少は東北地方における乾燥の被害、パラナ州やサンタ・カタリーナ州における降雨過剰に

表 173 マンジョカ：1984年生産実績

順位	州 別	面積 1,000ha	生産量 1,000トン	単 収 kg/ha
1	バ イ ア	382.5	4,350.8	11,375
2	マ ラ ニ ヨ ン	204.3	1,647.8	8,063
3	パ ラ ー	133.7	1,645.3	12,306
4	ベ ル ナ ン ブ コ	149.8	1,516.3	10,125
5	パ ラ ナ	73.7	1,446.2	19,627
6	リオ・グランデ・ド・スール	127.3	1,410.2	11,080
7	ミナス・ジェライス	92.0	1,103.1	11,998
8	サンタ・カタリーナ	83.1	1,091.0	13,125
9	ア マ ソ ナ ス	75.7	908.7	12,000
10	そ の 他	493.4	6,169.7	43,148
合 計		1,815.5	21,289.1	11,726

出所：IBGE

表 174 マンジョカ：過去5ヶ年間の生産推移 1,000トン

州 別	1980	1981	1982	1983	1984
1 バ イ ア	4,880.0	5,600.0	4,439.2	3,960.0	4,350.8
2 マ ラ ニ ヨ ン	3,279.6	3,112.2	3,478.4	2,439.2	1,647.8
3 パ ラ ー	1,239.3	1,524.0	1,675.4	1,849.4	1,645.3
4 ベ ル ナ ン ブ コ	1,508.6	1,442.8	1,666.2	1,356.6	1,516.3
5 パ ラ ナ	907.3	1,100.4	1,218.7	1,383.0	1,446.2
6 リオ・グランデ・ド・スール	1,719.6	1,700.2	1,685.4	1,672.3	1,410.2
7 そ の 他	9,931.2	10,036.8	9,846.1	9,085.6	9,272.5
合 計	23,465.6	24,516.4	24,009.4	21,746.1	21,289.1

面積 1,000ha	2,015.8	2,067.2	2,133.0	2,021.1	1,815.5
------------	---------	---------	---------	---------	---------

出所：IBGE

表 175 マンジョカ：主要生産地の単収 kg/ha

州 別	1980	1981	1982	1983	1984
バ イ ア	16,000	16,000	12,400	12,000	11,375
マ ラ ニ ヨ ン	8,904	7,990	7,547	6,809	8,063
パ ラ ー	12,158	12,349	12,779	12,350	12,306
ベ ル ナ ン ブ コ	8,400	8,672	9,531	8,280	10,125
全 国 平 均	11,640	11,059	11,256	10,759	11,726

出所：IBGE

よる単収への影響など天候不順の問題点のほか、流通機構の不備から生産者の収益が非常に不安であった従来の生産形態にもとづくものであった。とくに81年、82年に低い価格が支配した。

またサンパウロ州では州内の生産地帯マリリア地方で大豆や砂糖キビの栽培に押されて、マンジョカの栽培が肥沃度の低い土地で行なわれ、生産性を落したケースも見られる。土地の問題だけでなく労働力の方も賃金の高い砂糖キビの収穫を優先する状況で、マンジョカの生産は労働力不足の問題にも見舞われてきた。

マンジョカの工業加工はサンパウロ州及サンタ・カタリーナ、パラナ州で行なわれており他州へ供給している。

ロ) 価格

全般的な供給量の減少により価格は年間を通じて高く、これが刺激となって次期植付けは増加する見通しである。

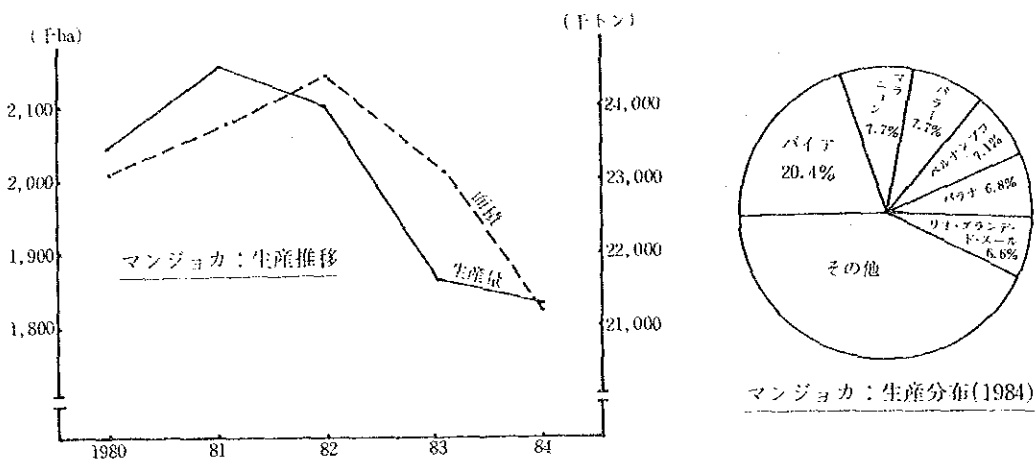
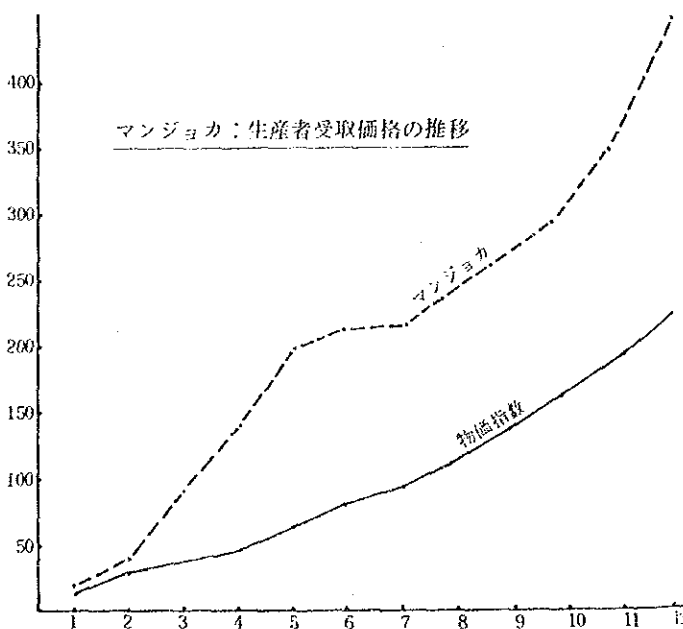


表 176 マンジョカ：生産者受取価格

CrS / トン		
月 別	1983	1984
1	6,810	32,484
2	6,796	38,798
3	7,604	51,600
4	7,695	65,312
5	8,406	80,588
6	9,232	84,844
7	9,557	86,849
8	10,861	93,813
9	18,417	100,470
10	24,934	110,093
11	26,803	127,928
12	27,345	153,040

出所：I.E.A. サンパウロ州の場合



ハ) 生産コスト

サンパウロ州農務局農業経済研究所が発表した84/85及び85/86農年の生産コスト予想は次表の通りである。

表 177 マンジョカ：生産コスト 1 ha当り25トン収穫の場合 アシス地方

項 目	所要日数	84/85		85/86	
		単価 Cr\$	金額 Cr\$	単価 Cr\$	金額 Cr\$
A-作業コスト					
a) 直 営					
1) 人 夫 賃	36.60	7.2	264.4	21.4	783.2
2) 家 畜	3.46	0.8	2.8	2.8	9.8
3) 畝 立	0.69	0.2	0.1	0.7	0.5
4) 家 畜 中 耕	2.58	0.2	0.5	0.7	1.8
5) 運 搬	0.19	0.4	0.1	1.6	0.3
小 計	--	--	267.9	--	795.7
b) 請 負					
1) 耕 起			40.0		120.0
2) 碎 土			27.6		100.0
合 計	--	--	335.5	--	1,015.7
B-資材コスト					
1) 石 灰	0.50 t	35.0 / t	17.5	144.0 / t	72.0
2) 杭	5.00 m ³	15.0 / m ³	75.0	30.0 / m ³	150.0
3) 殺 蟻 剤	0.51 kg	2.3 / kg	1.2	10.0 / kg	5.1
4) 配 合 肥 料	0.17 t	615.2 / t	104.6	1,780.3 / t	302.7
計	--	--	198.2	--	529.8
直接費計	--	--	533.8	--	1,545.4
C-間 接 費					
1) 機 械 償 却 費			2.3		6.8
2) 銀行利息生産費			573.8		1,684.5
◇ 固定投資			0.5		--
合 計	--	--	1,110.4	--	3,236.7

出所：IEA

3.3.3 綿

イ) 生 産

83/84農年の綿栽培は前年の天候不順や害虫ビクードの発生による大巾な減産のあと生産を回復し、中央-南部地方の草綿、東北地方の木綿ともに過去5ヶ年間最高の生産量に達した。最近の綿栽培にみられる特徴は、従来木綿栽培一本であった東北地方で草綿の栽培が普及し始めていることで、84年には東北地方のセアラ州とパラナ州がパラナ、サンパウロ州に次ぐ生産地帯となっている。

綿の収穫はサンパウロ州では5月、東北地方は11月をもって終了する。ただし東北地方の中、リオ・グランデ・ド・ノルテ州の収穫は12月である。作柄は中央-南部を代表するパラナ州、サンパウロ州、東北部を代表する

セアラ、パラíba、リオ・グランデ・ド・ノルテ州共に良好であり、特に東北地方の単収が前年の49kg/haより187kgへと280%の増加をみたのが全国増産に影響した。

このように大巾な生産の回復をみたのは前年の不作により繊維工場の原料に事欠き、83年の暮より84年始めにかけて価格が高騰したため、この栽培気運は前年ビークドの発生により大きな被害を受けた地方にまで及んだ。1983年の始めサンパウロ州のカンピーナス地方に発生した害虫ビークド(BICUDO)は以後各地に伝播し、

表 178 綿：草綿1984年生産実績

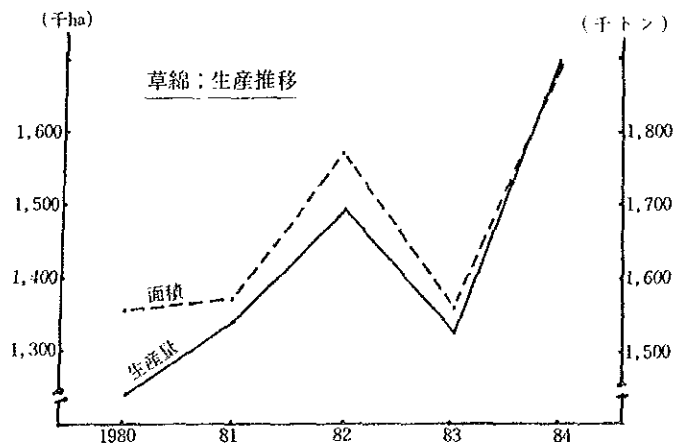
順位	州 別	面積 1,000ha	生産量 1,000トン	単収 kg/ha
1	パラナ	322.1	611.9	1,899
2	サンパウロ	244.0	507.7	2,081
3	セアラ	270.0	181.4	672
4	パラíba	168.8	109.2	647
5	ゴヤス	46.9	93.0	1,983
6	ミナス・ジェライス	109.1	85.3	781
7	バイア	107.6	67.3	626
8	その他	405.6	236.6	583
合計		1,674.1	1,892.4	1,130

出所：IBGE

表 179 綿：木綿1984年生産実績

順位	州 別	面積 1,000ha	生産量 1,000トン	単収 kg/ha
1	セアラ	1 523.0	100.7	193
2	パラíba	335.6	58.3	174
3	リオ・グランデ・ド・ノルテ	279.5	49.7	178
4	ピアウイ	159.0	33.3	210
5	ペルナンブコ	86.9	15.8	182
6	その他	46.0	9.9	215
合計		1,430.0	267.7	187

出所：IBGE



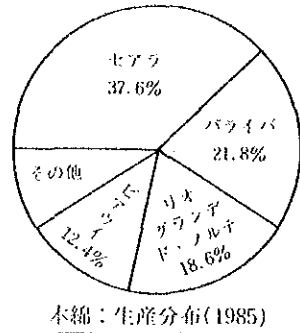
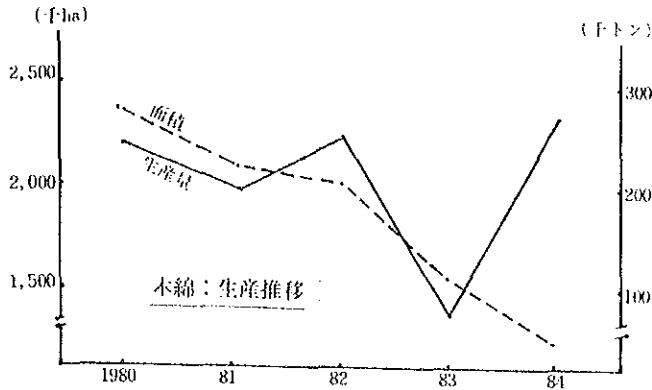


表 180

綿：草綿過去5ヶ年間生産推移

1,000トン

州 別	1980	1981	1982	1983	1984
1 パ ラ ナ	561.0	581.0	739.0	700.0	611.9
2 サ ン バ ウ ロ	482.6	552.4	529.2	464.2	507.7
3 セ ア ラ	10.5	1.3	60.4	17.0	181.4
4 パ ラ イ ー バ	33.9	25.5	28.4	13.2	109.2
5 そ の 他	405.3	370.9	334.6	331.2	482.2
合 計	1,493.3	1,542.1	1,691.6	1,525.6	1,892.4
面 積 1,000ha	1,353.4	1,369.5	1,571.1	1,348.0	1,674.1

出所：IBGE

表 181

綿：草綿主要生産地単収

kg / ha

州 別	1980	1981	1982	1983	1984
パ ラ ナ	1,671	1,900	2,000	1,591	1,899
サ ン バ ウ ロ	1,787	1,823	1,664	1,504	2,081
セ ア ラ	195	225	465	229	672
パ ラ イ ー バ	197	125	161	95	647
全 国 平 均	1,063	1,104	1,077	1,132	187

出所：IBGE

表 182

綿：本綿：過去5ヶ年間の生産推移

1,000トン

州 別	1980	1981	1982	1983	1984
1 セ ア ラ	131.2	90.0	140.8	47.2	100.7
2 パ ラ イ ー バ	40.6	32.3	24.0	8.7	58.3
3 リオ・グランデ・ド・ノルテ	15.6	23.5	29.7	4.3	49.7
4 ピ ア ウ イ	7.5	18.4	17.1	3.4	33.3
5 ベ ル ナ ン ブ コ	18.0	10.7	9.8	6.2	15.8
6 そ の 他	13.6	14.6	11.9	8.4	9.9
合 計	236.5	189.5	233.3	78.2	267.7
面 積 1,000ha	2,346.0	2,114.4	2,072.7	1,580.6	1,430.0

出所：IBGE

中央-南部地方の綿作に多大の被害を与えたため、その対策が強化され発生地帯の抜根対策が続けられたが、これに必要とした農業が一部に輸入品を用いているため価格が高く、現今の経済政策下で輸入品価格が日々上昇していく中で生産コストに大きな影響を与えることとなった。

83/84農年における綿の生産量は繰綿にして約625千トンであり、この中465千トンが年の前半に収穫される中央-南部地方、160千トンが下半期より収穫を開始する東北地方の生産物となる。サンパウロ州繊維工業シンジケートの情報によると、この生産量は工業界（年間557千トン消費する）の需要に応じうる量である。この中サンパウロ州は実綿508千トンの収穫により180千トンの繰綿を生産している。

綿繊維は依然として国内ではもっとも多く利用されている繊維である。1984年の国内繊維消費量は861.9千トンで、この中天然繊維が76.8%、合成繊維19.0%、人工繊維が4.2%の割合となっている。天然繊維の中には綿、ジュート、羊毛、亜麻及び絹があり、84年に662千トンが消費されたが、この中綿はその84%を占め、繊維全体に対しても64%の割合を占めている。

綿繊維の強力な競合品とされるポリエステル消費量は90.3千トンで全体の約10%である。

表 183 綿：木綿の主要生産地単収 1,000トン

州 別	1980	1981	1982	1983	1984
セ ア ラ	105	90	151	70	193
バ ラ イ バ	87	67	54	22	174
リオ・グランデ・ド・ノルテ	61	83	101	22	178
ピ ア ウ イ	106	106	95	19	210
ペ ル ナ ン ブ コ	114	86	91	70	151
全 国 平 均	100	90	112	49	187

出所：IBGE

表 184 繊維の消費量 1,000トン

年 度	天 然 織 維					計 A	A/D %
	綿	ジュート	羊 毛	亜 麻	絹		
1980	572.4	109.7	18.4	18.3	0.44	719.2	71.3
1981	554.8	94.0	16.3	14.1	0.36	679.6	75.1
1982	579.8	85.9	17.5	9.1	0.49	692.8	74.7
1983	556.7	62.9	13.2	10.0	0.30	643.1	76.2
1984	555.2	78.6	14.7	13.3	0.24	662.0	76.8

年 度	合 成 織 維					人 工 織 維				合計 D
	ポリエステル	ナイロン	アクリリコ	計 B	B/D %	アセタート	ビスコース	計 C	C/D %	
1980	121.1	90.8	28.5	240.4	23.8	44.2	4.6	48.8	4.9	1,008.4
1981	89.7	70.0	23.4	183.1	20.2	39.1	3.0	42.1	4.7	907.8
1982	100.2	69.9	23.1	193.2	20.8	39.1	2.3	41.4	4.5	927.4
1983	89.4	61.1	18.9	169.4	20.1	30.0	1.7	31.7	3.7	844.2
1984	90.3	55.9	17.5	163.7	19.0	34.3	1.9	36.2	4.2	861.9

出所：SINDICATO DA INDÚSTRIA DE FIAÇÃO E TECELAGEM EM GERAL

表 185

世界の綿生産

100万梱包

国 別	1983	%	1984	%
米 国	11.96	17.6	7.77	11.5
その他資本主義諸国	27.01	39.8	26.13	38.7
小 計	38.98		33.90	
中 国	16.53	24.4	21.30	31.5
ソ 連	12.19	18.0	12.28	18.2
その他社会主義諸国	0.08	0.2	0.08	0.1
小 計	28.80		33.66	
合 計	67.77	100	67.56	100

出所：Comitê Consultivo Internacional do Algodão (I.C.A.C.)

表 186 綿：国際相場 US\$ / ポンド

月別	1982	1983	1984
1	69.98	71.88	87.58
2	69.97	74.32	87.44
3	70.44	78.89	88.43
4	71.52	80.23	88.99
5	76.69	81.96	88.88
6	75.64	86.01	83.71
7	78.47	88.43	78.99
8	76.40	90.80	75.52
9	72.75	89.85	73.16
10	70.21	88.11	73.63
11	62.04	89.13	72.64
12	69.67	98.33	71.98
平均	72.67	84.08	80.91

出所：Comitê Consultivo Internacional do Algodão (I.C.A.C.)

ロ) 国際市場とブラジルの輸出

国際綿委員会 (I C A C) の推定によると83/84農年における世界の綿生産は67.5百万包(14.7百万トン、1包の重量 217.8kg) で前年とほぼ同等のレベルを維持した。世界生産の動向に大きく影響する米国の生産が、政府が採用した減反政策(P I K)によって作付面積を前年比27%減少したことや、天候不順によって単収を 572kg / haに落したことから、その生産量は 7.7

百万包に終わったが、他の生産国の増産によって米国の減産分がカバーされたものである。中でも中国における前年比(+23.9%の生産増加が大きく影響した。

このように生産は前年のレベルを維持したが、消費の方は前年を 2.3%上廻る69.3百万包に達した見込みであり、中国における17.7百万包、米国の 5.9百万包等の消費が特筆される。米国の消費増加は国内経済の回復による機織品需要の増加と解釈されている。西欧の場合は大きな変化はなく前年並みの 5.9百万包の消費が続いており、極東方面では日本の(-) 4.2%の消費減が香港及び台湾の消費増によってカバーされる形となっている。

繰綿の世界貿易量は主要輸入国における消費量の減少により19百万包前後に止まり、過去7年間ではもっとも低い水準であった。中でも中国の輸入は83年の50万包より84年にはわずか10万包へと減少した。

生産が前年並みであったのに対し消費が増加したため世界の在庫は減少し、83/84農年末(84年7月31日)で23.4百万包となっている。

世界の繰綿価格は83年に前年比15.9%の上昇をみたあと84年も上半期に高値を維持したが、84年下半年には米国の増産予想から値を落し、年間を通じて前年比(-) 3.8%の減少となっている。

表 187 綿及び加工品の輸出実績

年度	重量 1,000トン	金額 100万ドル
1981	141.3	343.7
82	153.9	321.0
83	329.8	536.2
84	200.7	485.6

出所：CACEX

84/85農年にはPIKの終了による米国の大巾な生産増加が見込まれている。栽培面積は445万ヘクタールに拡大され11.5百万包の生産予想である。これは83/84年に対し49%の増加を意味しているが、消費量がこの増産傾向に応じない場合、国際相場の下落につながるものと予想される。

ブラジルの輸出は繰綿、綿糸、綿布の形で行なわれており、84年には重量で200.7千トン、金額で485.6百万ドルの輸出であった。

84年の綿に関する貿易政策としては前年度に国内原料の不足に直面したことから、年頭の高い国際価格を利用した原料輸出の増加が国内原料を再び不足させ、国内価格の高騰が起り得ると予測した当局は、年頭の国際価格を利用することなく輸出の中止を行った。

外国市場への販路が閉されたため必然的に国内市場が対象とされたが、83/84農年の生産が前年を大巾に上廻ったため国内市場への供給量が増大し、市場価格の下落から最低保証価格制度による政府融資(EGF)を求めたが、その資金は乏しく結局低い市場価格での販売を余儀なくされた。下の表にみられる通り、実質価格でみた綿の生産者受取価格は4月以降年末にかけて下降を続け、また名目金額でみた価格推移は4月以降物価指数をはるかに下廻る価格が低迷し、生産者や組合に多大の被害を与えることとなった。

輸出は6月になってようやく再開されるが、この時点では国際価格はもはや高値の時期を過ぎて下降を始めており、以後低価格に甘んじることとなる。

このような貿易政策が業界の非難的とされたのは当然であるが、その被害は組合において最も大きく、極めて大きな打撃を受けた組合もあった。すなわち組合員より年頭の高値の時期に買付け、輸出が出来ないまま高いコストをかけて貯蔵し低値で販売したためである。この問題は正確な情況判断を誤る政策がひきおこす損害と混乱を端的に示したケースであった。

ハ) 価格

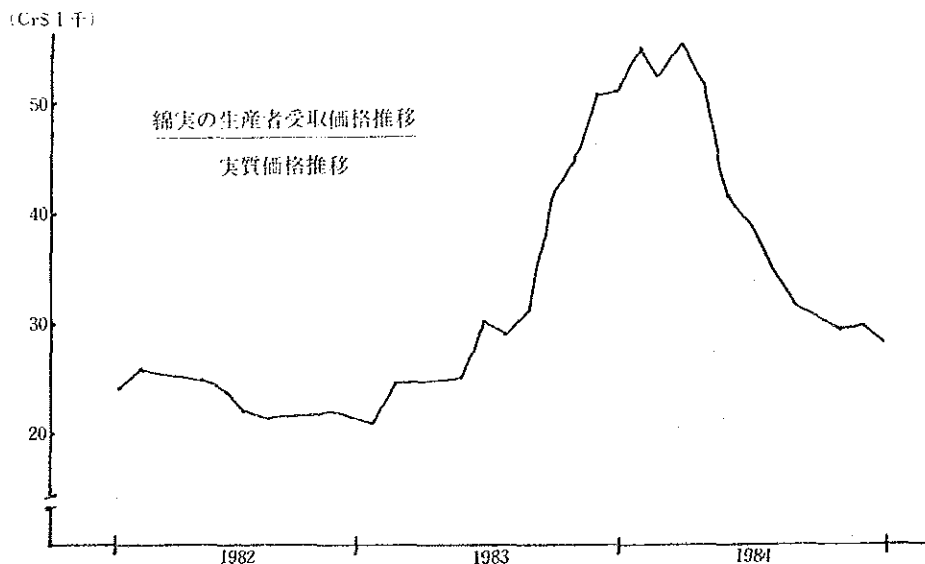


表 188

綿実：生産者受取価格(実質)

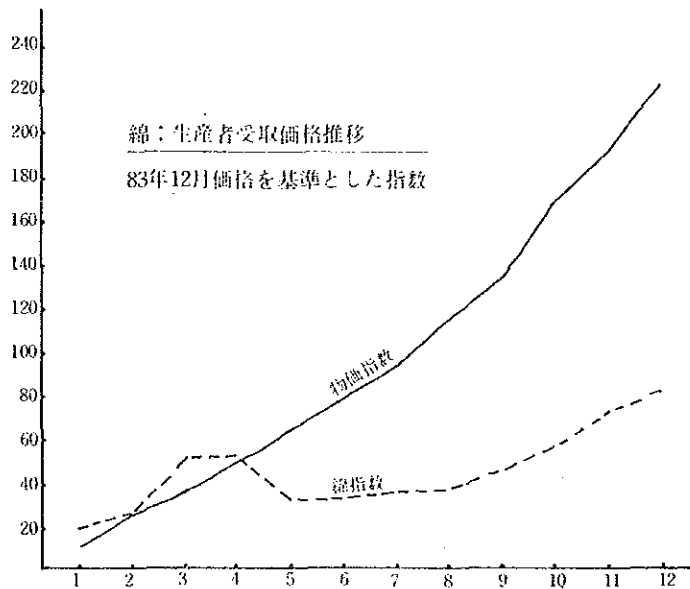
月別	1982年	前月比 %	1983年	前月比 %	1984年	前月比 %
1	24,149	—	21,530	—	56,176	—
2	26,876	11.3	21,979	16.0	52,590	(-) 6.4
3	26,607	(-) 1.0	25,134	0.6	57,159	8.7
4	26,030	(-) 2.2	25,324	0.7	52,537	(-) 8.1
5	25,031	(-) 3.8	25,757	1.7	42,485	(-) 19.1
6	22,976	(-) 8.2	31,401	21.9	38,952	(-) 8.3
7	21,958	(-) 4.4	28,923	(-) 7.9	36,033	(-) 7.5
8	21,515	(-) 2.0	32,680	13.0	32,770	(-) 9.6
9	21,668	0.7	41,926	28.3	31,384	(-) 4.2
10	21,957	1.3	45,463	8.4	29,820	(-) 5.0
11	22,237	1.3	50,586	11.3	30,467	2.2
12	21,963	(-) 1.2	50,986	0.8	28,793	(-) 5.5
平均	23,271	—	36,391	—	37,588	—

出所：IEA

表 189 綿：生産者受取価格

月別	1983年	1984年
1	1,401	10,100
2	1,732	10,622
3	1,918	12,604
4	2,110	12,620
5	2,283	11,110
6	2,624	11,129
7	3,003	11,356
8	3,717	11,426
9	5,301	12,094
10	6,406	12,937
11	7,729	14,522
12	8,379	15,170

出所：IEA



三) 生産コスト

サンパウロ州農務局農業経済研究所が発表した84/85、85/86農年のサンパウロ州アラサツバ地方及び、ミランジア地方の生産コスト予想は表190~191の通りである。

表 190 綿：生産コスト 1ha 100アローバ生産の場合 サンパウロ州アラサツバ地方

項 目		84 / 85 Cr\$1,000		85 / 86 Cr\$1,000	
A, 作業コスト	所要日数	単 価	金 額	単 価	金 額
a) 直 営					
1, 人 夫 費	8.40	7.6	63.4	22.4	188.2
2, トラクター運転手	3.24	10.5	34.0	26.1	84.6
3, 4輪トラクター	3.24	65.3	211.5	191.8	621.3
4, 耕 起	0.32	3.6	1.1	12.4	4.0
5, 碎 土	0.41	7.6	3.1	37.2	15.3
6, 播 種 ・ 施 肥	0.19	1.6	0.3	9.6	1.8
7, 機 械 中 耕	0.93	2.2	2.1	5.2	4.8
8, 防 除	0.56	4.9	2.7	19.6	11.0
9, 運 搬	0.44	4.4	1.9	14.5	6.4
10, ロータリー・カッター	0.39	3.7	1.5	15.2	5.9
小 計	—	—	321.8	—	943.1
b) 請 負					
1, 防 除			13.3		38.0
2, 収 穫			280.0		1,260.0
計	—	—	615.1	—	2,241.1
B, 資材コスト					
1, 種 子	40.56kg	1.0 / kg	40.6	2.5 / kg	101.4
2, 配 合 肥 料	0.24 T	482.5 / T	115.8	1,942.2 / T	466.1
3, 殺 虫 剤	90.07kg	1.7 / kg	153.1	—	—
4, 殺 虫 剤	8.12 L	22.2 / L	180.0	66.9 / L	542.8
5, 殺 蟻 剤	1.0 kg	2.3 / kg	2.3	10.0 / kg	10.0
計	—	—	491.8	—	1,553.1
直接費計					
	—	—	1,106.8	—	—
C, 間接費					
1, 機 械 償 却 費			47.5		168.6
2, 銀行利息、生産費 々 固定投資			991.5		3,446.4
3, 義 務 保 険 料			15.7		—
合計	—	—	2,166.5	—	7,461.1

出所：IEA

表 191

綿：生産コスト 1ha当り165アローバ生産の場合 サンパウロ州オルランジア地方

項 目		84 / 85 Cr\$1,000		85 / 86 Cr\$1,000	
A, 作業コスト	所要日数	単 価	金 額	単 価	金 額
a) 直 営					
1, 人 夫 費	12.69	7.5	95.6	23.6	299.5
2, トラクター運転手	3.08	10.7	32.9	30.7	94.4
3, 4 輪トラクター	3.08	65.3	201.1	191.8	590.6
4, 耕 起	0.31	3.6	1.1	12.4	3.9
5, 石 灰 散 布	0.11	5.7	0.6	24.8	2.7
6, 砕 土	0.30	7.6	3.8	37.2	18.6
7, 播 種 ・ 施 肥	0.15	1.6	0.2	9.6	1.4
8, 防 除	0.66	4.9	3.2	19.6	12.9
9, 機 械 中 耕	0.35	2.2	0.8	5.2	1.8
10, 運 搬	0.76	4.4	3.3	14.5	11.0
11, ローター・カッター	0.24	3.7	0.9	15.2	3.6
小 計	—	—	343.7	—	1,040.5
b) 収穫請負費	—	—	739.2	—	2,310.0
計	—	—	1,082.9	—	3,350.5
B, 資材コスト					
1, 種 子	35.20kg	1.0/kg	35.2	2.5/kg	88.0
2, 石 灰	1.03 T	29.0/T	29.9	100.0/T	103.0
3, 肥 料	0.38 T	413.8/T	157.2	1,398.4/T	531.4
4, 硫 安	0.20 T	322.2/T	64.4	1,364.2/T	272.8
5, 殺 虫 剤	—	—	130.1	—	406.9
6, 殺 グ ニ 剤	—	—	181.2	—	524.8
7, 展 着 剤	0.80 L	3.2/L	2.6	9.1/L	7.3
8, 除 草 剤	2.00 L	18.0/L	35.8	54.2/L	108.0
9, 殺 蟻 剤	1.00kg	2.3/kg	2.3	10.0/kg	10.0
小 計	—	—	1,721.5	—	2,052.1
C, 間接コスト					
1, 機 械 償 却 費			46.6		210.6
2, 銀行利息、生産費 〃 固定投資			1,542.2 15.3		4,203.6 —
3, 義 務 保 險			14.4		51.9
合 計	—	—	3,340.1	—	9,093.9

出所：IEA

3.3.4 煙草葉

イ) 生産

煙草葉は税収源(注:煙草小売価格の75.85%は国税として徴収される)及び外貨獲得源の1つとして重要な作物である。国内の生産地帯は東北地方と南部地方に分かれており、前者ではバイア及びアラゴアス州、南部ではリオ・グランデ・ド・スール州、サンタ・カタリーナ州及びパラナ州が生産地帯である。1960年頃には東北地方が全国生産の80%を占めていたが、次第に南部地方の生産が伸び84年度には南部3州が84%を占めるようになっていく。南部地方の中、サンタ・カタリーナ州は巻煙草原料、リオ・グランデ・ド・スール州は巻煙草、葉巻の原料生産地帯である。

栽培面積の規模は30万ヘクタール前後であり、生産量は40万トン前後、平均単収は1,300kg/haである。

84年度には前年よりも栽培面積が減少したが、単収が過去5ヶ年間最高の1,454kgに達したため、生産量は過去5ヶ年間では82年に劣るだけの414.8千トンであった。84年生産物の品質は満足すべきものであったが、83年末より84年始めにかけた南部地方の暑さと湿気のため最上の気象条件とはいえなかった。

ブラジルにおける煙草産業の重要性は、前述の通り重要な収入源であると同時に労働力吸収の面においても極めて重要な部門となっており、また他の作物とくに国内食糧作物の栽培と平行して行なうことが出来る利点も有している。

南部地方には一般にクラロ種(CLARO)と呼ばれているバージニア種及びアマレニンヨ種の栽培が多いが、前者は特に輸出商品として重要である。東北地方より南部地方へ生産地帯が移動したのも南部でバージニア種が

表 192 煙草葉：1984年度生産実績

順位	州 別	面積 1,000 ha	生産量 1,000トン	単収 kg/ha
1	リオ・グランデ・ド・スール	100.0	162.9	1,629
2	サンタ・カタリーナ	91.3	151.6	1,661
3	パ ラ ナ	19.5	34.8	1,789
4	ア ラ ゴ ア ス	30.5	30.4	995
5	バ イ ア	23.3	19.0	815
6	そ の 他	20.7	16.1	778
	合 計	285.3	414.8	1,454

出所：IBGE

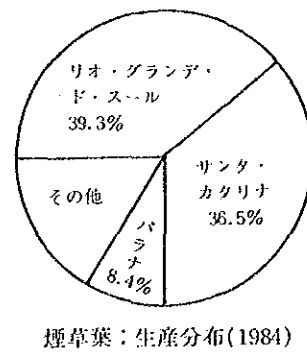
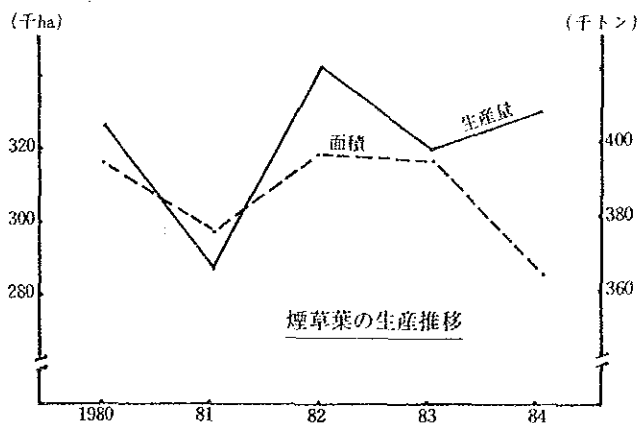


表 193

煙草葉：過去5ヶ年間の生産推移

1,000トン

州 別	1980年	1981年	1982年	1983年	1984年
1, リオ・グランデ・ド・スール	149.3	138.0	153.0	156.1	162.9
2, サンタ・カタリーナ	127.4	100.4	132.1	132.1	151.6
3, パラナ	43.6	29.3	30.0	29.2	34.8
4, アラゴアス	27.2	28.1	47.0	31.0	30.4
5, バイア	37.3	49.0	39.0	29.3	19.0
6, その他	20.2	21.2	20.4	17.8	16.4
合 計	405.0	366.0	421.5	395.5	414.8
面積 1,000 ha	316.4	297.5	318.6	316.0	285.3

出所：IBGE

表 194

煙草葉：主要生産地の単収

kg/ha

州 別	1980年	1981年	1982年	1983年	1984年
リオ・グランデ・ド・スール	1,376	1,387	1,553	1,436	1,629
サンタ・カタリーナ	1,662	1,637	1,851	1,478	1,661
パラナ	1,126	1,827	4,943	1,529	1,789
アラゴアス	829	756	943	949	995
バイア	800	836	750	693	815
全 国 平 均	1,279	1,229	1,323	1,252	1,454

出所：IBGE

生産されることを大きな理由としている。

多くの生産国において煙草栽培が国营、又は政府による最低保証価格制度下にあるのと異り、ブラジルの場合には生産者と工場、又は生産者と輸出業者との協定にもとづいて行なわれるという特殊な形態をとっている。その際、生産者を代表する団体として南部地方ではAFUBRA（ブラジル煙草葉生産者協会）があり、工場側との価格協定、その他生産者の利益を代表している。

煙草葉を最低価格保証制度に含めようとする動きもなかったわけではないが、生産者側はむしろ現状維持を望んでいるため、積極的に最低価格保証制度を取り入れようとする動きはみられない。

煙草葉生産に対する政府の政策としては、供給過剰気味の国際市場の中で、国内生産の不必要な増加を避け品質を向上させる方向に向けられている。

ロ) 国際市場とブラジルの輸出

世界生産国の中、10万トン以上の生産を行なっているのは11ヶ国だけで、ブラジルは中国、米国及びインドに次いで4位の位置にある。これらの生産国の中ブラジルの競合相手国は、乾燥炉処理を行なっている米国とジンバブエであり、84年の米国輸出はブラジルに勝り、ジンバブエはブラジルに次いで3位であった。この他、量は少ないがブラジルと同様に乾燥炉処理による輸出を行なっている国としてインド、タイ、マラウイ、アルゼンチン、韓国及びカナダがあげられる。米国はブラジルの強力な競争相手であると同時に、ブラジル煙草葉の最大の輸出先市場でもある。このように米国は最大の輸出国（約25万トン）かつ最大の輸入国（約22万トン）であるため、その生産、輸出入動向は世界の煙草市場に大きな影響力を持っている。ブラジル製品は米国製品と西独、スベ

表 195

煙草葉：世界の生産

国 別	面積 1,000 ha		生産量 1,000トン		単 収 kg/ha	
	1983年	1984年	1983年	1984年	1983年	1984年
中 国	768.4	914.0	1,381.0	1,650.0	1,797	1,805
米 国	319.4	320.8	648.2	783.9	2,030	2,444
イ ン ド	502.7	440.1	590.6	497.1	1,175	1,130
ブラジル	285.0	276.0	378.0	401.0	1,326	1,453
ソ 連	190.4	188.5	385.0	370.5	2,022	1,966
トルコ	229.8	215.2	234.0	191.2	1,019	888
ブルガリア	89.5	87.4	145.9	149.8	1,630	1,714
イ ン ド	71.4	69.5	156.0	152.8	2,184	2,198
ギリシア	92.7	92.8	111.7	140.3	1,205	1,512
ジンバブエ	49.5	54.3	98.9	124.9	1,999	2,300
ビルマ	70.0	70.0	115.1	115.1	1,644	1,644

出所：USOA

表 196 煙草葉及び製品の輸出推移

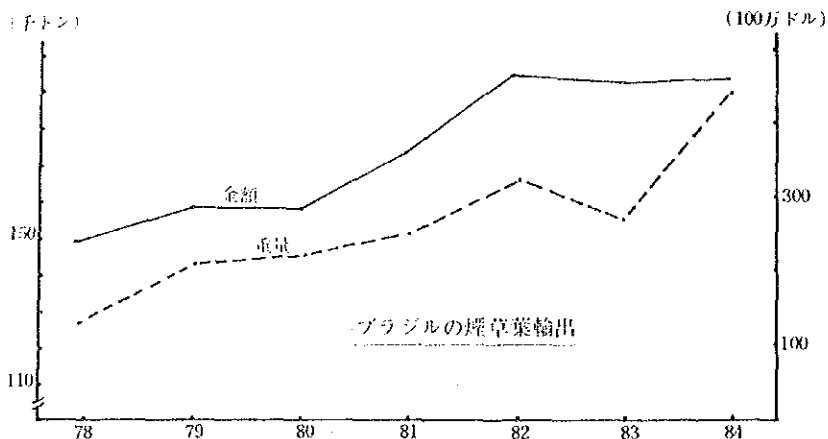
年度	1,000トン	100万ドル
1978	119.4	249.3
79	141.6	296.5
80	144.8	295.3
81	150.0	368.7
82	166.9	477.0
83	155.0	458.0
84	189.2	468.6

出所：CACEX

表 197 煙草葉及び製品の輸出実績 1984年

区 分	重量 1,000トン	金額 100万ドル
煙草葉		
米 国	52.2	131.0
英 国	29.7	66.8
西 独	17.1	44.7
オランダ	13.3	28.4
その他	75.1	189.6
計	187.4	460.5
製品 巻煙草、葉巻	1.8	8.1
合 計	189.2	468.6

出所：CACEX



ン、英国等の市場で競合しているが、米国製煙草の重要な市場である日本はブラジルの主要顧客には入っていない。

ブラジルの84年度輸出は煙草葉及び製品を含め合計重量で189千トン、金額では468.6百万ドルであった。この輸出金額は輸出総額の1.7%、農産物輸出の3.9%に相当し、農産物輸出品目の中ではコーヒー、大豆及び加工品、ココア、砂糖に次ぐ重要品目である。輸出先国は米国がもっとも大きく煙草輸出の28%が同国に向けられている。ブラジルにとって重要なこの米国市場は、最近煙草葉の輸入関税を変更して外国品の輸入にブレーキをかけているため、同国向け輸出は次第に困難となる見通しである。

二) 国内市場

巻煙草の国内消費量は国産品によって賄われており自給態勢にある。原料葉の価格は工場側との協定によって定められ、また巻煙草の価格は政府の重要な収入源として政府が市場価格を決定する。巻煙草の国内消費量は1981年以降減少傾向を続けている。

表 198 煙草葉：生産者受取価格 Cr\$ / 15kg

月別	1982年	1983年	1984年
1	16,821	32,845	53,125
2	17,931	33,453	—
3	21,998	34,642	—
4	22,112	34,950	60,954
5	24,214	37,191	53,007
6	27,750	37,167	57,600
7	30,833	39,021	57,600
8	31,857	—	—
9	32,333	49,322	—
10	25,833	52,000	—
11	24,857	53,000	—
12	30,511	53,125	—

出所：IEA

3.3.5 サイザル

前年、東北地方の生産地帯では極度の乾燥によって生産を落しただけでなく、品質もいちじるしく低下して工業原料の不足を来したため価格が上昇し、これが原因となって83/84農年の作付が増加、大きな天候上の問題もなく生産量を復活した。

サイザルの輸出は84年度に繊維及び製品を合せて94.7百万ドルで、それ程重要な項目ではないが乾燥に強い作

表 199 サイザル：1984年生産実績

順位	州 別	面積 1,000 ha	生産量 1,000トン	単収 kg / ha
1	バ イ ア	170.0	119.0	700
2	パ ラ イ ー バ	110.5	83.3	754
3	リオ・グランデ・ド・ノルテ	34.0	16.1	476
4	そ の 他	5.8	6.4	1,103
	合 計	320.3	224.8	702

出所：IBGE

物であるため東北地方では重要な輸出作物の一つであり、その栽培、調整に生活を依存している家族が多い。海

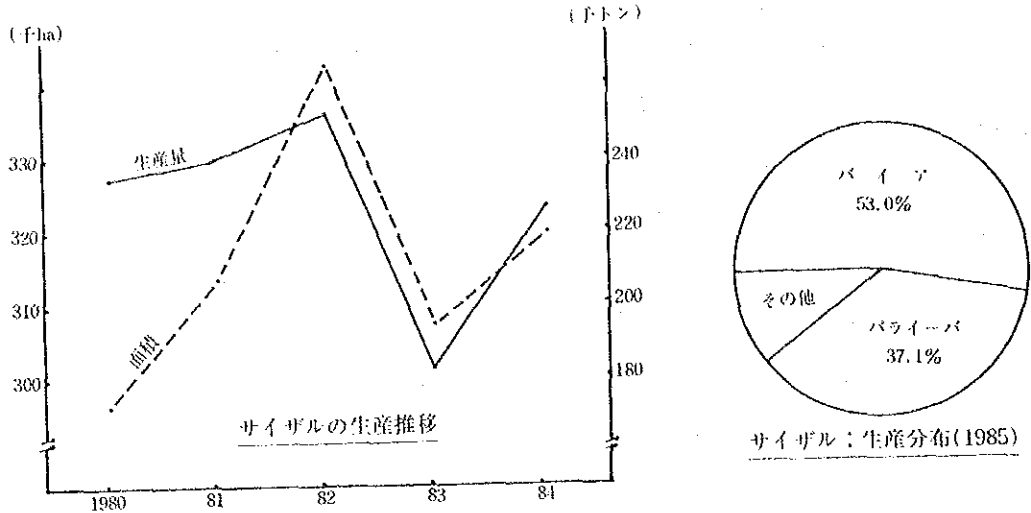


表 200 サイザル：過去5ヶ年間の生産推移 1,000トン

州 別	1980年	1981年	1982年	1983年	1984年
1, バ イ ア	133.0	138.2	150.0	75.0	119.0
2, パ ラ イ ー バ	81.0	80.2	79.0	88.5	83.3
3, リオ・グランデ・ド・ノルテ	13.7	14.3	14.1	12.4	16.1
4, そ の 他	7.3	6.5	6.1	4.9	6.4
合 計	235.0	239.2	249.2	180.8	224.8
面 積 1,000ha	296.1	312.5	341.6	306.7	320.8

出所：IBGE

表 201 サイザル：主要生産地の単収 kg/ha

州 別	1980年	1981年	1982年	1983年	1984年
バ イ ア	950	894	800	500	700
パ ラ イ ー バ	706	695	702	751	754
リオ・グランデ・ド・ノルテ	399	412	409	374	476
全 国 平 均	793	765	730	590	702

出所：IBGE

表 202 サイザル繊維及びロープの輸出実績

年度	重 量 1,000トン			金 額 100万ドル		
	繊 維	ロ ー プ	計	繊 維	ロ ー プ	計
1981	69.6	81.0	150.6	35.6	66.2	101.8
82	36.7	56.7	93.4	17.0	48.0	65.0
83	99.8	87.3	187.1	36.5	54.8	91.3
84	82.4	118.2	200.6	29.5	65.2	94.7

出所：CACEX

外市場は82年に停滞し、輸出がにぶったため最低価格保証制度による政府の買上げが増大し政府ストックを増やすが、83年には外国市場の景気復活によって、サイザルの競合品であるポリプロピレン繊維製品の需要が増加し、その価格をつりあげたため、サイザルの競争力が増加し需要が増えた。また政府がコントロールする輸出価格は段階的に引き下げ輸出を容易としたため、以後の輸出が伸びた理由となっている。

サイザルの輸出は繊維とロープの形で行なわれ、84年には繊維が29.5百万ドル、ロープが65.2百万ドルの輸出となっている。繊維の輸出先市場はポルトガル、ポーランド、ロープの場合は米国、カナダ、イラン等であり、米国の輸入(46百万ドル)が圧倒的に大きい。

サイザル・ロープの最大の輸出先市場である米国の需要は飼料用乾草の生産に関係する。83年には米国の生産地帯を襲った乾燥のため、乾草の生産が減少しロープの需要を押え、農業用ロープの価格は重量40ポンド当り前年の17ドルより13ドルへと下降したが、84年に乾燥草の生産が増加したため需要を増やしている。

3.3.6 ジュート及びマルバ

83/84農年におけるジュート及びマルバの生産量は合計72.8千トンで、前年の60.9千トンを約20%増加したものの81/82農年に達した97.1千トンには達していない。

表 203 ジュート：1984年生産実績

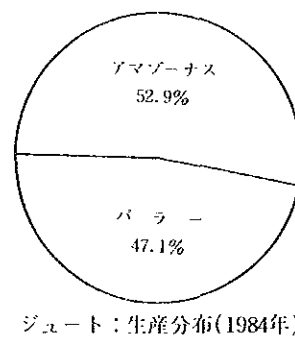
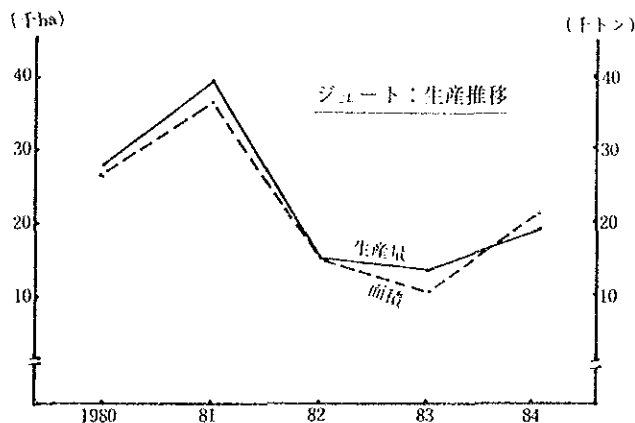
順位	州別	面積 1,000ha	生産量 1,000トン	単収 kg/ha
1	アマゾーナス	13.5	10.1	748
2	パラ	7.4	9.0	1,218
合計		20.9	19.1	914

出所：IBGE

表 204 ジュート：過去5ヶ年間の生産実績 1,000トン

州別	1980年	1981年	1982年	1983年	1984年
1, アマゾーナス	18.8	22.3	10.3	7.8	10.1
2, パラ	8.8	16.6	3.9	5.1	9.0
合計	27.6	38.9	14.2	12.9	19.1
面積 1,000ha	26.2	36.4	14.6	11.0	20.9

出所：IBGE



工業原料としての消費量は穀類の作柄によって袋の需要が増減するので一定していないが、過去の例では81年が約10万トン、83年が84千トンであり、この間を上下するものと思われる。従って平均9万トン前後の需要に対し72.8千トンの生産では絶対量が不足し、政府のストック放出が必要となる。ただし83年末の政府ストックは、ここ数年間、減産のため次第に減少しており、10千トンをわずかに上廻る程度であるため、84年はこれを全量放出してようやく工業原料の供給が出来た形となっている。

表 205 ジュート：主要生産地の単収 kg/ha

州 別	1980年	1981年	1982年	1983年	1984年
アマゾーナス	1,000	989	1,041	1,200	748
パ ラ ー	1,206	1,194	832	1,139	1,218
全 国 平 均	1,057	1,068	974	1,175	914

出所：IBGE

表 206 ジュート及びマルバの需給バランス

項 目	1981年	1982年	1983年
期 首 在 庫	24,800	57,100	31,600
生 産 量	93,580	56,700	62,900
輸 入 量	29,700	—	—
供 給 量 計	158,080	113,800	94,500
工業原料消費	90,980	82,200	84,100
期 末 在 庫	57,100	31,600	10,400

出所：CFP

表 207 マルバ：1984年生産実績

順位	州 別	面積 1,000ha	生産量 1,000トン	単収 kg/ha
1	パ ラ ー	32.8	28.9	880
2	アマゾーナス	20.0	22.4	1,120
3	マラニョン	2.6	2.4	948
	合 計	55.4	53.7	970

出所：IBGE

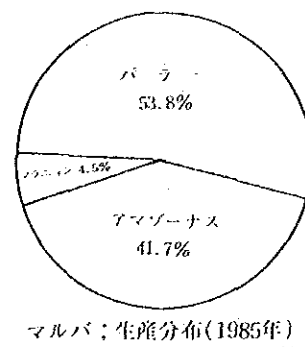
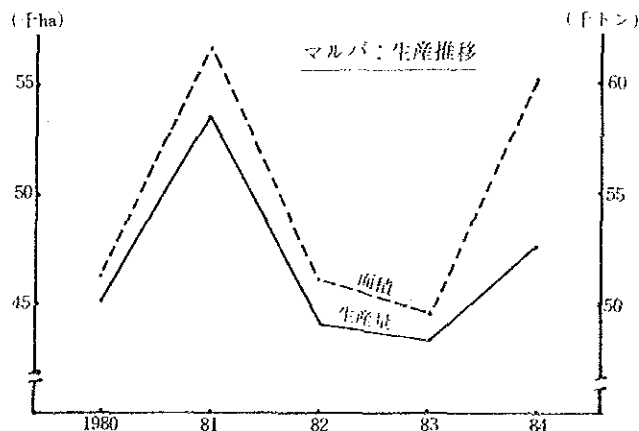


表 208

マルバ：過去5ヶ年間の生産推移

1,000トン

州 別	1980	1981	1982	1983	1984
1, パラー	24.7	29.4	23.2	20.3	28.9
2, アマゾナス	20.3	25.8	19.5	24.7	22.4
3, マラニョン	5.0	3.0	6.1	3.0	2.4
合 計	50.0	58.2	48.8	48.0	53.7
面積 1,000ha	46.0	56.3	46.0	48.0	55.4

出所：IBGE

表 209

マルバ：主要生産地の単収

kg/ha

州 別	1980	1981	1982	1983	1984
パラー	941	850	800	730	880
アマゾナス	1,500	1,499	1,800	1,800	1,120
マラニョン	850	669	1,030	930	948
全国平均	1,095	1,034	1,067	1,072	969

出所：IBGE

表 210

ジュート及びマルバの輸出実績（金額）

1,000ドル

関税番号	品 名	1981	1982	1983	1984
57.03	織 維	111.3	91.8	28.7	654.6
57.06.01.00	ロ ー プ	170.5	183.1	61.4	129.6
57.10	布	3,682.2	10,038.8	6,841.1	10,276.7
63.03.02.00	袋	—	—	—	409.1
	計	3,964.0	10,313.7	6,931.2	11,470.0

出所：CACEX

ジュート及びマルバの輸出は、織維、ロープ、布、袋の形で行なわれており、84年の輸出量は10,227.8トン、輸出金額は11,395.4千ドルであった。

3.3.7 ラミー

表 211

ラミー：1984年生産実績

順位	州 別	面積 1,000ha	生産量 1,000トン	単収 kg/ha
1	パラー	4.9	9.6	2,141
2	バイア	—	—	—
	合 計	4.9	9.6	2,141

出所：IBGE

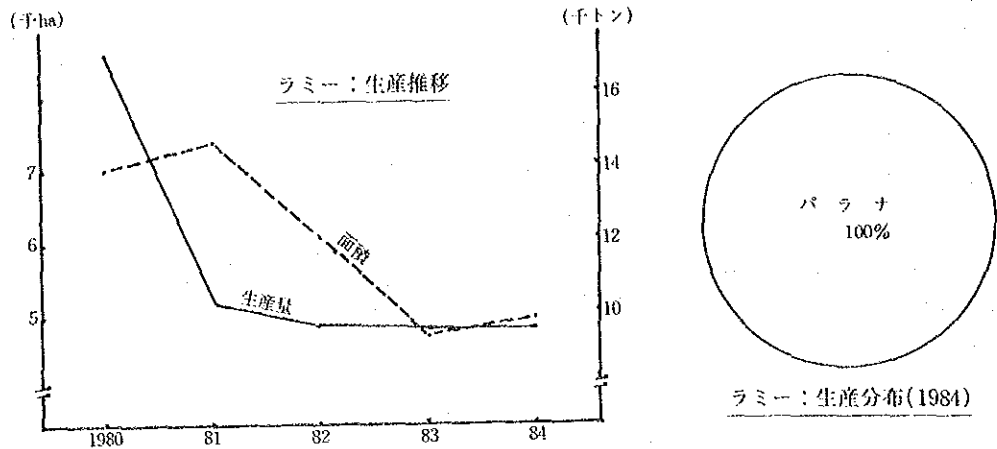


表 212 ラミー：過去5ヶ年間の生産推移 1,000トン

州別	1980	1981	1982	1983	1984
1, パラー	17.0	10.1	9.4	9.6	9.6
2, バイア	0.3	0.1	0.2	—	—
合計	17.3	10.2	9.6	9.6	9.6
面積 1,000ha	7.0	7.3	6.0	4.7	4.9

出所：IBGE

表 213 ラミー：主要生産地の単収 kg/ha

州別	1980	1981	1982	1983	1984
パラー	2,507	1,407	1,629	2,052	2,141
バイア	1,199	1,000	1,200	—	—
全国平均	2,463	1,401	1,618	2,052	2,141

出所：IBGE

3.4 嗜好作物

3.4.1 コーヒー

イ) 生産

表 214 コーヒー：1984年生産実績

順位	州別	面積 1,000ha	生産量 1,000トン	単収 kg/ha
1	サンパウロ	791.5	846.0	1,069
2	ミナス・ジェライス	609.5	695.6	1,141
3	パラナ	425.0	477.3	1,123
4	エスピリト・サント	386.7	436.7	1,129
5	バイア	95.6	62.5	654
6	その他	144.1	160.9	1,116
	合計	2,452.4	2,679.0	1,092

出所：IBGE

1年毎に増産と減産を繰返すコーヒー生産では、前農年が330万トンの大型収穫であったため83/84年の減産はすでに予想されていたが、結局予想通り前年を(-)19%下廻る268万トンの生産に終わった。収穫面積は前年を7.6%増加して245万ヘクタールであったので、単収の大幅な減少(前年の1,450kg/haより1,092kgで(-)25%の減少)によるものであった。州別の生産量をみると81年、82年とサンパウロ州を抜いて首位の座にあったミナス・ジェライス州の生産が大幅に減少(-36%)したため、再びサンパウロ州が最大の生産州となり85万トンの収穫をあげている。

表 215 コーヒー：過去5ヶ年間の生産推移 1,000トン

州 別	1980	1981	1982	1983	1984
1, サンパウロ	824.0	1,218.2	674.4	798.3	846.0
2, ミナス・ジェライス	405.0	1,366.5	479.4	1,084.2	695.6
3, パラナ	331.0	912.4	162.7	609.0	477.3
4, エスピリト・サント	367.2	332.3	346.8	554.5	436.7
5, バイア	78.0	83.3	75.0	92.6	62.5
6, その他	117.2	151.7	115.6	191.9	160.9
合 計	2,122.4	4,064.4	1,853.9	3,305.5	2,679.0

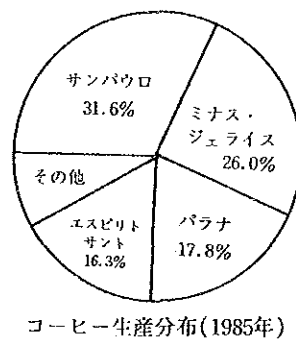
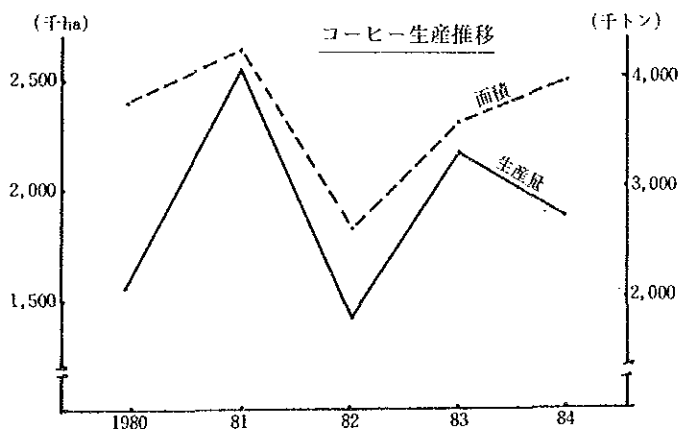
面積 1,000 ha	1980	1981	1982	1983	1984
	2,433.6	2,617.8	1,857.5	2,279.3	2,452.4

出所：IBGE

表 216 コーヒー：主要生産地の単収 kg/ha

州 別	1980	1981	1982	1983	1984
サンパウロ	1,023	1,342	1,213	1,229	1,069
ミナス・ジェライス	875	2,583	999	1,805	1,141
パラナ	520	1,327	537	1,387	1,123
エスピリト・サント	1,073	1,112	1,058	1,435	1,129
バイア	879	1,443	1,003	1,099	654
全 国 平 均	872	1,553	998	1,450	1,092

出所：IBGE



サンパウロ州における収穫は乾燥のため早目に行なわれており、7月の始めには約60%の収穫が終了した。収穫された実は全般に小さかったが品質は前年をしのぐものであった。また収穫期に入ると降雨があったため、捨てられたくずもののコーヒー豆が伝染源となってサビ病や他の病気が発生し、ネマトードの蔓延も憂慮された。

ロ) 国際市場とブラジルの輸出

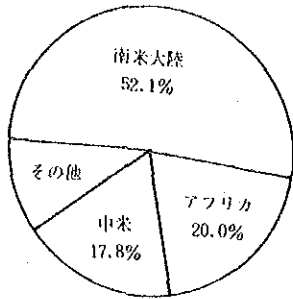
米国農務省が推定したコーヒーの世界生産量は83/84年度で90,351千俵(60kg)で、大陸別には南米大陸が世界生産の半分以上を占めて大きく、アフリカ、中米がこれに続いている。また国別ではブラジルが33.2%、コロンビア14.4%、インドネシア5.7%、メキシコ5.0%の順位である。

また84年6月に同じく米国農務省が行なった次期農年の生産予想は92.5百万俵で、この中ブラジルとコロンビアのシェアを29.2%及び13.3%としており、ブラジルの生産量を27百万俵と推定している。但しブラジル・コーヒー院は25.4百万俵と発表しており可成りの差異がみられる。いずれにしてもブラジルの生産量は世界生産の30%を前後する規模である。

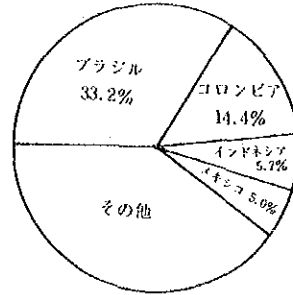
表 217 コーヒー：主要生産国 1,000俵(60kg)

区 分	81 / 82	82 / 83	83 / 84	83 / 82 %	84 / 83 %
南米大陸					
ブラジル	33,000	17,750	30,000	(-) 46.2	69.0
コロンビア	14,342	13,300	13,000	(-) 7.3	(-) 2.3
その他	4,389	4,142	4,063	(-) 5.6	(-) 1.9
計	51,731	35,192	47,063	(-) 32.0	33.7
アフリカ					
ウガンダ	2,885	3,200	3,400	10.9	6.2
象牙海岸	4,160	4,510	1,420	8.4	(-) 68.5
その他	13,168	12,963	13,208	(-) 1.6	1.9
計	20,213	20,673	18,028	2.3	(-) 12.8
中 米					
メキシコ	3,900	4,530	4,530	16.1	-
エル・サルバドル	2,886	3,100	2,800	7.4	(-) 9.7
グアテマラ	2,653	2,530	2,340	(-) 4.6	(-) 7.8
その他	6,057	7,902	6,456	30.5	(-) 18.3
計	15,496	18,062	16,126	16.6	(-) 10.7
アジア					
インドネシア	5,785	4,750	5,135	(-) 17.9	8.1
その他	4,143	3,759	3,045	(-) 9.3	(-) 19.0
計	9,928	8,509	8,180	(-) 14.3	(-) 3.9
大洋州					
ニュージーランド	680	891	950	31.0	6.6
その他	10	6	4	(-) 40.0	33.3
計	690	897	954	30.0	6.3
その他	27,767	28,772	26,776	3.6	(-) 6.9
世界計	98,065	83,333	90,351	15.0	8.4

出所：UNITED STATES DEPARTMENT OF AGRICULTURE (U. S. D. A.)



コーヒー：世界の生産分布(1984)



コーヒー：世界の生産国(1984)

世界の生産量より生産国の国内消費量を差引いた輸出可能量は63.9百万俵と推定されている。その95%がコーヒー(豆)、残りがインスタント・コーヒーによる輸出である。

世界の在庫量は年々増加しており83/84農年末の在庫は46.8百万俵と推定されている。在庫量の増加は78/89農年以降継続しているが、国際コーヒー協定が効果的に機能しているため、他の国際商品にみられるような値下りはみえていない。逆に84年度は年間を通じて次の理由による高値が支配した。

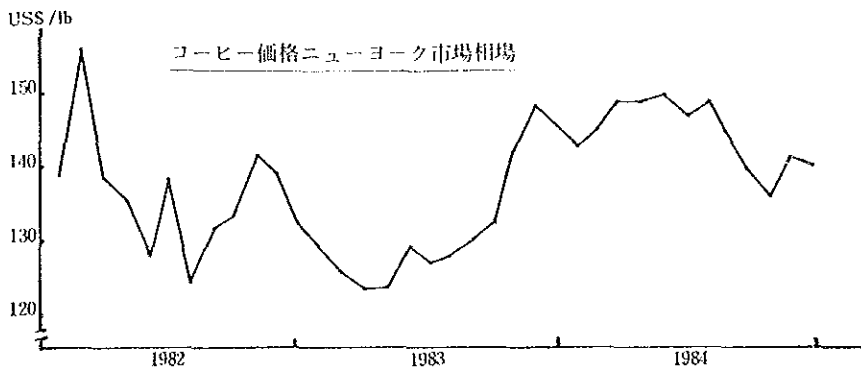
- 全般的に品質が低下し上級品の供給量が減少した。中米を産地とするスワーベ種コーヒーの供給が、ニカラグアの内乱、グアテマラの政情不安により減少しており近い将来回復する見通しを持っていない。
- アフリカの輸出国に減産がみられた。
- 世界最大の生産国ブラジルの減産によるロブスタ種コーヒー供給量の減少。

このような価格動向のため国際コーヒー協定は、各生産国の輸出割当てを増加し価格の安定にあたった。

コーヒーの国際市場をコントロールする国際コーヒー協定(OIC)の機構については過去数回にわたって解説したので省略するが、84年の動きとしては次の事項が注記される。

同協定は世界生産の99%を占める47の生産国と、世界消費の90%を占める26の消費国をメンバーとしている。

コーヒーの国際間取引に関する協定は、各農年(10月～9月)について生産者国側と消費国側の協議によって生産国側の輸出割当量を定めることを主な目的としている。前年の協定は83年9月に行なわれ、これが83年10月より84年9月までの間の国際間取引量を規制したものであったが、同協定によると生産国の輸出割当量を56.2百万俵とし、国際市場価格がボンド当り最低120セント、最高140セントをそれぞれ上下に越す場合、割当量を変更することも決定された。また協定に加盟していない国へ対する協定価格以下での輸出については、その規制(罰則)を別途定めることとした。



84年10月に開催された84/85コーヒー農年(84年10月より85年9月まで)に関する協定では、84年の価格上昇を抑える措置として4回(12月、2月及び5月2回)にわたって輸出割当量を拡大することにより供給量を増やすこととし、総量で83/84年の割当量を7%増加した60.2百万俵とした。この割当量の改訂によりブラジルへの割当ては17.3百万俵となった。この措置により年度後半の価格が下降した。

1984年におけるブラジルのコーヒー輸出は、このような世界市場の高値を利用してコーヒー(豆)で2,564.1百万ドル、インスタント・コーヒーで286.7百万ドル、計2,850.8百万ドルの輸出額に達した。

下のグラフにみられる通り、ブラジルのコーヒー輸出は81年に下降したあと徐々に増加を続けており、84年には80年のレベルに戻っている。

ブラジルのコーヒー輸出は1975年の大霜害のあと減少し、従来輸出先市場を他の生産国に譲っていたが、その後の生産回復により輸出市場の失地回復を図る必要に迫られ、IBC(ブラジルコーヒー院)による“輸出契約”(Contrato de Exportação)がその戦術として採用された。

正式には供給基準契約と呼ばれるこの制度はブラジル・コーヒーの輸出に際し、IBCと輸入業者との間に締結される協定を指すもので、各輸出先市場別に基準を設け、ブラジルの販売条件を各市場の特性に合せ1年間の契約期間内における輸出货量を定めることによって、ブラジル側にとっては毎月定量の輸出計画を可能としながら、輸入側にとっては安定した供給態勢を作ることを目的としている。

また輸入側の価格上のリスクに対しては、中米のスワーベ種とアフリカのロブスタ種の相性を考慮に入れた価格の調整を行なうことにより安定した価格を提供することなどが定められ、また不時の事態に対する保証条項も設定されている。

この輸出契約は1980年より実施されたが、当時の国際市場では米国の金融引締めによる国際金利の上昇のため、

表 218 コーヒー：輸出実績

年度	重 量 1,000トン			金 額 100万ドル		
	コーヒー(豆)	インスタント・コーヒー	計	コーヒー(豆)	インスタント・コーヒー	計
1980	784	40	824	2,486	285	2,771
81	825	44	869	1,517	238	1,755
82	888	45	933	1,858	251	2,109
83	940	43	983	2,095	247	2,342
84	1,032	45	1,077	2,564	287	2,851

出所：CACEX

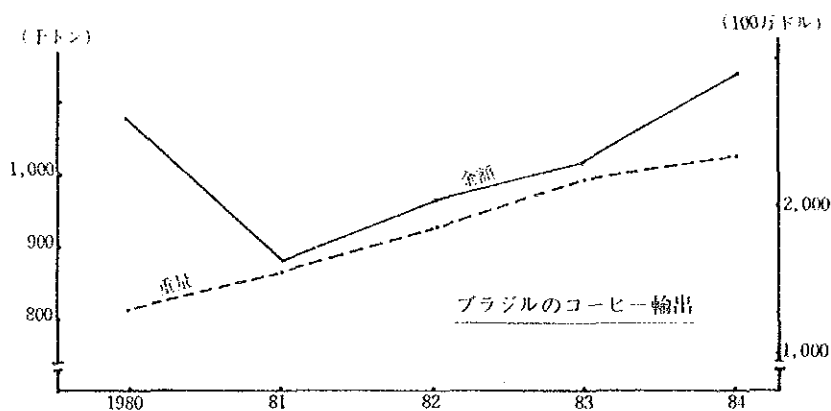


表 219

コーヒー(豆)輸出実績 1984年

輸出先国	重量 1,000トン	金額 100万ドル
英 国	239.0	647.8
西 独	102.6	260.5
イ タ リ ア	93.1	251.2
日 本	66.7	175.1
フ ラ ン ス	66.1	172.6
オ ラ ン ダ	48.7	127.2
ス エ ー デ ン	46.6	124.0
ス ペ イ ン	35.0	92.8
ベ ル ギ ー	29.1	77.0
デ ン マ ー ク	28.6	75.5
ノ ル ウ ェ ー	25.3	67.3
ス イ ス	24.8	65.0
オ ー ス ト リ ア	25.3	64.4
フ ィ ン ラ ン ド	14.4	39.4
カ ナ ダ	13.6	37.3
英 国	12.8	32.5
ア ルゼ ン チ ン	19.2	31.7
ハ ン ガ リ ー	20.9	27.9
ア ルゼ リ ア	17.9	26.8
そ の 他	102.2	168.1
計	1,031.9	2,564.1

出所：CACEX

09.01.01.00

表 220

インスタント・コーヒー輸出実績 1984年

輸出先国	重量 1,000kg	金額 100万ドル
米 国	18.1	114.8
英 国	10.5	67.1
西 独	3.4	24.2
オ ー ス ト ラ リ ア	3.3	18.9
日 本	2.3	14.3
カ ナ ダ	1.7	11.3
オ ラ ン ダ	1.2	7.9
ル ー マ ニ ア	0.9	4.3
ハ ン ガ リ ー	0.7	3.6
ソ 連	0.4	3.3
フ ラ ン ス	0.3	2.1
ベ ル ギ ー	0.3	1.9
台 湾	0.2	1.7
そ の 他	1.8	11.3
計	45.1	286.7

出所：CACEX

21.02.01.01

農産物のストックに高金利の資金を投下するのを回避する状況下であり、また当時よりその傾向を強めてきたドル高により、ドルに平行するブラジル製品の輸出競争力低下という悪条件の中で、輸出を伸ばすためには極めて積極的な販売戦略を必要としていただけに、ここ数年間におけるコーヒーの販売政策は成功裡に進行し、79年度の12百万俵の輸出レベルを現在の17百万俵台に拡大し得たものである。

世界の主要市場におけるブラジル・コーヒーの輸入比率は、84年の場合ノルウェー(63%)、スウェーデン(52%)、オーストリア(49%)等が高く、ブラジル・コーヒーをより多く輸入している。最大の市場である米国の場合は中米よりの輸入が多く、ブラジル・コーヒーは総輸入量の22%、コロンビア産が12%である。又西独の場合はコ

表 221 コーヒー：世界の主要輸入国とブラジル産コーヒーの輸入比率

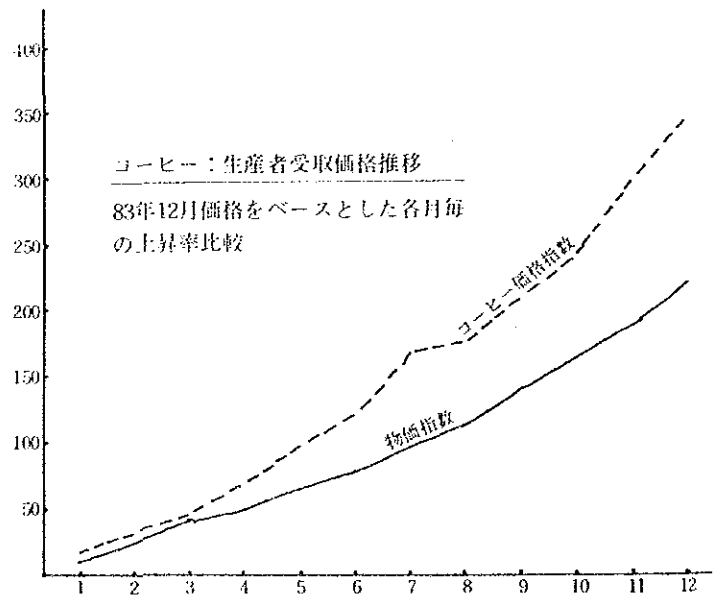
輸入国	1984年の輸入量 俵(60kg)	対前年比 %	輸入量に占めたブラジル製品の割合 %				
			1980	1981	1982	1983	1984
米 国	17,733.5	7.8	19	20	19	21	22
西 独	7,110.0	(-) 4.0	7	9	15	15	16
フ ラ ンス	4,682.8	(-) 11.3	15	17	19	20	23
イ タ リ ア	3,718.5	(-) 9.4	30	36	36	36	39
日 本	3,734.6	9.6	23	24	26	31	30
オ ラ ン ダ	2,388.6	4.1	10	17	24	28	32
ス エ ー デ ン	1,529.6	(-) 1.9	43	50	54	54	52
カ ナ ダ	1,493.3	7.9	11	15	23	24	19
フ ィ ン ラ ン ド	1,141.1	8.6	17	22	28	27	22
ス イ ス	977.5	(-) 1.9	19	23	22	25	26
オ ー ス ト リ ア	867.4	(-) 15.9	22	26	38	46	49
ノ ル ウ ェ ー	678.7	(-) 1.1	51	56	67	65	63

出所：“COMPLETE COFFEE COVERAGE”

表 222 コーヒー：生産者受取価格 Cr/60kg

月別	1983	1984
1	22,045	56,649
2	22,714	62,218
3	25,603	66,697
4	27,041	79,113
5	26,781	90,550
6	28,306	106,117
7	29,029	125,936
8	29,800	130,631
9	31,956	146,868
10	40,444	163,000
11	41,413	189,560
12	47,502	215,030

出所：IEA サンパウロ州



ロシアよりの輸入が32%と大きく、ブラジル・コーヒーの輸入比率は16%となっている。日本の場合は84年に輸入した373万俵の中30%がブラジル産品、17%がインドネシア産であった。

ハ) 国内市場及び価格

国内消費量は770万俵と推定されている。84年4月の国内ストックはIBCの在庫740万俵、生産者の手持在庫1,010万俵で合計1,750万俵となり、85年へのキャリー・オーバーは約1,800万俵となる見込みである。

国内市場における生産者受取価格は年間352%の上昇でインフレ率を上回る価格であり、国際価格の高値に応じた価格傾向を示した。

コーヒーの輸出に際して課される為替没収金は年頭1俵あたり99.50ドルと定められていたが、2月には93.00ドル、6月には78ドルに変更されている。この前後の措置は輸出促進のための措置としてとられたもので時宜を得たものとされている。

3.4.2 ココア

イ) 生産

ココアの収穫は雨期収穫と乾期収穫に分けられ、雨期収穫を本収穫 (Safra Principal)、乾期の分をテンポロン (Temporão) と呼んでいる。雨期収穫は10月から4月の間、又乾期収穫は5月から9月にかけて行なわれる。その収量は年によって異なるが、ほぼ同等である。

国内の生産地帯は東北地方のバイア州に集中しており、同州南部海岸地方に全国生産の90%を占める一大生産地帯がある。このように集中度がはげしいため、その他の生産地帯の生産量は小さいが、最近の傾向として新し

表 223 ココア：1984年生産実績

順位	州 別	面積 1,000ha	生産量 1,000トン	単収 kg/ha
1	バ イ ア	525.6	310.1	590
2	バ ラ ー	27.8	12.0	431
3	エスピリト・サント	20.5	11.1	543
4	ロ ン ド ニ ア	31.1	10.8	347
5	そ の 他	3.8	1.4	368
	合 計	608.8	345.4	567

出所：IBGE

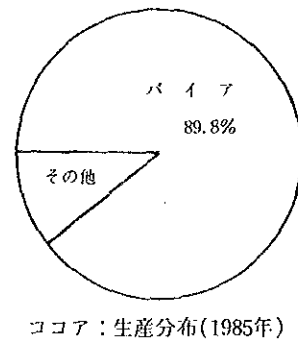
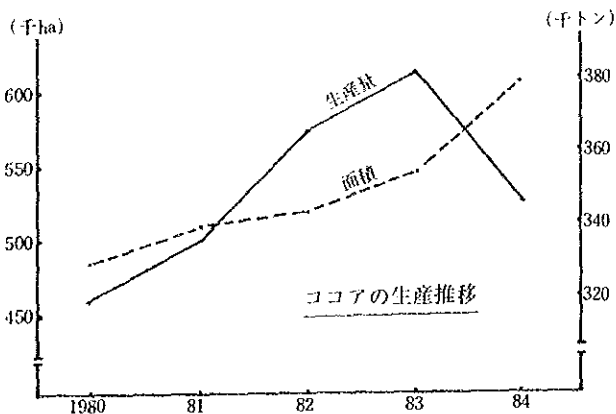


表 224 ココア：過去5ヶ年間の生産推移 1,000トン

州 別	1980	1981	1982	1983	1984
1, バ イ ア	302.5	314.8	336.9	347.5	310.1
2, バ ラ ー	2.6	4.7	7.1	9.5	12.0
3, エスピリト・サント	10.8	11.2	11.7	11.0	11.1
4, ロ ン ド ニ ア	2.4	4.0	6.7	10.8	10.8
5, そ の 他	0.8	0.9	1.1	1.4	1.4
合 計	319.1	335.6	363.5	380.2	345.4

面積 1,000ha	482.5	505.0	516.7	544.3	608.8
------------	-------	-------	-------	-------	-------

出所：IBGE

表 225 ココア：主要生産地の単収 kg/ha

州 別	1980	1981	1982	1983	1984
バ イ ア	690	693	734	725	590
バ ラ ー	187	255	481	533	431
エスピリト・サント	508	584	520	566	543
ロ ン ド ニ ア	361	391	383	462	347
全 国 平 均	661	665	704	698	567

出所：IBGE

い農業前線地帯としての Rondônia 州における生産増加が注目される。

ココア生産に従事している生産者数は約26千人と推定されている。ココア生産が東北地方の重要な産業であり、外貨獲得源であると同時に多くの家族がココア栽培によって生活しているところから、70年代の始めに CEPLAC (ココア栽培復旧委員会) が現地に設置され、CEPEC (ココア調査センター) を通じて栽培や販売の指導に当たっている。

70年代に長期にわたって国際価格の低迷に打撃を受けたココア栽培も、82年頃よりようやく相場が復活してきたため久し振りの活気をみており、最近生産は上昇傾向を辿ってきた。しかし83/84年に収穫面積の増加にもかかわらず、生産地帯のバイア州がひどい乾燥に見舞われたため乾期収穫ものの成育が阻害され、これに加えてココア栽培ではもっともおそれられている Podridão Pardo (褐色腐敗病) の発生があり、当初250万俵(60kg)と予想されていた乾期収穫が180万俵に減少したため全国生産を落した。

ロ) 国際市場とブラジルの輸出

ココアの世界生産はアフリカの象牙海岸、ガーナ、ナイジェリア、カメルーンと南米大陸を代表するブラジルの5ヶ国に集中しており、この5ヶ国で約150万トンと推定されている世界生産の77%を占める。残りの25%は、その他のアフリカ及び南米諸国、アジア及び大洋州、中米の一部によって生産されている。大陸別ではアフリカ大陸の比重が大きく、83/84農年では世界生産の57%がこの大陸に集中し、南米大陸の27%を大きく引離しており、又国別では象牙海岸とブラジルの生産が大きく、それぞれ世界生産の27%及び20%を占める。

これらの生産国に共通した現象は、ココアの生産が工業先進国向けの輸出を目標として行なわれていることで、生産国における消費は少ない。従来その輸出形態は原料(豆)の状態で行なわれ、これを輸入する英国、オランダ

ダ、スイス等において工業加工される形をとっていた。このように原料を輸入し加工する方法は、生産国の加工技術が低く、最終製品(チョコレート)の風味を落す問題があったためであり、60~64年の5ヶ年間には生産国で加工される量は生産量の15%にすぎないものであった。しかしながら最近にいたってこの傾向は次第に変化しており、82/83年には生産国の加工率が31%へと増加している。このような変化は生産国が次第に工業化をすすめて付加価値の輸出を図ってきたこと、また輸入国側が最近の国際金利高の中で原料の輸入、ストックにかかわる金融費用を省き、その分を生産国側に負担させようとする傾向が強くなっているためである。

ココアの加工品としてはリコール(ココア豆をつぶし練りチョコレートに似た半製品)、ココア・バター(リコールを圧搾して脂肪分を分離したもの)、粉末バター(脂肪分を分離して残りを粉末にしたもの)がある。粉末バターがチョコレートの製造原料として用いられる。

ココアの場合もコーヒーの場合と同様に国際ココア協定が結成されている。この協定はUNCTAD(貿易及び開

表 226 ココア(豆):世界生産 1,000トン

国 別	80/81	81/82	82/83	83/84
アフリカ大陸				
象 牙 海 岸	412.0	456.0	360.4	415.0
ガ ナ	258.0	225.0	178.0	158.0
ナイジェリア	155.0	182.0	156.0	125.0
ト ゴ	16.0	10.9	9.8	15.0
そ の 他	162.0	161.2	1 146.2	148.0
小 計	1,003.0	1,035.1	850.4	861.0
南米大陸				
ブラジル	351.0	315.0	339.0	300.0
エクアドール	85.0	87.5	55.0	50.0
コロンビア	36.0	38.5	39.8	40.5
ボリビア	3.0	3.0	2.5	2.5
そ の 他	23.4	24.4	24.9	21.8
小 計	498.4	468.4	461.2	415.1
アジア及び大洋州				
マレー	49.1	61.0	69.0	91.0
ニューギニア、バプア	27.0	29.3	28.0	30.0
インドネシア	13.1	15.0	15.0	16.0
インド	2.0	4.0	4.5	5.0
そ の 他	8.0	9.0	9.7	9.6
小 計	99.1	118.3	126.2	151.8
中北米				
小 計	84.9	102.8	103.7	95.9
世界計	1,685.4	1,724.6	1,541.5	1,523.8

出所: USDA

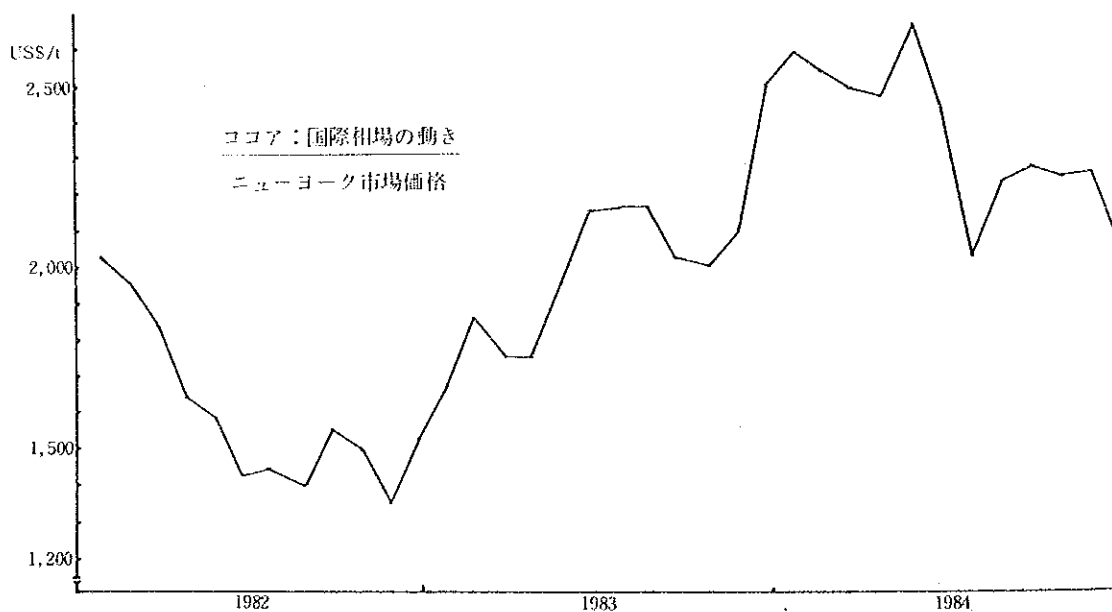
発のための国連委員会)の中で次の目的のもとに設置された。

- a) 極度の価格変動を避ける。
- b) 需給関係の均衡を図り得ないために招く困難を最少限度に止める。
- c) 生産国がココアの輸出によって得る外貨によって国内の経済開発を促進し、同時に消費国に対しては適正な価格による豊富な供給を図る。

このような趣旨のもとに結成された国際ココア協定も実際に機能を開始するまでには、1963年より72年まで10年の歳月を経ており、72年10月ようやく最初の協定として重量ポンドあたり最低価格と最高価格、及び生産国の輸出割当と価格調整・在庫等が定められ、その協定の実施を管理するため国際ココア機構 (ICCO) が設立され

表 227 ココア：ニューヨーク取引価格平均 US\$/t

月別	1982	83	84
1	2,124.00	1,671.42	2,576.88
2	1,948.85	1,836.90	2,504.65
3	1,825.77	1,754.64	2,486.00
4	1,649.60	1,741.00	2,440.00
5	1,589.96	1,954.44	2,639.42
6	1,410.68	2,149.96	2,402.45
7	1,435.84	2,164.21	2,061.26
8	1,391.72	2,164.84	2,207.44
9	1,551.00	2,040.82	2,266.00
10	1,496.65	1,994.43	2,220.18
11	1,355.28	2,099.28	2,281.92
12	1,510.26	2,483.17	2,078.62



た。現在第3回目に入っている国際ココア協定も、世界最大の生産国象牙海岸と最大の消費国米国がこれに加盟していないため、国際コーヒー協定にみられるような効果はあげていない。

ココアの国際相場は1984年の前半過去5ヶ年間に例をみない上昇を示し、ニューヨーク市場平均価格は5月に

表 228 ココア(豆)及び主要加工品の輸出推移

年 度	重 量 1,000トン				金 額 100万ドル			
	ココア(豆)	リコール	バター	計	ココア(豆)	リコール	バター	計
1979	157	68	21	246	487	271	119	877
80	124	68	27	219	292	219	158	669
81	125	73	29	227	242	195	145	582
82	144	37	30	211	216	79	120	415
83	153	52	32	237	284	119	129	532
84	107	69	36	212	249	194	168	611

出所：CACEX

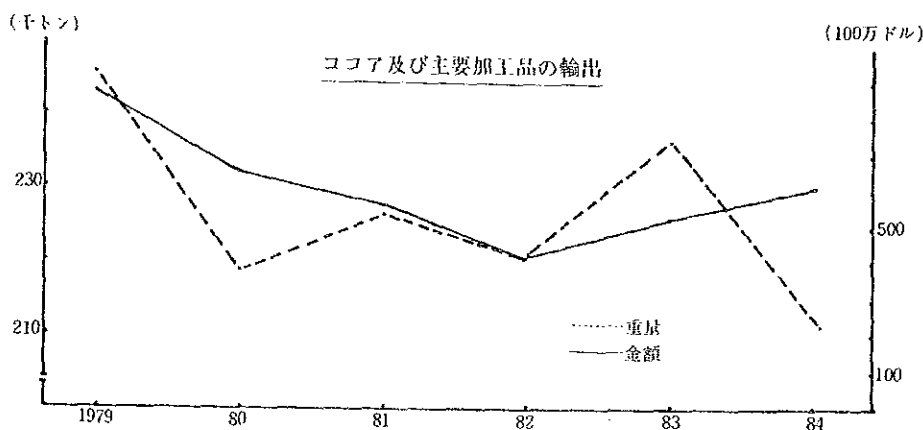


表 229 ココア(豆)輸出実績 1984年

輸 出 先 国	重量 1,000トン	金額 100万ドル
ソ 連	28.0	64.7
米 国	23.4	53.6
ス ペ イ ン	11.7	26.4
ポ ー ラ ン ド	11.2	26.0
ハ ン ガ リ ー	9.8	23.5
オ ラ ン ダ	4.5	10.3
英 国	3.7	8.1
ア ル ゼ ン チ ン	2.8	8.1
日 本	2.9	6.6
そ の 他	9.2	21.6
計	107.2	248.9

出所：CACEX

18.01.01.00

表 230 ココア・リコール輸出実績 1984年

輸 出 先 国	重量 1,000トン	金額 100万ドル
ソ 連	27.0	76.3
米 国	22.9	64.6
ア ル ゼ ン チ ン	5.5	18.1
フ ラ ン ス	2.6	8.2
東 独	1.9	5.8
ポ ル ト ガ ル	1.1	3.2
南アフリカ連邦	1.1	3.0
そ の 他	4.7	14.3
計	66.8	193.5

出所：CACEX

18.03.01.00

トンあたり2,639ドルの最高値を記録した。その後7月には2,061ドルに落ちるが8月よりはややもち直し2,200ドル台で11月まで続いている。

年の前半にみられた高値は、アフリカの象牙海岸が降雨量の不足と風害の被害を受け、またブラジルではバイア州の生産地帯が乾燥の被害を受けたことのほか、象牙海岸では生産地よりの輸送に問題があり船積みが遅れたことなどが重なったためである。

その後5月にみられた再度の価格上昇は、工業原料需要に対する世界の供給減少が予想され買付けが集中したための現象であった。しかしこの動きもブラジル及びアフルカの生産が回復する見通しがたったことや、

そのために値が下向きに変わったことが一部の投資家達を驚かし、ココアへの投資を他の Commodities に切り換えさせたため、短期間の動きに止まり価格は再び安定した。

ブラジルのココア豆及び加工品の輸出は、年の前半を支配した高い国際相場から当初8億ドルの輸出が期待されていたが、後半の値下りにより結局6億ドルの輸出に止まった。

最近5ヶ年間の輸出推移をみると79年に9億ドル近い輸出に達したあと下降し、82年には79年の半額程度に落ちたが、83年にはやや復活、84年にこれを更に増加して過去の実績に近づいている形である。

3.4.3 ピメンタ

表 232

ピメンタ：1984年生産実績

順位	州 別	面積 1,000ha	重量 1,000トン	単収 kg/ha
1	パ ラ -	17.4	40.1	2,261
2	エスピリト・サント	0.8	2.1	2,650
3	バ イ ア	0.7	0.5	746
4	マ ラ ニ ョ ン	0.2	0.3	1,541
5	そ の 他	1.1	0.5	454
合 計		20.2	43.5	2,157

出所：IBGE

表 233

ピメンタ：過去5ヶ年間生産推移

1,000トン

州 別	1980	1981	1982	1983	1984
1 パ ラ -	58.3	35.3	48.0	29.3	40.1
2 エスピリト・サント	0.5	0.5	1.2	1.4	2.1
3 バ イ ア	2.4	3.4	0.6	0.5	0.5
4 そ の 他	1.4	1.2	1.3	1.2	0.8
合 計	62.6	40.4	51.1	32.4	43.5
面積 1,000ha	23.0	23.0	22.5	20.8	20.2

出所：IBGE

表 231 ココア油輸出実績 1984年

輸 出 先 国	重量 1,000トン	金額 100万ドル
米 国	18.4	84.7
オ ラ ン ダ	7.5	35.5
ソ 連	3.2	15.2
日 本	2.7	13.1
カ ナ ダ	1.1	5.3
東 独	1.1	5.0
そ の 他	1.8	9.0
計	35.8	167.8

出所：CACEX

18.04.00.00

表 234

ピメンタ：主要生産地の単収

kg/ha

州 別	1980	1981	1982	1983	1984
パ ラ ー	3,055	1,905	2,411	1,609	2,261
エスピリト・サント	2,131	2,100	2,389	2,105	2,650
バ イ ア	1,194	1,194	740	769	746
全 国 平 均	2,722	1,756	2,271	1,558	2,153

出所：IBGE

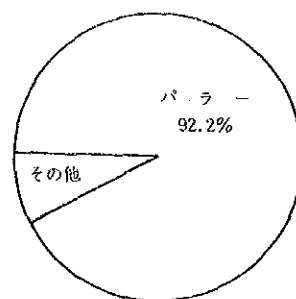
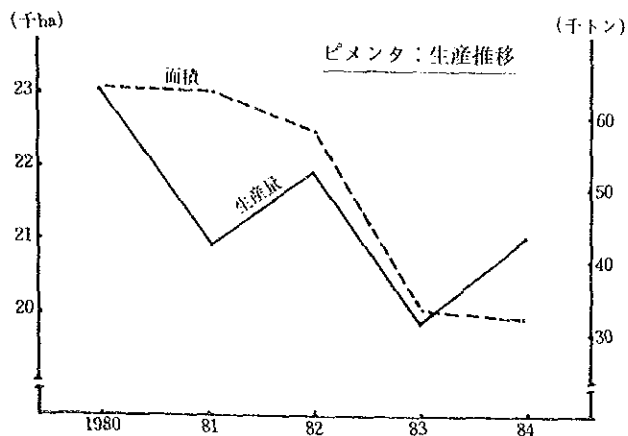


表 235 ピメンタ(黒)輸出実績 1984年

輸 出 先 国	重量 1,000トン	金額 100万ドル
米 国	13.6	25.6
西 独	3.7	6.7
フ ラ ン ス	3.3	5.5
モ ロ ッ コ	2.4	4.3
オ ラ ン ダ	2.0	3.5
東 独	1.6	3.3
メ キ シ コ	0.8	1.8
ベ ル ー	0.8	1.5
ハンガリー	0.6	1.2
イ タ リ ー	0.6	1.2
アルジェリア	0.6	1.0
そ の 他	2.6	5.0
計	32.6	60.6

出所：CACEX

09.04.01.01

表 236 ピメンタ(白)輸出実績 1984年

輸 出 先 国	重量 1,000トン	金額 100万ドル
アルゼンチン	1.1	3.8
西 独	1.0	3.0
米 国	0.6	1.9
フ ラ ン ス	0.5	1.6
そ の 他	0.7	1.9
計	3.9	12.2

出所：CACEX

09.04.01.02

3.5 果 実

3.5.1 オレンジ

イ) 生 産

1984年のオレンジ生産は収穫面積では前年とほぼ同規模で大きな変化はなかったが、生産量の方は前年を11%上廻る624億個に達し、史上始めて600億個の線を越えた。この生産増加の決め手となった単収の増加も、又始めて1haあたり10万個の線を越えている。単収の増加は生産者収益の向上による投資能力の増加によるものであり国際市場の好況を反映した。生産管理面への投資増大が生産資材の使用量を増加させ、オレンジ園の管理を向上させた結果によるものである。

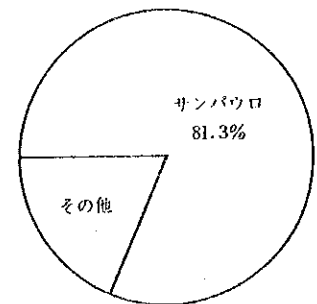
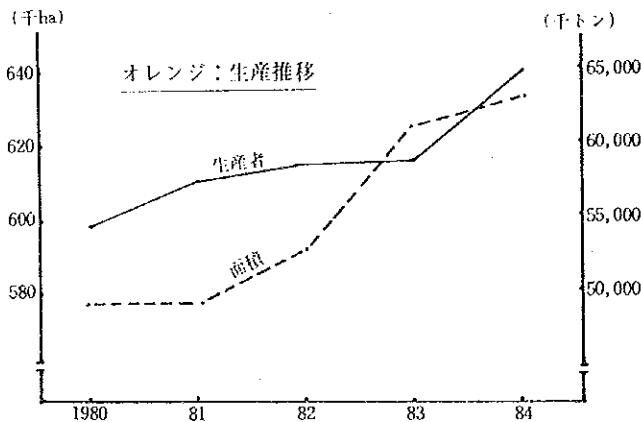
国内の生産地帯はジュース工場が集中するサンパウロ州に集中し、84年には全国生産量の81%を占めた。この他東北地方を代表するセルジッペ州、南東地方でサンパウロ州に次ぐリオ・デ・ジャネイロ州及びミナス・ジェライス州、南部地方を代表するリオ・グランデ・ド・スール州の生産順位は変わっていない。

84年度に生産段階に入っているオレンジ樹は約94百万本で、次年度から生産に入るものが18百万本ある。またサンパウロ州内では最近のオレンジ景気にあおられてサン・ジョゼ・ド・リオ・プレット地方で170万本、オリ

表 237 オレンジ：1984年生産実績

順位	州 別	面 積 1,000ha	生産量 1,000トン	単 収 kg/ha
1	サンパウロ	474.2	52,518.0	110,746
2	セルジッペ	27.1	2,656.1	97,829
3	リオ・デ・ジャネイロ	36.0	2,325.3	64,692
4	ミナス・ジェライス	31.3	2,048.8	65,807
5	リオ・グランデ・ド・スール	20.1	1,737.7	82,247
6	バイア	14.7	999.6	68,000
7	マラニョン	3.2	371.4	116,929
8	パラナ	4.3	352.0	82,474
9	ゴヤス	3.1	210.3	68,071
10	その他	18.0	1,393.8	77,433
合 計		632.0	64,613.0	102,255

出所：IBGE



る分は168百万箱、1箱の重量が40.8kgとして総重量は685千トンである。

ロ) 国際市場とブラジルの輸出

84年度のブラジル農業界でオレンジ部門ほど活気を呈した部門はない。これは世界最大の生産地である米国フロリダ州のオレンジ園が80年代に入ってより度重なる霜害を受け、84年にはカンクロ(潰瘍病)の発生まで加って、その生産量を落したばかりでなく品質も低下し、ジュース歩留りを落したため絶対量が不足し、ブラジル産品に需要が集中したためである。フロリダ州における最近の霜害をみると、1978年を皮切りに81、82、84年と大小の差こそあれ毎年発生しており、84年には当初の生産予想を28%減少させることとなった。この量は濃縮ジュース5.5百万ガロンに相当する量であり、小売価格にして6億ドルに達する大きな被害であった。

このフロリダ州における被害は直ちにニューヨークの市場相場に影響し、83年10月頃より上昇を始めた価格は84年に入ってより暴騰し、5月にそのピークに達した。

表 240

濃縮オレンジ・ジュース
ニューヨーク相場 US\$ / lb

月別	1982	83	84
1	144.36	112.77	151.44
2	133.40	107.24	161.04
3	120.21	111.07	166.60
4	115.15	114.40	179.10
5	118.95	114.87	184.60
6	115.77	117.02	178.93
7	125.77	117.00	172.73
8	129.12	118.63	171.50
9	127.95	118.17	
10	125.23	123.59	
11	124.96	123.67	
12	124.39	126.07	

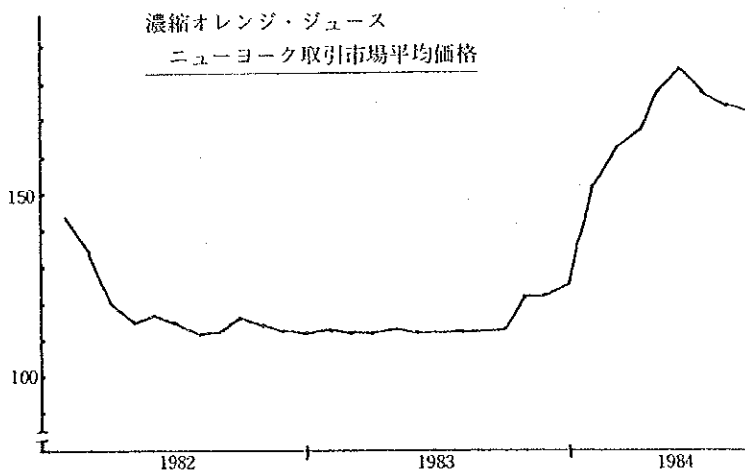
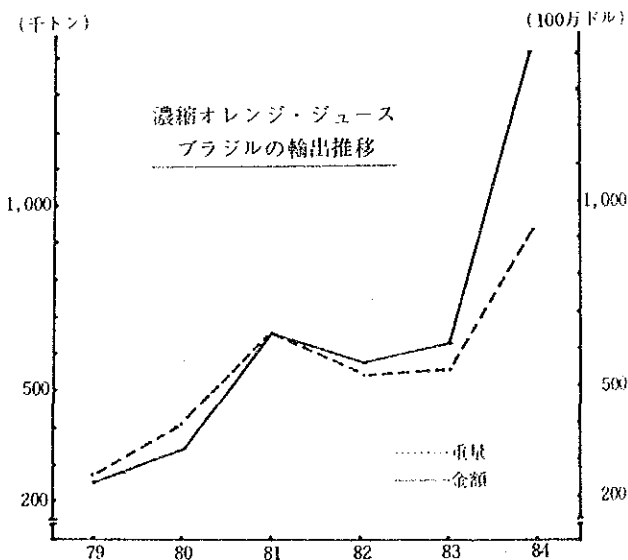


表 241

オレンジ濃縮ジュース:ブラジルの輸出

年度	重量 1,000トン	金額 100万ドル
1979	292.2	281.4
80	401.0	338.7
81	639.1	659.2
82	521.1	573.4
83	553.1	608.0
84	904.8	1,414.5

※出所: CACEX



この様を国際市場とくに米国市場の需要に応じてブラジルの輸出は伸び、国際相場の高騰を利用してそれまで滞貨されて来たストックも大量に放出されたため、84年度におけるブラジルの濃縮ジュース輸出は過去に例をみない輸出記録を残すこととなった。

ここで80年代に入って以降のオレンジ・ジュースの輸出を振り返ってみると次の状況にあった。

- a) 1980年、81年、82年及び84年の4ケ年間、米国フロリダ州の霜害が影響して大量の輸出が行なわれた。唯一の例外は1983年で同年には米国の不作は発生していない。
- b) 79年より81年にかけて増加を続けた濃縮オレンジ・ジュースの輸出は82年に減少し83年も停滞した。この輸出減少は米国に次ぐ輸出先市場であるEC圏の輸入減少によっている。1982年にみられたヨーロッパの輸入減少は、
 - 1) 世界のストックが高いレベルにありEC圏内にも相当のストックがあった。
 - 2) ドル高によりこれに平行するクルゼイロも過大評価となり、ヨーロッパ市場におけるブラジル製品の競争力を弱めたことによっている。
- c) 輸出先市場は1982年まで米国が50%以上を占めていた。しかし1983年にはフロリダ州に霜害がなかったため、その生産は前年比13%増加して国内供給態勢を高めた。米国のブラジル濃縮オレンジ・ジュース輸入は82年の57.2%のシェアより83年には46.4%に落ち、EC圏の輸入比率が伸びた。

表 242

オレンジ：濃縮ジュース輸出実績

1984年

輸 出 先 国	重 量 1,000トン	金 額 100万ドル
米 国	568.1	901.4
オ ラ ン ダ	114.6	174.7
ベ ル ギ ー	85.1	130.1
カ ナ ダ	47.5	76.5
西 独	16.7	26.0
英 国	13.7	20.2
オ ー ス ト ラ リ ア	12.2	19.9
イ ス ラ エ ル	13.1	18.1
ス イ ス	10.9	15.7
日 本	3.6	5.9
東 独	4.1	5.4
ス ペ イ ン	2.8	3.2
フ ィ ン ラ ン ド	2.3	3.1
ノ ー ル ウ ェ ー	1.9	2.6
ニ ュ ー ジ ー ラ ン ド	1.2	2.0
南 ア フ リ カ 連 邦	1.5	1.9
デ ン マ ー ク	1.1	1.6
韓 国	1.0	1.4
そ の 他	3.4	513.1
計	904.8	1,414.5

出所：CACEX

20.07.01.05

また、1983年には本来この市場への供給を行ってきたイタリーとイスラエルのオレンジ生産が減産したこともブラジル製品の進出を許す理由となった。

フランス、ベルギー、デンマーク等もブラジルよりの輸入をいちじるしく増加した。

- d) 1982年にほぼ66万トン消費した米国は、82/83農年に濃縮オレンジ・ジュースの国内生産が467千トンに止まったためブラジル製品 256千トンを探し国内供給量の不足を補った。
- e) 以上の状況下で1983年度のキャリー・オーバーは1970年以降最低のレベルに落ち、新たな降霜を待つまでもなく価格上昇の条件を作っていた。
- f) 1983年12月26、27の両日、米国フロリダ州のオレンジ園は再度の霜害を受け、84年に入るとカンクロの蔓延により、その抜根対策まで加ったため約25%が潰滅したといわれている。

このため米国の需要が増加するが、これと平行して世界の需要も増加し、ブラジルの濃縮オレンジ・ジュース輸出は90万トンに達し、輸出金額は14億ドルに到達した。

この様な状況下でCACEX（ブラジル銀行貿易管理局）はこの国際市場を有効に利用すべく輸出価格を年頭初のトン当たり1,100ドルより1,300ドル、1,450ドル、1,600ドルへと改訂し、84年7月には最高の1,700ドルまでに上げると同時に、それまで与えてきたすべての補助的措置を中止した。

ハ) 国内市場及び価格

国際市場の高騰により国内における生産者受取価格も実質的な増加をみせ、いわゆるオレンジ・ブームが出現した。生産地帯のサンパウロ州奥地方では農地価格が急騰したり、自動車販売代理店の在庫が底をつくなどオレンジ景気を裏付けるニュースが流された。新規植付けは更に拡大されており世界の需要が無限に続いていくような空気を作っている。

しかし米国の霜害が毎年発生するという保証はどこにもなく、世界の需要も価格がある程度までに到達すると他の代替品へ移行する可能性が大きい。更にこのオレンジ・ブームはブラジルだけの現象ではなく、規模は小さくとも地中海諸国、中米諸国等オレンジを生産している国には同様のブームが訪れており、新規植付けは世界的

表 243 オレンジ生産者受取価格
CR/箱

月別	1983	1984
1	539	3,681
2	477	3,962
3	520	4,307
4	517	4,235
5	562	4,519
6	633	4,530
7	887	4,872
8	968	6,231
9	954	7,789
10	1,283	10,107
11	1,859	11,668
12	2,083	12,427

出所：IEA

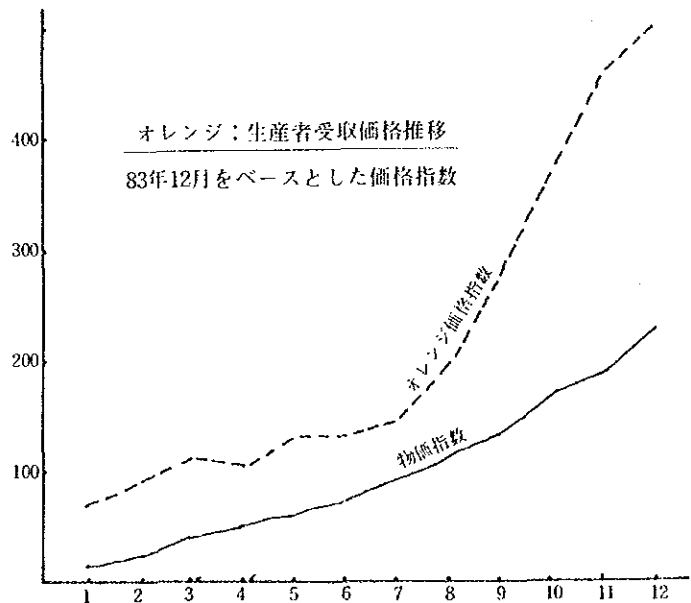


表 244

オレンジ：生産コスト 第1年目 1 ha 当り 200本植

区 分		84 / 85		85 / 86	
A-作業コスト	所要日数	単価 Cr\$	金額 Cr\$	単価 Cr\$	金額 Cr\$
1) 一般労賃	25.34	6.9	174.8	21.7	549.9
2) トラクター運転手	3.99	9.9	39.7	27.4	109.3
3) 4輪トラクター	3.99	65.3	260.5	191.8	765.1
4) 耕 起	0.37	3.6	1.3	12.4	4.6
5) 砕 土	0.50	7.6	3.8	37.2	18.6
6) 防 除	0.98	14.2	13.9	73.3	71.9
7) 運 搬	0.94	4.4	4.1	14.5	13.6
8) ー ー	1.20	3.6	4.3	11.3	13.5
小 計	—	—	502.4	—	1,546.5
B-					
1) 種 苗	220.00 U	3.5 / U	770.0	15.0 / U	3,300.0
2) 配 合 肥 料	0.10 T	409.7 / T	41.0	1,386.0 / T	138.6
3) 硫 安 灰	0.08 T	322.2 / T	25.8	1,364.2 / T	109.1
4) 石 灰	0.826 T	24.4 / T	20.2	114.8 / T	94.8
5) 殺 菌 剤	0.50 kg	10.6 / kg	5.3	32.0 / kg	16.0
6) 硫 黄 剤	1.60 kg	3.5 / kg	5.5	12.3 / kg	19.6
7) 展 着 剤	0.75 ℓ	5.7 / ℓ	4.3	15.1 / ℓ	11.3
8) 殺 虫 剤	2.00 ℓ	20.7 / ℓ	41.4	63.5 / ℓ	127.1
9) ス プ レ ー 油	2.00 ℓ	5.0 / ℓ	10.1	12.4 / ℓ	24.7
10) 殺 蟻 剤	3.00 kg	2.3 / kg	6.8	10.0 / kg	30.1
小 計	—	—	930.3	—	3,871.3
直 接 費 計	—	—	1,432.8	—	5,417.8
C-間 接 費					
1) 機 械 償 却 費			69.3		267.2
2) 銀 行 利 息 生 産 費			1,540.3		5,905.4
〃 固 定 投 資			22.5		—
合 計	—	—	3,064.9	—	11,590.4

出所：IEA

表 245

オレンジ：生産コスト 第2年目

区 分		84 / 85		85 / 86	
A-作業コスト	所要日数	単価 Cr\$	金額 Cr\$	単価 Cr\$	金額 Cr\$
1) 一般労賃	13.13	6.9	90.6	21.7	284.9
2) トラクター運転手	1.85	9.9	18.4	27.4	50.7
3) 4輪トラクター	1.85	65.3	120.8	191.8	354.7
4) 耕 起	0.56	7.6	4.3	37.2	20.8
5) 砕 土	0.31	4.4	1.4	14.5	4.5
6) 防 除	0.98	14.2	13.9	73.3	71.9
小 計	—	—	249.3	—	787.5
B-資 材 コ ス ト					
1) 種 苗	30.00 U	3.5 / U	105.0	15.0 / U	450.0
2) 配 合 肥 料	0.10 T	409.7 / T	41.0	1,386.0 / T	138.6
3) 殺 菌 剤	1.00 kg	10.6 / kg	10.6	32.0 / kg	32.0
4) 硫 黄 剤	2.00 kg	3.5 / kg	6.9	12.3 / kg	24.5
5) 展 着 剤	1.50 ℓ	5.7 / ℓ	8.5	15.1 / ℓ	22.6
6) 殺 虫 剤	1.00 ℓ	20.7 / ℓ	20.7	63.5 / ℓ	63.5
7) ス プ レ ー 油	4.00 ℓ	5.0 / ℓ	20.1	12.4 / ℓ	49.4
8) 殺 蟻 剤	3.00 kg	2.3 / kg	6.8	10.0 / kg	30.1
小 計	—	—	219.7	—	810.8
直 接 費 計	—	—	469.0	—	1,598.3
C-間 接 費					
1) 機 械 償 却 費			39.0		166.7
2) 銀 行 利 息 生 産 費			504.2	—	1,742.2
〃 固 定 投 資			12.3		—
合 計	—	—	1,024.5	—	3,507.2

出所：IEA

表 246

オレンジ：生産コスト 第3年目

区	分	84/85		85/86		
		所要日数	単価 Cr\$	金額 Cr\$	単価 Cr\$	金額 Cr\$
A-	作業コスト					
1)	一般労賃	15.14	6.9	104.5	21.7	328.5
2)	トラクター運転手	2.18	9.9	21.7	27.4	59.7
3)	4輪トラクター	2.18	65.3	142.3	191.8	418.0
4)	耕土	0.61	7.6	4.7	37.2	22.7
5)	運搬	0.41	4.4	1.8	14.5	5.9
6)	防除	1.16	14.2	16.4	73.3	85.1
	小計	—	—	291.4	—	920.0
B-	資材コスト					
1)	配合肥料	0.275T	409.7/T	112.7	1,386.0/T	381.1
2)	殺菌剤	2.00 kg	10.6/kg	21.2	32.0/kg	64.1
3)	硫黄	5.00 kg	3.5/kg	17.3	12.3/kg	61.3
4)	展着剤	2.30 ℓ	5.7/ℓ	13.1	15.1/ℓ	34.6
5)	殺虫剤	3.00 ℓ	20.7/ℓ	62.1	63.5/ℓ	190.6
6)	スプレー	2.26 ℓ	5.0/ℓ	11.4	12.4/ℓ	27.9
7)	殺蟻剤	3.00 kg	2.3/kg	6.8	10.0/kg	30.1
	小計	—	—	244.6	—	789.8
	直接費計	—	—	532.0	—	1,709.8
C-	間接コスト					
1)	機械償却費			45.8		195.2
2)	銀行利息 生産費			576.2		1,863.6
	〃 固定投資			14.5		—
	合計	—	—	1,172.5	—	3,768.6

出所：IEA

表 247

オレンジ：生産コスト 第4年目

Cr\$

区	分	84/85		85/86		
		所要日数	単価	金額	単価	金額
A-	作業コスト					
1)	一般労賃	22.76	6.9	157.0	21.7	493.9
2)	トラクター運転手	2.60	9.9	25.9	27.4	71.2
3)	4輪トラクター	2.60	65.3	169.8	191.8	498.6
4)	耕起	0.66	7.6	5.0	37.2	24.6
5)	砕土	0.62	4.4	2.7	14.5	9.0
6)	防除	1.32	14.2	18.7	73.3	96.8
	小計	—	—	379.1	—	1,194.0
B-	資材コスト					
1)	配合肥料	0.40 T	409.7/T	163.9	1,386.0/T	554.4
2)	石灰	0.826T	24.4/T	20.2	114.8/T	94.8
3)	殺菌剤	4.00 kg	10.6/kg	42.5	32.0/kg	128.2
4)	硫黄	8.00 kg	3.5/kg	27.7	12.3/kg	98.0
5)	展着剤	3.00 ℓ	5.7/ℓ	17.0	15.1/ℓ	45.2
6)	殺虫剤	4.00 ℓ	20.7/ℓ	82.8	63.5/ℓ	254.2
7)	スプレー油	8.00 ℓ	5.0/ℓ	40.3	12.4/ℓ	98.9
8)	微量成分	14.72 kg	1.7/kg	25.1	10.7/kg	157.7
9)	殺蟻剤	3.00 kg	2.3/kg	6.8	10.0/kg	30.1
	小計	—	—	426.3	—	1,461.4
	直接費計	—	—	805.4	—	2,655.4
C-	間接費					
1)	機械償却費			53.7		226.7
2)	銀行利息 生産費			865.8		2,894.4
	〃 固定投資			17.1		—
	合計	—	—	1,742.1	—	5,776.5

出所：IEA

に増加している。

この様な状況を踏まえ、輸出市場の多様化、新しい市場の開拓、マーケティング、安定した貿易政策（たとえばコーヒーの輸出にみられるような輸出契約による安定供給）等を慎重に研究実施し、来るべき生産過剰の時期に備える必要がある。

ニ) 生産コスト

サンパウロ州農務局農業経済研究所が発表した各造成年度別の84/85及び85/86農年コスト予想は表244~248の通りである。

表 248 オレンジ：生産コスト 1 ha あたり 200本、400箱生産の場合 Cr\$

区	分	84/85		85/86	
		単 価	金 額	単 価	金 額
A- 作業コスト					
1) 一般労賃	24.60	6.9	169.7	21.7	533.8
2) トラクター運転手	4.30	7.7	42.8	27.4	117.8
3) 4輪トラクター	3.06	65.3	199.8	191.8	586.8
4) 砕土	0.83	7.6	6.3	37.2	30.9
5) 運搬	1.03	4.4	4.5	14.5	14.9
6) 防除	1.20	14.2	17.0	73.3	88.0
小計	—	—	440.2	—	1,372.2
B- 資材コスト					
1) 配合肥料	0.515T	409.7/T	211.0	1,386.0/T	713.8
2) 石灰	0.605T	24.4/T	14.8	114.8/T	69.5
3) 微量成分	22.80 kg	7.7/kg	174.8	29.9/kg	682.3
4) 乳剤	8.00 ℓ	5.0/ℓ	40.3	12.4/ℓ	98.9
5) 殺菌剤	4.30 kg	11.1/kg	47.6	47.8/kg	205.6
6) 硫黄	16.60 kg	3.5/kg	57.5	12.3/kg	203.4
7) 殺虫剤	10.30 ℓ	16.9/ℓ	174.2	61.0/ℓ	628.8
8) 展着剤	2.90 ℓ	5.7/ℓ	16.5	15.1/ℓ	43.7
9) 殺蟻剤	3.00 kg	2.3/kg	6.8	10.0/kg	30.1
10) ハイ馳除剤	5.00 ℓ	15.6/ℓ	78.2	47.2/ℓ	235.9
11) 殺虫剤	0.45 ℓ	20.0/ℓ	9.0	60.6/ℓ	27.5
小計	—	—	830.5	—	2,939.2
直接費計	—	—	1,270.7	—	4,311.4
C- 間接費					
1) 機械償却費			59.5		246.7
2) 果樹園償却費			282.7		962.1
3) 銀行利息 生産費			1,366.0		4,699.4
〃 固定投資			19.0		—
合計	—	—	2,997.9	—	10,219.7

出所：IEA

3.5.2 バナナ

イ) 生産

ブラジルのバナナ生産はほとんど全州に普及しているが、国内の主要産地はバイア、サンパウロ、セアラ及びミナス・ジェライス州の4州が大きく、全国生産の半分近くを占めており、また海外への輸出はサンパウロ州がほとんど全量を占めているのが、ブラジルのバナナ産業の特徴である。全国的な生産傾向は面積において徐々に増加、生産量は83年に減少したあと84年に大巾な増加があった。現在の生産量は房数で469.9千房、重量にして約7,500千トンである。